



———— 2022 ————

———— 日本連句協会 ————

連句年鑑

令和四年版

連句年鑑（令和四年版）目次

（表紙題字・横田思案人）

一般社団法人日本連句協会令和四年度総会・全国連句大会の記	7
第三十五回国民文化祭・みやざき2020	
第二十回全国障がい者芸術・文化祭みやざき大会	
「連句の祭典」連句のルーツの神々と詠う 中止に至る報告	9
第三十六回国民文化祭・わかやま2021	
第二十一回全国障がい者芸術・文化祭わかやま大会	
「連句の祭典」報告	14
論	
他者に出会う——短歌の視点から——	金川 宏 18
私の好きな芭蕉の言葉	牛木 辰男 27
新庄と澁谷家	澁谷 盛興 37
評	
工	
ツ	
セ	
イ	
回顧	
令和三年の連句界	林 転石 46

（カット・秋葉初枝）

作品

愛知県連句協会
 「秋 茜」……………53
 阿吽の会
 「回転木馬」……………56
 赤のままの会
 「御賀玉の美」……………57
 浅草連句会
 「土に汚れて」……………60
 あした連句会
 「初蝶の」……………61
 「年の空」……………62
 「父の日や」……………63
 「湖の」……………64
 あした芭蕉記念館連句会
 「目借時」……………65
 あした梶の葉連句会
 「枯野」……………66
 あした本庄連句会
 「成す事を」……………67
 あした・くさくさ・さくら草連句
 会合同
 「秋果盛られて」……………68

蛙門会
 「子午線をなぞり」……………71
 伊賀連句会いがまち座
 「厳寒や」……………72
 「五輪会場」……………73
 伊豆芭蕉堂連句会
 「月白の港」……………74
 伊勢原連句会
 「一會座会」……………75
 「犬駆け回る」……………76
 伊東連句会「風」
 「夕端居」……………77
 「七月や」……………78
 いなみ連句の会
 「花栗や」……………79
 大阪連句懇話会
 「紫陽花の青」……………80
 おおすみ連句会
 「水底の石」……………81
 海市の会
 「一姫二太郎」……………82
 解 籾
 「影ほふし」……………83
 「初しぐれ」……………84

鹿児島県連句協会
 「故郷もとき」……………85
 桂の会
 「遊歩道」……………86
 「糸遊や」……………87
 菊名連句会
 「春 嵐」……………88
 くさくき
 「荒海に」……………89
 くさくき北九州支部
 「石路の花」……………90
 「浮寝鳥」……………91
 古都連句会
 「京を抱く」……………92
 粕連ささなみ会
 「鮎のぼる」……………93
 ころも連句会
 「嬉々として」……………94
 「川床や」……………95
 さくら草連句会
 「春塵を」……………96
 「花 篝」……………97
 サザン
 「雑煮談義」……………98

詩興派連句
 「ラビンス」「少年は」……………99
 猪の会
 「初虹や」……………100
 獅子門
 「獅子門支考忌追善俳諧」……………103
 「獅子門翁忌追善俳諧」……………104
 獅子門友楽社
 「翁忌追善俳諧」……………105
 獅子門藜杖社
 「翁忌追善俳諧」……………106
 「良夜かな」……………107
 獅子門麗水社
 「翁忌追善俳諧」……………108
 下町連句会
 「シカゴに轟け」……………109
 夙水会
 「薫風や」……………110
 樹水連句会
 「袖子風呂」……………111
 湘南吟社
 「宗祇の干支」……………112
 白老連句を楽しむ会
 「星ひとつ」……………115

泗楽連句会	
「星月夜」……………	116
裾野連句会	
「秋風や」……………	117
「そぞろ寒」……………	118
宗祇白河連句会	
「遠見こそ」……………	119
草門会	
「凍てをほどいて」……………	120
武生連句の会	
「ズワイガニ解禁」……………	121
遅刻坂連句会	
「初紅葉」……………	122
「ダニューブの波」……………	123
「縄文の炎」……………	124
「星流る」……………	125
中央連句会	
「雁の来る時」……………	126
千代の会	
「寺カフェ」……………	127
「十月振り」……………	128
筑波連句会	
「花辛夷」……………	129

筑波連句会 北陸支部	
「飛天」……………	130
つばさ連句会	
「傘ひとつ」……………	131
桃雅会	
「入道雲」……………	132
「木漏れ日や」……………	133
「草枕」……………	134
東京かびれ	
「人の世を」……………	135
「虫の夜や」……………	136
桃天樹喰緊連句会	
「八千草や」……………	137
稲門連句会「西北の風」	
「鏡割」……………	138
徳島県連句協会	
「浮かれ猫」……………	139
都心連句会	
「雪煙」……………	140
「ソーシャルディスタンス」	
の巻……………	142
「紅葉忌」……………	143
奈良県連句協会	
「姫小松」……………	144

台北・日台連句	
「自由民主と」……………	145
日本連句協会千葉県支部	
「語る羅漢」……………	146
猫の目連句	
「銀座カフェ」……………	147
ねじまき連句会	
「十葉や」……………	148
野田連句会	
「青鮫が」……………	149
「クーベルタンの髭」……………	150
白塔歌仙会	
「忘るまじ」……………	151
巴世里連句会	
「鴟高音」……………	152
花音	
「熊野行」……………	153
浜風連句会	
「山城」……………	154
ひなの会	
「リトマス試験紙」……………	157
ひねもす連句会	
「恋もまた」……………	158

ふたば会	
「夏草や」……………	159
北杜連句塾	
「かるく打水」……………	162
ほればれ座	
「廃校の空」……………	163
窓連句会	
「地に伏してなを」……………	164
水無月会連句会	
「合歓咲くや」……………	165
南さつま連句会	
「夏見舞」……………	166
宮城県連句協会	
「もの種を」……………	167
柳瀬川連句会	
「成木責」……………	168
夢夢連句	
「海に溺れて」……………	169
「木の匂」……………	170
横浜ベイサイド連句会	
「うす墨の文」……………	171
四葩	
「忘れ帽子」……………	172

ラビロス連句会

「冬 座敷」……………173

竜神連句会

「寿 楽 荘」……………174

連句会ひらめき

「少 年 期」……………175

若笹連句会

「涅槃 西風」……………176

個人作品

出原樹音「土産かな」……………179

梅村光明「クリムトの金」……………180

大久保風子「星のなき夜」……………181

大山とし子「立冬や」……………182

岡本貞子「花びらおどる」……………183

勝又丘女「むほとせの賀」……………184

木戸ミサ「鯖寿司を」……………187

木之下みなみ「夕薄暑」……………188

五郎丸照子「翡翠」……………189

佐々木リサ「ポケットに」……………190

瀧村小奈生「ホールインワン」……………191

服部秋扇「点描として」……………192

越村清良「雨師」……………193

林 転石「手にする盃」……………194

平井繁樹「重低音のひびき」……………195

福永千晴「左手のための」……………196

吉田酔山「君行くや」……………197

学生の作品

・小学生

徳島・夏休み子ども連句教室

「心 太」……………201

「ブルーハワイ」……………202

・国民文化祭わかやま2021

小・中学生

表合せ六句「三が日」……………203

三つ物 十二卷……………203

・大学生

東京・創価大学

「星のつどひ」……………206

「天の川」……………206

「星の手向け」……………207

「星のちぎり」……………207

富山・富山大学

「自転車で」……………208

「手袋買いに」……………208

東京・日本大学芸術学部

「猿 腕」……………209

地方連句組織

一般社団法人日本連句協会 定款

年鑑担当

△編集後記▽

……………大久保風子・木之下みなみ

一般社団法人日本連句協会

令和四年度総会・全国連句大会の記



▲リモート参加者 ▶高尾秀四郎会長

コロナ禍も三年目に入った令和四年三月二十日（日）、両国の「江戸東京博物館」会議室にて、令和四年度総会・及び全国連句大会が開催された。国技館は大阪春場所中、ひっそりとしている。明暦の大火の後、急ぎ架橋されたという両国橋は、今も健在で人々の暮しを支えている。芭蕉もこの橋を渡ったものかと思いを馳せながら会場へ急いだ。会場は新型コロナウイルス感染症対策が施され、十分な距離を取っての設営である。リアルでの参加32名、リモートでは総会20名、連句会24名の参加、委任状224名。

吉田酔山副会長の司会で定刻十一時開会。高尾秀四郎会長は、「二年続けて総会・連句大会が中止となり、残念な思いでしたが、今年は何とか開催に漕ぎつけました。苦境の連句会に、リモート連句が導入されたことは朗報でした。今後も連句の普及に努力していく所存です」と熱く語られ、早速、三議案の審議に移る。定款第6条により会長が議長。リモート参加者の意見聴取については、リモート担当の平林香織理事が対応した。

◆第一号議案…令和三年度事業報告及び同年度決算報告の件
全会員へ送付済みのレジュメにしたがい、林転石理事長

(会計兼務)より、①年6回の会報発行②連句年鑑3年版の発行、③総会・連句大会のコロナ禍による中止④国文祭参加⑤地方大会への参加と支援⑥協会の活性化と効率化について報告。次いで決算案について、渡部春水・東浦佳子両監事を代表し渡部氏から会計処理が正しくなされている旨の監査報告を受け、全会一致をもって承認された。

吉田副会長(国文祭担当)からは、昨年はコロナ禍で一年延びた宮崎国文祭と予定通り開催された和歌山国文祭と、一年に二つ開催されるといふ異例の事態になったが、其々の開催地の皆様方からの甚大なご協力、ご支援が有難く、ご参加くださった皆様へ深い感謝の辞が述べられた。

◆**第二号議案…令和四年度事業計画案及び同年度予算案の件**
同じく林理事長が例年に倣う事業計画と予算案を報告。

今年、協会四十周年に当たるため、十年ごとに発行してきた『現代連句集Ⅳ』の発行も進められており、担当の小池正博副会長より説明があった。今年開催の沖繩国文祭については吉田氏より、地元南城市の皆様方に熱い支援を受けていること、募吟、現地参加への呼びかけがあった。

なお林氏より年毎の会員減少に伴うため、会員名簿は毎

年作成が必要であること、国文祭への援助、リモート機器への対応など、支出が増えるが連句の活性化、PRに伴う支出であることを説明され、これも審議の結果承認された。(二号議案に対して委任状による反対意見が一名あった)。

◆**第三号議案…令和四年度臨時の人事案の件**

昨年は林転石氏が会計と理事長を兼務されていたが、会計業務に岡本遊風氏が選任。これも全会一致で承認された。総会終了後、一時会場を離れて、外のラウンジへ出て、美味しい昼食。その後、会場では七席、リモートでは四席に分かれて久しぶりの実作会を楽しんだ。十六時閉会。コロナ禍が連句にもたらしたものは何だろう、目に見えない連句の底力に背中を押されるように会場を後にした。

(常任理事・木之下みなみ記)

(同文を協会会報「連句」令和四年六月号(第246号)にも掲載)

第三十五回国民文化祭・みやざき2020

第二十回全国障がい者芸術・文化祭みやざき大会

「連句の祭典」連句のルーツの神々と詠う

中止に至る報告

第35回国民文化祭・みやざき2020の連句の祭典は結局中止となりましたが、ここに協力を賜った方々に感謝の心を込めて簡単にご報告いたします。国文祭の正式名称は長いので、本文では場合によって国文祭或は連句の祭典と呼ぶことを断っておきます。

私が国文祭宮崎2020のために費やした年月は約8年5か月でした。中止となった今になって振り返ると、それは決して無駄だったとは思っていません。連句の木を植える精神で宮崎市と日南市に連句教室を開き、多くの地元の人と連句を通して知り合うことが出来ました。その内の数人とは今も交流があります。

国文祭宮崎が延期・中止となった背景にはコロナ禍がありました。私が国文祭京都2011の準備を担当した年に

は、東北大震災・津波・原発事故が起きて、一時は国文祭の実行が危ぶまれました。然しそれは実行されました。震災と津波が一過性であるのに対して、コロナは原発事故のように果てしなく未知の時空に展開し、今も先が読めません。コロナのような感染症は原爆と同じように文明を変えうる問題だと実感しています。

我々は果敢にもリモート連句に挑戦して連句界内部の行動変容に努め、なんとか国文祭の実現につなげようとしたが、しかし結局日南市が中止を決定せざるを得なかったことはやむを得ない判断であったと理解します。

始まり

2013年1月28日、河野俊嗣宮崎県知事が2020年に国文祭を宮崎で開催したいという要望書を文化庁に提出。宮崎県では2012年から2020年までを「記紀編纂1300年記念事業」期間とし、その総集編として2020年に国文祭を開きたいという趣旨と解釈される。

私は準備のための行動を開始した。宮崎県の全市町村の役場にファックスで、連句会があるかどうか問い合わせた。

答えはゼロであった。5月東京の黒潮同窓会（日南高校卒業生の同窓会）に宮崎県の河野知事が来て挨拶した。国文祭の申請をしたことも話題になった。日南市からは観光課課長が同行してきていた。彼らに挨拶。それから毎月帰省するたびに日南市の生涯学習課・国文祭準備担当の方と会ってきた。宮崎県に連句の木を植える気持ちだったが、砂漠に木を植えるような作業を想像した。

2016年11月、国文祭宮崎2020の内定が発表された。それを受けて宮崎県庁を訪ねた。日南市出身の女性が担当で、丁寧に相談に乗ってくれた。俳句・短歌の雑誌をはじめ、俳句会、短歌会、芸術団体の会長などを紹介してくれた。しかし彼らの協力を得るのは非常に困難であった。

西都市西都原の考古博物館入倉館長が日南市出身で、彼が人脈を教えてくれた。レスリング協会会長・高校の文芸部の先生・日南市の小村記念館の館長を紹介してくれた。この記念館で毎月の連句教室を開けることになった。

油津の吾平津神社の宮司が高校の同級生で、彼が俳句をよく作っている同級生の山田君を紹介してくれた。彼を核にして日南市の月次連句会が出来た。宮崎市在住の日南市

出身者の会で同級生の中倉さんに会い、彼女を核にして宮崎市の連句会が出来た。彼女が市民文化プラザで月次連句会を開けるように準備してくれた。

2018年3月21日、宮崎県連句協会設立大会を鶴戸神社において行つた。連句協会からは8名の出席。

2019年、県の宣伝活動は低調であったが、国文祭を翌年に控えてようやく市民の反応が目覚めてきた。

1月10日、ラジオ宮崎の番組で連句を語る。

6月6日、日南市での開催が正式に決定された。

6月、宮崎日日新聞で連句が紹介された。

9月20日、詩人クラブ「となり」で連句ワークショップ

11月8日、日南高校の宮崎県教育研究セミナーで連句ワ

ークショップ

12月3日、日南高校の授業で連句ワークショップ

2020年1月12日（日）、プレ大会、於日南市小村記念館。日南市の正式決定がようやく前年6月6日に出たこ

とから、プレ大会の準備もままならぬところ、地元の連句人との交流を目標に開催。連句協会からの出席者は三名。

2020年5月1日、募吟締切日を5月15日から8月15

日へ変更するとともに、リモート連句の勧めを発信した。

5月、連句の祭典を2021年に延期とするか中止とするか、それとも今年度中に実行するかという三択が県の指導で提示された。既にオリンピックの1年延期が決まっています、連句の祭典もそれに合わせることでとなり、延期の種目の準備作業は休眠状態となった。

9月、翌年に延期する国文祭の期間を7月3日～10月17日にする旨日南市の決定がなされた。オリンピック・パラリンピックの予定や和歌山県の連句の祭典の予定、更に宮崎県の台風の記録をもとに検討して、日本連句協会理事会に諮った上で、宮崎の連句の祭典の実行を2021年8月22日と決定した。

10月、連句の祭典実行について、日南市より実施規模を縮小する（人数制限50人）方向で調整することになった。

現地参加型とメールによるリモート参加型の併用による実施案が練られることとなった。

一方、作品は8月15日のメロまで「歌仙」480巻の応募があり、審査が始められた。選者会議は12月6日、東京アクセア神保町貸会議室で7名の選者全員出席の下に開

催され、一般の部は文部科学大臣賞以下12の賞が決定した。ジュニアの部は表合せ六句に37巻の応募があり、宮崎県連句協会より特別賞・奨励賞・努力賞が決定。翌年の「連句の祭典」には入選作品集配布予定で編集されることになった。

2021年、再出発

2021年4月、延期されていた連句の祭典の準備が日南市として再始動した。

7月、コロナのために日程調整に手間取り、連句の祭典の正式案内が出たのは7月になった。応募・調整を経たのち、7月末日での参加者は、現地での参加者22名、リモートでの参加者24名（合計47名）となった。

8月22日の本大会中止

8月に入ると感染力が強い変異ウイルス「デルタ株」が広がり、緊急事態宣言・蔓延防止等特別措置適用の都道府県が増え、期間が8月31日までとなった。「不要不急の外出を控えるように」という要請、県をまたぐ行動の自粛が

呼びかけられるようになっていった。

こうした状況の中、8月3日、日南市市長による「中止の判断」が出た。

本大会で送り渡す「連句」の旗は和歌山県に郵送することになった。

8月4日～5日、日南市の担当者は現地参加者とりモーター参加者47名全員に電話で中止の連絡をした。

8月6日、国文祭を中止する旨、市の公式発表がネットで公開された。

以上が始めから中止までの経過の概略です。

その後連句の祭典の締めくくりとして「入選作品集」が出され、賞は各自に郵送されました。「入選作品集」にあるべき作品がなかったり誤字などがあったり、たいへん心苦しい結果になりましたことをこの場をお借りして心よりお詫び申し上げます。

最後に、この度国文祭宮崎の準備担当者として、連句協会の将来のために言っておくべきだと感じたことを2点だけ

簡単に述べさせていただきます。

1. 国文祭の準備について

国文祭の準備には平均3～4年の時間がかかります。担当一人に任せきりにしないで分担し、そして協力する体制が必要です。協会として協力体制を作る必要があると思います。

2. 国文祭を一過性にしない

日本連句協会が国民文化祭に参加していけば、半世紀以内で全国津々浦々まで連句を普及できるはずなのです。しかし、国文祭の後もその県で連句活動を続ける人が無ければ、連句普及という目的の種はそこで死んでしまいます。一過性にしないような工夫が必要だという事は、私が国文祭京都2011を担当した時も言われました。

連句の木を植える精神こそが最も重要なのです。

(日本連句協会 国民文化祭みやざき担当 近藤蕉肝)

追記

中止になってしまった「国文祭みやざき」があまりにも残念というので、国文祭の枠を離れてリモートで開催して

はどうかという声が起こり、「フェニックス連句会」が企画されました。日本連句協会の会員をはじめ日本全国及び世界中の連句詩人の参加を募り実行された。

10月16日、呼びかけ人…近藤蕉肝 助け人…山中たけを、五郎丸照子、静寿美子、平林香織他 後援…日本連句協会。当日は38人の参加で8席に分かれた。

座名には山幸彦・海幸彦・天照・須佐之男等、国文祭みやざき「連句の祭典」の副題「連句のルーツの神々と詠う」にちなんだ席が用意された。各座の作品は、令和4年の日本連句協会会報「連句」245号（4月号）と246号（6月号）に掲載されている。



国民文化祭みやざき2020

連句の祭典入選作品集の表紙絵より

山田翠風 画

第三十六回国民文化祭・わかやま2021

第二十一回全国障がい者芸術・文化祭わかやま大会

「連句の祭典」報告

国民文化祭の翌日、熊野古道（中辺路）を歩いた。バスで牛馬童子口までゆき、道標に従って古道に入る。いにしえの熊野参詣の人々もこの道をたどったのだらうかと古代幻想にふけりながら急坂を登っていくと、やがて花山法皇の伝説が残る箸折峠に着く。お目当ての牛馬童子像はそこから少し脇道にそれたところにある。憧れの牛馬童子さまとの対面を果たし、近露の里へと降りてゆく。その日は継桜王子まで歩いたが、境内に鬱蒼と聳えている野中一方杉は明治の神社合祀のときに切られそうになったのを南方熊楠の反対運動で残されたことでも知られている。

一 開催までの経緯

「紀の国わかやま文化祭2021」（国民文化祭・わかやま）の「連句の祭典」は十月三十・三十一日に和歌山県上富田町で開催された。上富田（かみとんだ）は熊野古道の入り口に当たり、口熊野（くちくまの）と呼ばれる。当日の参加者はリアル四十三名、リモート五名、計四十八名。

募吟は一般の部（二十韻）四八五巻、ジュニアの部（三つ物・表合せ六句）二一九巻。ご支援・ご参加いただいたみなさまに深く御礼申し上げます。

国文祭の準備にとりかかる時点で、和歌山県には連句グループが存在しなかったもので、どのように進めていけばいいのか、手探りの状態だった。今後の参考になるかどうかわからないが、少し詳しく経過報告しておきたい。

開催場所の決定に関しては連句協会の高尾氏と県企画部の西畑氏のあいだで何度も調整があったが、開催場所が最終的に決まるまで待っていても準備期間が短くなるばかりなので、まず和歌山市で連句会を立ち上げることにした。

二〇一九年四月、最初の連句会を和歌山県民文化会館で開催。和歌山県庁の真向かいの会場で、このあと県庁に掲げられている「紀の国わかやま文化祭まであと××日」という表示を見ながら本番までの準備を進めることになる。募集は地元のミニコミ誌「ニュース和歌山」にインターネットを通じて案内を出したところ、和歌山市内から四人の参加があった。大阪・奈良からの応援を含め八名で連句の解説と実作を行う。この会（連句とびあ和歌山）は順調に継続し、この年五回開催することができた。七月の第三回目

では、会場付近の和歌山県立近代美術館の展覧会「ニューヨーク・アートシーン」を見学したあと、発句を持ち寄り連句会を開いた。ちなみに同美術館は萩原朔太郎の『月に吠える』の挿絵を描いた田中恭吉の作品を所蔵している。

八月、開催地が上富田町に決定し、西畑和彦氏（県企画部・文化学術課）、那須文彦氏（上富田町教育委員会・生涯学習課）、連句協会から高尾秀四郎・小池正博のメンバーで同町にて顔合わせをする。上富田町ではこれまでスポーツ関係のイベントなどの経験があり、町長室には二〇一九年のラグビーワールドカップでナミビアの選手を受け入れたときの同国の旗が飾ってあった。

和歌山県は紀北・紀中・紀南と南北に長く、それぞれ風土と文化が異なっている。和歌山市と上富田町には連句グループができたので、あと新宮市にも拠点ができないか考えた。折から佐藤春夫記念館の主催で「熊野・新宮で歌仙を巻く」というイベントが十一月にあり、『歌仙はすごい』の著者である長谷川權・辻原登・永田和宏の三氏が新宮にやってくるという。さっそく参加申し込みをして、当日は佐藤春夫記念館を訪れ、館長の辻本雄一氏とも名刺交換したが、新宮に連句グループを作る夢は結局果たせなかった。

二〇二〇年一月に上富田町にて連句会を立ち上げた。「はじめの連句会・上富田」という会名で、第一回には上富田町から三名、新宮市から一名、和歌山市から二名、大阪から私を含め二名。上富田町教育委員会の二名が加わって十名で二十韻を巻く。このあとコロナ禍がはじまり、第二回が開催できたのは七月で、水をさされたのは残念だった。四月、「和歌山県の連句を育てる会」規約施行、会長（松井孝恵）、副会長（金川宏・田中利典）、会計（小倉英樹）、事務局（那須文彦）の体制が決定。また、地元紙「わかやま新報」（四月四日付）に「連句」のことが紹介された。七月、形式「二十韻」に決定。八月、募集要項決定。九月、選者依頼。選者申請書（審査員個票）県あて提出。十二月、募集要項の發送。同じく十二月、「第四十五回全国高校総文祭プレ大会」が蜜柑で有名な有田市で開催され、金川宏氏と参加。俳句分科会で県下高校の文芸部顧問に「ジュニアの部」の案内を配布。

二〇二一年に入り一月に「けんぶんDE体験教室」（県民文化会館主催の市民向け講座）の連句講座を担当。二月からいよいよ募吟受付が開始。協会報二月号及びHPに案内掲載。地元紙「紀伊民報」（三月九日）に国文祭に向け

ての紹介記事が掲載された。六月、「連句の祭典」開催要項発送（連句協会報に同封）。八月、選考会議（選者会議）をリモートで開催。

二 「連句の祭典」の開催

十月三十日の吟行会には「A熊野古道」「B南方熊楠を訪ねて」「C白浜の魅力」の三コースが用意されたが、成したのはAコースのみとなった。当日の参加者は二十六人。白浜駅からバスに乗り、まず稲葉根王子に。次に滝尻王子と熊野古道館を見学。その後、本宮大社に向かう。ボランティアの地元ガイドさんの説明で熊野のことがよくわかった。本宮参拝のあと、聖地・大斎原へ。帰りはすでに暗くなっていた。熊野の夜は漆黒の闇である。

三十一日、「連句の祭典」本番。午前の部はYouTubeで同時配信（限定配信）された。URLは事前に上富田町と連句協会のホームページに掲載されたから、ご覧になった方も多く、会場の雰囲気伝わったので好評であった。開会式、表彰式のあと、記念公演「市ノ瀬夢芝居」が演じられた。例年、上富田町市ノ瀬の春日神社に奉納され、江戸時代から続いている歴史のあるものである。当日の演目は落語でもお馴染みの「置き泥」。「和歌山県の連句を育

てる会」会長の松井氏も登場して、会場を大いに湧かせた。午後の部は連句会で、前述の通り十座、四十八名のご参加。コロナ禍の影響を受けたにもかかわらず、無事に大会を開催することができたのは、上富田町教育委員会の那須氏や「育てる会」の松井氏をはじめとする会員諸氏、上富田町の皆様のご努力の賜物であり、改めて御礼申し上げる。

三 総括と反省点

それまで連句グループ不在の和歌山県内だったが、和歌山市と上富田町の二箇所で開催を立ち上げることができた。あと、紀伊田辺や新宮などにも広がらなかったが、準備期間の制約やコロナ禍のために和歌山県全体を結ぶ連句のネットワークを構築できなかった。

連句会への参加呼びかけはツイッターなどのSNSのほかに、「ニュース和歌山」「わかやま新報」「紀伊民報」などの地元新聞に記事を掲載してもらった。

ジュニアの部については、大学生は一般の部扱いとし、応募資格は小中高校生とした。形式は「三つ物」「表合せ六句」だが、「表合せ」については六句と限定しない方がよいという意見もあった。応募数は直前まで少なかったが、地元の小学校の協力を得て、最終的には多数の作品（三つ

物に集中)が集まったものの、もっと中高生への働きかけが必要だった。また、ジュニアの当日の実作会への参加なしは残念だった。

今後、上富田町では継続して連句会を開催する意向であり、和歌山市内でも「わかやま連句会」を立ち上げて継続して連句会を開催することになっている。和歌山県は有吉佐和子、佐藤春夫、南方熊楠などの作家・民俗学者を輩出し、高野山や熊野古道などの聖地も人々を誘う魅力をもっている。国文祭を契機に紀の国の文芸の新たな展開を願っている。和歌山市にはラーメンの名店も点在しており、グルメの方も楽しみたいだけのことと思う。

(日本連句協会 国民俗文化祭わかやま担当 小池正博)



「連句の祭典」本大会会場・上富田文化会館

他者に出会う

——短歌の視点から——

金 川 宏

連句の第一句である発句には、その場の時宜に叶った挨拶が必要とされています。これに倣い、簡単な自己紹介を兼ねたご挨拶からこの一文を始めさせていただきます。発句は宗匠・貴人・珍客・老人などが詠むべきものとされているようですが、わたしなどはさしずめ珍客の老人といつたところでしょうか。一九五三年、和歌山市の生まれで、いわゆる団塊の世代のすぐ後の世代にあたります。二十代から三十代の後半までは諸誌に短歌作品を発表し、二冊の歌集を出しています。この時分のわたしであれば一応「歌人」と名乗ってもいいように思いますが、その後二〇一八年に三冊目の歌集を出すまで、実に三十年以上作歌から離

れていましたので、目下のわたしはともそう名乗れたものではありません。しかもこの三冊目の歌集『揺れる水のカノン』は、短歌一首に西洋の詩形ソネットを組み合わせるという、歌壇からはまず間違いなく無視される実験的な形式を前面に立てて出版しています。そんな次第で、今や自分のなかでも全く「歌人」という意識はなく、ここではあえて自らの思いに忠実に「新しい詩を求めて模索している人間」とでも名乗っておくことにします。ここで言う「詩」とは、いわゆる自由詩・現代詩といわれているようなものではなく、すべての詩歌のジャンルを含んだうえに、「詩とは何か」という根源的な問いを常に抱えたものとしての「詩」をいいます。それゆえ、創作に向かう意識としては、短歌・俳句・川柳・自由詩・一行詩・短詩、そして自由律などあらゆる形式に全くこだわがありません。い

い年をして何を血迷っているのかといわれそうですが、そんななかで出会ったのが、連句だったわけです。以下、思いのままに綴らせていただきますが、なにしろ経験不足。思い込みも多々あるはずで、これを機にご指摘ご教示いただければ幸いです。

※

三年前の春、「連句とびあ和歌山」という初心者のための連句会に参加しまして、そこで初めて連句というものに出会いました。その翌年国民文化祭が和歌山県で開催されるということで、和歌山に連句の芽を植えて育ててゆか

ために、日本連句協会の小池正博さんが企画開催されたものでした。それ以前、様々なジャンルの短詩型文学関連の本を渉猟するなかで、とても詩性豊かな川柳作家として小池正博という名前を認知しておりましたので、地元紙に案内が出ていたのを見つけたとき、連句というよりは小池さんに会ってみたいな、と思ったわけです。出会いというのは本当に不思議としかいえないもので、たくさんの偶然が重なっています。連句会が終わったあと、和歌山城が見える喫茶店で、ワクワクしながら小池さんのお話を伺ったことを覚えています。この連句会には近隣の大坂や奈良、滋賀から素晴らしい連句人が参加されていて、真剣でありながら和やかな雰囲気の中で初めての連句を巻くことができたのは、とても幸福なことだったと思います。この時

の連衆の方々とはその後もありアルな句会だけでなく文韻でも交流を続けており、日常の楽しみになっております。またこの時、地元から、初心者でわたし以外に三名の方が参加されたのですが、皆さん個性豊かな方ばかりで、連句会でお会いするのがほんとに待ち遠しいです。

※

ところで、連句を始めたきっかけというのは皆それぞれ違うのですが、すでに短歌や俳句や川柳を嗜んでおられて、そのなかで何かの機会に連句に出会われたという方が多いのではないのでしょうか。同じ五音七音の世界でもあるし形も似ていることから、そこには比較的容易に入ってゆけそうな感じがします。ところが、実際に連句を巻いてみると、微妙な違和感が生じてくるように思います。

昨年秋に開催されました第十五回浪速の芭蕉祭で、小池正博さんと、短歌と連句をめぐって対談させていただく機会に恵まれました。そのなかで、地元でかなり長く俳句を

されておられるという方が、初めて「連句とびあ和歌山」に参加された時のことを、エピソードとして少しお話させていただきますました。この方は、座が進むにつれ、次々と転じてゆく連句特有の流れと、自分が考える付句との乖離に、かなり軋みというか苛立ちを感じていたようです。このベテランの俳人に生じていた違和感のことを、今あらためて想像してみますと、やはり長く俳句を続けてこられたというところで、長句であれ短句であれ内容のある句を出さねばという意識があったように思います。そして日頃から、季語を入れたうでで字数をできるだけ削り、さらに切れの効果も使ってゆくという、高度に凝縮された俳句の手法に馴染んでいるため、連句のなかの一句一句（特に平句）は、どうも発句に比べて何か物足りない中途半端なものだ、と感じたのではないのでしょうか。

この、「句の「物足りなさ」「中途半端さ」については、こここのところずっと座右に置いてある、能勢朝次の『連句芸術の性格』のなかに、なるほどと合点のゆく記述がありましたので、紹介させていただきます。

月見る顔の袖重き露 珍碩

秋風の船をこはがる波の音 曲水

雁行く方や白子若松 芭蕉

千部読む花の盛の一身田 珍碩

巡礼死ぬる道のかげろふ 曲水

（芭蕉七部集「ひさご」より）

右の例において、「秋風」の句や「千部読む」の句は、切れ字こそ含んではないが、季節を示す語を持つ長句であるから、発句に似通っており、その表現している世界も発句らしい味も持つてはいるが、それ一句独立した詩とするには、余情における物足りなさがある。私はこれを「付句における非充足的な性格」と考えているのであるが、この非充足的な性格があることが、付合における二句間の情調の交響を生み出す根源であると思うのである。すなわち、自己において完全に充足していないがために、これを充足させようとして、前句または次句に対して働きかけてゆく、そこに自然的に生まれてくるのが、付合の情調交響である

うと思うのである。・・・「月見る」の句においても、「雁行く」の句においても、全く同様であって、自己の充実感を求めて他に働かかけてゆき、そのことによって自己も生き、他をも生かすというあんばいになっっているのである。

件のベテラン俳人が感じた「物足りなさ」を、能勢は付前の人が内容の乏しい平凡な句を付けたとしても、次の人の句がその凡句を過去に遡って輝かせるといふことがよくあります。どんな句も、周りの句の力によって響いている。これを能勢は、「付合いの情調交響」といっています。日頃から二句一章に腐心する俳人は付句においても内容を詰め込もうとしがちです。こういった性格を理解しておくことは、付句の実践に少なからず役立つと思います。

また一方、短歌から連句に入られる方には、さらに厄介な壁が待ち受けているように思います。最近、身近で面白い体験をしました。わたしの高校時代からの友人に、K君

がいます。彼は現在埼玉県在住で、和歌山とは遠く離れているのですが、手紙やメールで頻繁にやり取りをしていて、三日にあげずアララギ風の短歌（ときには俳句）を詠んでは感想を求めてくるというような交信がここ一年ほど続いていました。あるとき、今日は武蔵国分寺跡を見に行ってきたということで、「古寺の礎石を撫でる春の風」という句がメールで送られてきました。七七がなかなか出たこのので俳句にしたのです。それでわたしも、日頃文韻で歌仙を巻いている癖がでたのか、遊びのつもりで「葦咲きぬむ遠き野辺にも」と七七を付け、「古寺や」と切れ字を入れると連句の発句と脇になるよ、とメールを送りかえしたところ、面白そうなのでこのまま続けてみてもいいねという返信が届いたので。聞けば、連歌や俳諧に関連する本もかなり読んだことがあるというので、これは連句仲間が一人増えるかもしれないと期待しながら歌仙を巻き始めることになりました。ところがK君、いつもの短歌の詠みぐせで、どうしても《私》の肉声に執着してしまうため、うまく世界を転じてゆくことができないのです。前句は一応見るわけですが、いざ付けようとすると、自己の強

いい思い入れや人生観のようなものがまず言葉として出てきてしまう。さらには、わたしが次の句は秋の季語だと促すと、「なんだかまだ春なんで、いま秋の句詠む気分じゃないなあ、どうも違和感あるなあ」などといいだす始末。驚いたことに、今の自分の現実が対象でないと言葉が出てこないということです。付句は、一旦〈私〉を離れて前句の世界に入らないと発想できないよ、と諭しても、どうしても自分の現実と経験と感情に句を引き寄せてしまう。結局、なんとか半分を巻いたところで、あまりの軋みに中断せざるを得ませんでした。

K君が日頃詠んでいる短歌は、斎藤茂吉を頂点とする近代短歌の方法を踏襲しています。歌の背後には、ただ一人の一回きりの生を生きる現実の〈私〉が寄り添っています。今、この空間にいる〈私〉がすべてでイコール作者なのです。今この春という現実の季節なら詠めるけれど、秋なんて今自分が実感できないものは詠めない。K君にとって歌や句は、あくまでも現実のK君の心情とびったり一致してなければなりません。連句の世界はそうではありません。

せん。現実の〈私〉などというものはかえって邪魔になります。連句は、座の協和をはかり式目に則って場を展開させ、徹頭徹尾〈他者〉に合わせてゆく果てに、その関係性のなかで世界を捉えようとする文芸です。そこにいわゆる〈私性〉が介入してくると座の興は闊達に盛り上がってきません。このあたりについては、小池さんも先の対談のなかで、「連句に「私性」があるかという点、私はないと思いますね。連句人としての個人的な付句はありますが、それは「私性」というものとは違うと思います」と発言されています。

短い経験でものを言うのはちょっと憚られるのですが、連句は他者に出会うための文芸ではないかと思えます。社交の文芸といってもいいかもしれません。句・響・移・位など、いつも利用している連句・俳句季語辞典『十七季』（三省堂）のなかにも、いろいろな句の付け方が載っていますが、これらはつまるところ前句、すなわち他者、に対する向き合い方、気構えを言っていて、それはそのまま社交の心得を教えているように思えます。

連句の面白さは、やはり「付け」にあると言っている

しよう。わたしはこの他者の句に付けようとする気構えを、対談のなかで「他者の靴を履く」という言葉で表現してみました。これはなかなか微妙な体性感覚で、何とも説明しにくいところですが、自分の個という靴を履いたまま他者の句に寄り添ってみても、それは単に共感を示すだけで、そこから出てくる言葉は自我のうちにとどまってしまうように思います。それゆえ、執中の法というのでしょうか、その前句の核を掴むためには、一旦個という自分の靴を脱いだうえで他者の靴を履いてみて、自と他を意図的に入れ替えたうえで、そこに想像力を働かせてみる必要があるように思うのです。

わたしは、連句をやりはじめて初めて他者というものに出会ったような気がしています。短歌作者としては、読者という意味での他者はありませんが、それは一方通行で終わることがほとんどでした。連句における他者、これは他のどんな文芸にもない、本当に特別な感覚で、わたしにとっ
て思いもよらない新しい体験でした。

ここで再び、能勢朝次の『連句芸術の性格』に登場して

もらうことにします。「連句と個性」と題された一章から一節を引きます。

連句芸術の魅力はこの点にある。個性を発揮するとか、自己を表現するとか、そうした自己主張の文芸でないところにある。「個性の表現のないものは文学でない」という西洋的な文芸観では測り兼ねるものが、厳として存在するところにある。・・・わが国の芸術においては、自己の個性を表現しようというような自我意識から脱離する結果として、おのずからあらわれてくる作者の肉感的な高さの香気を尊ぶ。・・・連句における作者の個性がいかなるものであるかといえ
ば、その作者が他を生かし得る度合いの高きものほど、その作者の個性は高きすぐれたものであると答うべきものである。この点で、発句とは性格を異にすると考えてよい。連句は前句に応ずる点に眼目があり、前句を生かす点に価値がある。相手に応じ相手を生かすためには、自己の心に自我を持っていては不可能である。自己を虚にして、相手を十分に自己の中に包容しなけ

ればならない。その相手の中から、相手を生かすべきものがいずこに潜在するかを感じ取らねばならない。そうした働きにおいて、芭蕉は天稟的な高さを持っていた。蕉風連句の高い芸術の香りは、此処から生まれたものである。

まさにこれは連句という文芸の核心をついています。

※

さて、このあたりで少し転じて、連句と塚本邦雄について書いてみたいと思います。連句目線で見ると、また新しい像が浮かび上がってきます。

塚本邦雄は戦後の短歌界を代表する歌人のひとりとして知られています。短歌をはじめ俳句、散文詩、小説、評論とあらゆるジャンルに大きな足跡を残していますが、連句との関係はあまり知られていないようです。

塚本の母方（外村家）の祖父は、近江一円に弟子をもつ俳諧師でした。江戸期には、芭蕉や蕪村も立ち寄る大きな

呉服の商家だったようです。塚本は、平成七年十一月二十八日の朝日新聞掲載の「自分と出会う」というコラムのなかで、母の家の土蔵の長持ちの中にあつた歌仙帖が自分の歌の原点で、「五七五の長句と七七の短句の有機的な接続・連係が意外な効果を生み、全く架空の世界を実際に経験した以上に活写することを、ほんやりとではあるが意識した。」と述懐しています。塚本の歌は取り合わせが多く、それは明らかに連句に学んでいます。

夢前川の岸に半夏の花ひらく

生きたくばまづ言葉捨てよ

（以下原作は正字一行書き）

壮年のなみだはみだりがはしきを

酔の壘の縦ひとすちのきず

ここでは五七五の長句に七七の短句を付けた構造の歌を挙げてみましたが、塚本は、五七に五七七を、五に七五七七を、五七五七七を、さらには五音七音の途中で切れるような構造の取り合わせを試んでいます。詩人の高橋睦郎

はこれを「超疎句仕立て」と呼んでいて、付け句と前句にあたる上下が危うい蓮の糸で繋がっています。第五歌集『綠色研究』以前の歌集では、喩的な構造であったものが、中期・後期になると連句的な取り合わせの構造に変化しているように思います。

日本必ずしも減びず

料理店「蜻蛉」の八寸に銀杏

枇杷の汁股間にしたたれるものを

われのみは老いざらむ老いざらむ

花冷えのそれも底冷え

圓生の「らくだ」火葬炉にて終れども

雅歌誦するその耳元にこゑとどき

新生姜百グラム三十三円

まるで禅問答のような疎句付け。短歌でありながら、どこか現代川柳を思わせるところがあります。こういった味わいの作品は今ままであまり取り上げられていませんが、もっと評価されていいでしょう。まだまだ塚本邦雄の歌か

ら奪うべき富は残されているように思います。

※

連句の在り方は、人間の存在様式そのものだと言えるかもしれません。個としての生の実現は、さまざまな他者との交わりのなかで、はじめて可能になります。場面を切り替えながら、月を仰ぎ、花を愛で、恋に乱れ、まるで人の一生のように連句は進行してゆきます。そして、いつでも戻れるように、現実としてわたしたちの人生は結局どこにも戻ることができません。拳句の果ては、あの世へと旅立って行きます。そして、そのような存在を絵巻物のように俯瞰できる詩形、それが連句なのだと思います。

連句という詩形には、非常にたくさん富が詰まっています。塚本が短歌に定着させた取り合わせの他にも、連句の意外性のある展開は、連作で歌や句を並べてゆく時のヒントになりますし、付合いのヴァリエーションは詩作における改行に通じています。言葉の断絶や飛躍による「転じ」

は、常套表現から逃れ新鮮で生き生きした知覚を回復させてくれます。自他場という基準に基づいた人称の微妙な入れ替わりは、どの詩歌のジャンルにおいても空間・次元を拡張する技術になり得ます。「三句の渡り」も、その核になるものを短歌一首のなかに凝縮することができれば、従来の合わせ鏡的な構造意識を変えてゆけるかもしれません。連句にはそういう実験的なものを生んでゆくカオス・母体のようなところがあるように思います。

また、連句は詩歌だけでなく、あらゆる表現形式に繋がっているように感じます。小説であれば、偶然性に伴う先の読めない展開の仕方に連句を応用できます。エッセイであれば、「匂い付け」のような手法で、ちよつとした繋がりから数珠のように次々とパラグラフを書き継いでゆくことができます。演劇であれば、あるセリフに対してどんなセリフをつけるかというところに付合いの技法を生かすこともできるでしょう。もちろん映画や漫画、音楽にも深いところで共通するものがあります。様々な分野で活躍する人が連句を巻く姿は想像するだけで楽しいものです。

さて、六十代も半ばになった連句との出会いは、まことに遅きに失した感がありますが、残された時間で、自と他、個と衆、孤とうたげ、短歌と連句、の連立方程式を自分なりに解いてゆきたいと思っています。小池さんの「連句と川柳——焦点が二つあること」によって大きな楕円を描きたいのだ。」という言葉挙げを指標にして。

(歌人・和歌山県の連句を育てる会副会長)

【参考文献】

- 『連句芸術の性格』 能勢朝次 角川選書39
『宗祇』 小西甚一 日本詩人選16
『うたげと孤心』 大岡信 集英社
『俳諧の詩学』 川本皓嗣 岩波書店
『孤独の発明』 三浦雅士 講談社
『社交する人間』 山崎正和 中央公論新社
『七五調の謎をとく』 坂野信彦 大修館書店
『蕩尽の文芸』 小池正博 まろうど社
『超』連句入門』 浅沼璞 東京文献センター
『塚本邦雄全集』 ゆまに書房

私の好きな芭蕉の言葉

牛 木 辰 男

私にとって、連句の深さと面白さをいつも教えてくれるのは芭蕉の連句である。岩波文庫の「芭蕉七部集」と「芭蕉連句集」を時折開いて眺めてみると、その時折の発見がある。そして読み直すたびに思うのは、芭蕉のしなやかさと自由さである。そんな風に芭蕉に片思いして、連句をだらだらと続けてきた私のもう一冊の愛読書は、やはり岩波文庫の「芭蕉俳諧論集」（小宮豊隆、横澤三郎編）である。ここでは、芭蕉の言葉がぎっしり詰まったこの本や、他に読み散らかしてきた書物の中で、私が気に入っている芭蕉の言葉をご紹介します。一人のレンキスト（連句人）の個人的な愛着により気ままに選ばせていただき、勝手なコメ

ントを添えさせていただいただけなので、皆様にお役に立つかわからないが、どうぞご寛容を。なお、原文の引用については、読みやすいように、送り仮名や句読点等を補足して表記してある。

歌仙は三十六歩なり、一步もあとに帰る心なし（三冊子、しるそうし）

懐紙式の連句の形式は百韻、世吉、歌仙などいろいろあるが、ここでは芭蕉は歌仙を例として、歌仙の三十六句は三十六歩の歩みのようなもので、一步たりとも後戻りするような気持をもってはいけない、と言っている。

この言葉の続きは、「行くにしたがひ心の改るは、ただ先へゆく心なれば也」（歩いていくにつれて気持ちに変化がでてくるのも、ひたすら前に進もうという気持ちからである）となっている。連句の本質が「付け」と「転じ」の連鎖であるということを端的に言い表している言葉で、観音開きや輪廻を嫌うすべての式目のもとは、これに尽きるのだと思えてくる。

ところで、芭蕉のこうした言葉は、弟子たちが生前の芭蕉から聞き書きしたものを、没後に整理して秘伝書として伝えたものである。この『三冊子』も芭蕉の高弟の服部士芳がまとめた秘伝書で、三冊一組で伝えられたためにこの名がついている。多くの部分が「師の曰く」として始まり、芭蕉の声が聞こえてくるようで楽しい。

差合の事は時宜にもよるべし（三冊子、しろそうし）

連句のルールはその場で考えればよい。まずは大雑把に従えばよい、というのである。

連句のルールは「式目」と呼ばれ、芭蕉の時代までにはさまざまな式目書が出されていたので、弟子たちが蕉門にも式目書が欲しいと芭蕉に頼んだことがある。その時の芭蕉の言葉である。独自の式目を作って無理にこれを守れるというのは恥ずかしいことだと言った後で、こう述べたのである。結局、芭蕉はついに式目書を出さなかった。

とはいえ、芭蕉がルールを軽視していたわけではなく、式目書はすでにあるものを参考にすれば十分だといったま

でのことで、むしろ連句の本質である「付け（二句の関係）」と「転じ（三句の変化）」について、芭蕉はたいへん厳しかった。芭蕉の本心は、文字でこまごまとルールを定めると、それにとらわれて、自由な発想や、本来の「付け」と「転じ」のダイナミズムが失われてしまう、その結果、形だけにとらわれた作品になってしまうことを嫌ったのだと私は思っている。

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ（三冊子、あかさうし）

松の句を詠むならば、松をじつと見つめ、松から学ぼうとしなければならぬ。竹にしても同様である、というのである。

高浜虚子は俳句の基本に花鳥諷詠と客観写生を提唱したが、芭蕉のこの言葉は、いくらか虚子のこの見方に相通じているのかもしれない。どんな句も、頭の中でこねくりまわしているだけでは、絵空事になってしまう。詠もうとする対象物を先入観なくじつと見つめ、何かの発見をしようとする。そこに真実が表れて、共感が得られる句ができて

くる。

たとえば三ヶ月は夕方が明け方に空低くに現れる。その風景にきちんと接していれば、真夜中に三ヶ月が空高く見えるような句はあり得ないことになるが、ときどきそんな絵空事の付句に出会ったりする。日々、物事を観察することと感性を磨くことに心がけたいと思わせる言葉である。

虚に居て実を行ふべし（風俗文選）

「虚」、つまり想像の世界で、「実」、すなわち真実を表現することが大切である、という意味である。

芭蕉の言葉を伝える書物としては、すでに述べた『三冊子』のほかに向井去來の『去來抄』が有名である。しかし、それ以外にもいろいろな書物が知られており、この虚実の言は、森川許六が芭蕉の十三回忌に出した俳文選集『風俗文選（本朝文選）』に見られる。

連句はなによりも虚々実々が面白い。しかし、あまりにもあり得ない作り話では共感は得られない。虚々実々というのは、嘘かホントかわからないから面白いわけで、その

点では、虚にもどこかにリアリティのスパイスがなければ本当の面白さは出てこない。

ところで、この芭蕉の言葉は、次に続く「実に居て、虚にあそぶ事は難し」と対になっている。こちらは、実景や実体験を付ける場合のことであるが、それは事実にとらわれ過ぎるので、虚の世界を楽しむ余白を加えるのはかえって難しい、ということだろうか。

どんなに荒唐無稽な付句でも、根底に真実が潜んでいなければならぬし、単なる事実の記載だけの付句では共感を得られないということを痛感させられる言葉である。

心の作はよし、詞の作は好むべからず（三冊子、くろそうし）

「作」の意味をどうとるかによって、少し解釈が異なるかもしれない。「作」を作意と考えるなら、心に作意を持つことはよいが、言葉に作意を好んではならない、となる。一方で、「作」を「作る」という意味にとるならば、心の内からでてきた句はよいが、言葉に頼って句を作りたがるのはよくない、という意味になる。

いずれにしても、言葉遊びだけの句、単にうわべの言葉だけの句、作意をあらわにして言葉を飾った句は良くない。もちろん連句に遊びは大切だが、そこにおいても、心がこもった句を忘れないように、ということだろう。

俳諧の益は俗語を正すなり（三冊子、くろそうし）

連句の有益な点は、日常の言葉を詩歌の世界に持ち込み、正しく使うことである、という意味だろう。

「俗語」は「雅語」に対する言葉である。古く和歌に用いられてきた言葉が雅語であり、多くは大和言葉である。一方、俗語は日常に使われている言葉で、芭蕉の時代であれば、方言や新語のほかに外来語としての漢語なども含まれる。例えば、「山並み」や「みなも」は雅語であり、「地べた」、「銭（ぜに）」、「秋湖（しゅうこ）」などは俗語である。

連句はもともと「俳諧の連歌」、すなわち簡単にいうと、それまで公家貴族を中心に行われていた「連歌」を、江戸時代に庶民の文芸に広げたものである。したがって基本的

なルール（式目）は連歌を踏襲している。その中で、連歌と連句の大きな違いの一つは、従来の雅語でできた連歌に俗語を積極的に取り入れたことだろう。つまり、日常使われる言葉としての口語や、方言、新語、漢語などを意識的に取り入れるようになったのが「俳諧の連歌」だった。

このように俗語は「俳言」であり、そこに諧謔を見出したのが初期の俳諧だが、芭蕉はさらに詩情を盛り込んだのである。その点で、この「俗語を正す」という言葉には深みと重みがある。この言葉の次に「つねに物をおろそかにすべからず」とあるのは、日々の観察により何かの発見を盛り込もうとする芭蕉の姿勢が感じられる部分である。ただ面白可笑しく、新語や流行語を使えばいいのではないと戒めている。

謂い応せて何かある（去来抄、先師評）

『去来抄』は向井去来が、芭蕉没後にまとめた俳論書で、去来が折に触れて芭蕉から聞いた句評などが、エピソードを含めて記されている。

さて、この言葉がでてくるエピソードの始めは、芭蕉の高弟であった其角の選集に、

下臥につかみ分けばや糸桜 巴風

という句があったが、どうして其角はこの句を選んだのだろうと去来に聞いたところから始まっている。

「下臥」は物陰に臥せていることであるから、この句は糸桜の下に臥せていると、その枝をより分けないと中に埋もれてしまいそうなくらい立派に咲き誇っている、というような意味になるだろう。この大仰な感じはいかにも派手な其角好みの句である。去来も、糸桜が咲き誇っている様子をよく言いつくしているので、素晴らしい句なのではないかと答えたところ、芭蕉からこの言葉が発せられた。「言いつくしてしまつて、それに何の意味があるのか」という手厳しい言葉である。

この話は、芭蕉の有名な「古池や」の句の成立の経緯とも思い出させる。各務支考の俳論書『葛の松原』によれば、芭蕉は最初、下七五の「蛙飛こむ水の音」を作り、この上五をどうするべきかを思索していた。そして其角に尋ねたところ、「山吹や」と即座に付けてきた。しかし芭蕉はそ

れを良しとせず、しばらくして最終的に「古池や」と治定したという話である。

これらの挿話をどう解釈するかは、人によって異なると思うが、少なくとも、発句には脇に残す余白と深みが必要だということを芭蕉がいかに大切にしていたかを示しているように思う。もちろんこうした要素は、発句だけではなく、付句にも必要なものだろう。

新しきは俳諧の花なり（三冊子、あかそうし）

一句の新しい味わいこそが連句に華やぎをあたえてくれる、という意味である。

この言葉そのものは『三冊子』著者である土芳の言葉として出てくるが、これに続いて、古い句は花が咲かないまま古びた木立のようだとすることを土芳が話し、「師である芭蕉が何かを願って瘦せられたのも、きっとこの新しみに心血を注いだためだ」と述べている。

私は、この「新しき」を「発見」ということばに置き換えてみたくなる。土芳はさらに、「責めて流行せざるは新

しみなし」(つねに心がけていないと新しみは出てこない)とも述べているが、「新しみ」を「発見」と考えればわかりやすい。日々の観察による発見が、連句に華やぎを与えてくれるということを大切にしたい。

不易流行そのもと一つなり(去来抄、修行教)

連句には不易(不変)の句と流行の句があるが、その根元は同じである、という意味である。

この言葉は、『去来抄』の中で、去来と魯町の問答として、蕉風における「不易の句」と「流行の句」についての議論がなされる個所に出てくる。去来が「不易の句と流行の句は根元は同じ」といったことで、不易流行の根元が一つとはどういうことか、と魯町がさらに去来に聞いている。

不易流行を論じた同様の記載は、『三冊子(あかそうし)』にもあり、「師の風雅に万代不易あり。一時の変化あり。この二ツに究り、其本一つ也。その一つといふは風雅の誠也」となっている。したがって、この不易流行の考えは芭蕉が唱えたことであることがわかる。不易と流行は反する

ように見えるが、根本において二つは同じである。そして、それが「風雅の誠」、すなわち俳諧の本質だといっているのである。

何事においても、変わらないもの、つまり不易が根本原理になればならない。その一方で、その根本原理を支えるのは、単に伝統や形式の継承ではなく、新しみや革新である。そう言いたいのだと思う。すなわち、伝統は革新の連続によって守られる、という精神を忘れてはならないだろう。

句に一句も付かざるなし(去来抄、修行教)

付いていない付句というものはない、という当たり前の言葉である。

『去来抄』のこの部分は、支考の「付句は付けるものなり」という語りかけから始まる。さらに彼は、今の俳諧は付いていない句が多いのだがどうしたものだろう、と去来に問いかけ、「先師の曰く、句に一句も付かざるなし」と芭蕉の言葉を持ち出している。

これに対して、去来は、「付句は付かざれば付句にあらず、付きすぎるは病なり」（付句は付いていなければ付句ではない。しかし付き過ぎるのは病気である）と答えている点が面白い。そして、「このごろの作者は、付いてしまうのは初心者と思って、付いていない句を作るものが多い。しかも付いていない句は誰も咎めないで、付き過ぎている句ばかりを笑う風潮がある」と嘆いている。現代にも通じる、なかなか本質的な指摘だと思う。

一夜のほど幾ばくかある（去来抄、先師評）

連句を楽しむ一夜の時間がどれぐらいあると思っているのか、と芭蕉が去来を叱責した言葉である。

ある日、芭蕉と去来が初めて招かれた家での興行で、発句を所望された去来が詠みあぐねているのを見かねて、芭蕉が発句を詠んだという。その後、この興行が終わってか
ら去来は芭蕉に夜を徹して怒られた。

「たまに客として招かれる会なら、もしものことを考えて、発句の一つぐらい用意しておかなければならない。そ

して発句を所望されたら、上手下手を問わず、早く出さなければならぬ。一夜の時間がどれぐらいあると思ってい
るのか。お前が発句を出さずにぐずぐずしていたら、今夜
の会は巻き終わらずに終わった。無風流の極みだ。だから、
お前の代わりに発句をだした」と、この文面を読むだけで
も、芭蕉の怒る様子が怖いほど伝わってくるし、そこまで
怒らなくても、と去来に同情したくなる。一方で、芭蕉が
いかに一座を大切にしていたかがよくわかる話である。

文台引き下ろせば即ち反古なり（三冊子、あかそうし）

一座の連句が巻き上がってしまえば、それは書き綴った
控えなど、もうただの紙くずに過ぎない、という意味であ
る。「文台」は連歌や俳諧の席で短冊や懐紙をのせる台の
ことであるが、ここでは連句の興行そのものを指している。

この言葉は、芭蕉が「学ぶことは常にあり」と言った話
から始まる。連句の上達のために学ぶ事はいたるところに
ある。そして、日頃精進していると、一座に及んで、思っ
たことを即座に詠みだすことができるようになるし、迷う

こともなくなるだろう、というのである。このように連句は一座における即時即詠が大事で、終わってしまえば懐紙の中身などどうでもよくなるといったという。

これも、芭蕉がいかにな一座の興行を大切に思っていたかが伺える挿話である。文音ばかりを行っていると、自身の句の巧拙ばかりが気になっていて、連衆の心の響き合いを忘れてしまいがちになる。そんなときに、この言葉を思い出して、自分を戒めることにしている。

句ととのはずんば舌頭に千転せよ（去來抄、同門評）

句の調子がうまくない時は、千回ぐらい口ずさんでみるとよい、というのである。芭蕉でもそうだったのか、と思いつながら付句を考えるようにしている。

一見、先に挙げた「一夜のほど」や、「文台引き下ろせば」の話と矛盾しているようにも見えるし、即時即詠とは相反するようにも見える。ただ、どんなときにも手を抜かない芭蕉の言葉に対するこだわりをよく表している。

じつは芭蕉は「文台を引き下ろせば反故」などと言いな

がら、巻き上がった連句を『猿蓑』や『炭俵』などとして刊行する際には、執拗なまでの推敲を行っていた。そのこだわりは、なかなかすさまじい。

巧者に病あり（三冊子、あかそうし）

この言葉そのものは、『三冊子』の著者、服部土芳の言葉である。しかし、そのすぐ後に、「師の詞にも俳諧は三尺の童にさせよ、初心の句こそたのもしけれ」（連句は小さい子供にさせたほうが良い）とあり、芭蕉の言葉の言い換えであることがわかる。もちろん、「三尺の童」とは誇張した表現で、もちろん子供ならみんな良い連句が巻けるというわけではない。しかし、座の文芸としての連句を愛し、「はらみ句」を嫌った芭蕉の精神をよく言い表しているのではないかと思う。そして、技巧に走るな、連句は子供にさせよという言葉は、晩年の芭蕉が「軽み」を愛したことと呼応している。

古人の跡を求めず、古人の求めたるところを求めよ（許六

離別の詞

先人（昔の優れた人）のやったことの真似をしているだけではいけない。先人が目指していたものを理解してそこに向かうことが大切である。まさに芭蕉の精神の本質が端的に表れている言葉である。

元禄六年、芭蕉が数え五十歳の時に、門弟であり彦根藩士の森川許六が、参勤交代で江戸を離れる際に芭蕉が饞別に送った言葉とされている。許六は画にも秀でていたが、その腕を褒めて、「古人の跡を求めず、古人の求めたところを求めよと、南山大師の筆の道にも見えたり」と言ったことになっている。南山大師は弘法大師、つまり空海のことと、その書のすばらしさを例にして、述べた言葉だと読み取れる。

どんなことにしても、ただの真似をしているのでは、先人を取り越えることはできないし、単に小さくなっただけだろう。いつも心に留めておきたい箴言である。

以上、とりとめなく私の好きな芭蕉の言葉を紹介した。

すでに述べたように、芭蕉は式目書や俳論書を出すことを嫌ったので、すべての言葉は弟子たちの聞き書きである。

また、多様な門人の問いかけに答えたものだから、答え方によっては、一見矛盾した内容に思えるものも多い。そうだけでなく、「冬の日」からでも蕉風三変と言われるほど、芭蕉の連句観も変化しているから、どの時期の門人であったかによっても、捉え方は異なっているに違いない。

しかし、ここに紹介した芭蕉の言葉は、そんなことを越えて、単なる式目書では見えにくい連句の根本精神のようなものを教えてくれるように私には感じられる。そして、なによりも、そばに芭蕉がいて、話しかけてくれるような気持ちにさせてくれるところが嬉しいことである。

（新潟大学学長）

参考文献

小宮豊隆、横澤三郎「芭蕉俳諧集」（岩波文庫）岩波書店、

昭和一四年

小宮豊隆監修「校本芭蕉全集 第七卷俳論編」角川書店、

昭和四七年

中村俊定「芭蕉の連句を読む」(岩波セミナーブックス16)、
岩波書店、昭和六〇年

東 明雅「連句入門」(中公新書) 中央公論新社、昭和五
三年

東 明雅「連句集 猫蓑」 永田書房、昭和五七年

森田 峠「三冊子を読む」 本阿弥書店、平成四年

山下一海「芭蕉百名言」 富士見書房、平成八年



新庄と澁谷家

澁谷盛興

新庄との関わり

群馬県渋川市の工場社宅に住んでいた頃、男子が誕生した。電話が無かったため電報で「チヨウナンウマレタ」と名古屋の父に知らせた。するとそれを待っていたかのようには返電あり、曰く「一四ダイモリヨシ(リヨウ)トセヨ」。この時初めて自分が澁谷家十三代の嗣子であることを知った。それまで自分の家系やファミリーヒストリーなどには無関心だった。父もそれを見越しての事だったのかも知れない。なお「良」の字は父方の祖母楽子の戸籍名良具(らくの)の変体仮名)から取ったとは後日聞かされた。

京都深草の生家には祖父母、父母、父の姉、私達姉弟が

住んでいた。後に病弱の母の介護のため母方の祖母も加わり大家族だった。寄り合い所帯のためさながら言葉のるっぽ状態。祖父の新庄ことば、祖母の東京弁と京ことば、父は東京の学校を出たので生粋の東京弁。母達の岡山訛、それにジャワ帰りの伯母のインドネシア語(当時はマレー語、戦時中は馬來語と言った)など。中でも優勢だったのが新庄語だった。町内に小さな牧場があり、牛が飼われていた。併設のミルクプラントから近所のお得意に配達していた。

その家のことは「べこや」だ。祖父の目が悪くなると「めごや、新聞読んでくんろ」といった具合。物事を面倒くさがる「セヤミすな」と叱られた。隣家は山羊を飼っていて、時折メーと鳴く。すると「カンビンが鳴いた」となる。カンビンはマレー語。調理器具には「ワジャ」があり、チャーハンは「ナシゴレン」。しかし基調は東京アクセント。我が家のことばが世の中とは少々違うと気がついたのは学校へ上がってからのこと。戦時中、学校で標準語を教えるようにという政策が実施された事があった。ところが担任の先生は根っからの京都人、標準語が話せない。そこで「シブタニ、読んでみい」と私に国語読本を読ませるのだった。

長男の私は毎朝玄関先の掃除が日課、それに郵便物を取って来て皆に配る役目もあった。その中に祖父宛の『葛麓』という帯封の雑誌や、新庄にある澁谷家の菩提寺、接引寺しよんぐんじからののがきに住職の花車圓瑞という名前があったのを覚えていた。

新庄との距離が急接近したのは昭和六十二年の増上寺御忌しういんじだった。接引寺からの連絡で参列する事に決めた。東京から私達夫婦、大阪から姉澁谷道の三名。四月十一日から始まった一連の行事の最終日、四月十五日午後の日中法要唱導師が接引寺住職の横山信行人。法要に先立ち三解脱門から大殿までの百八間の参道をお練り行列がしずしずと進む。急遽自分も受付で戴いたお袈裟を掛けて行列のしりえに就いた。多数の僧侶が一堂に会する莊嚴な行事であった。すべてが終わって帰路に就こうとした時、向こうから礼服を着た一団が近づき、「澁谷さんですか」と新庄訛りの声をかけられた。接引寺の檀家だった。檀家総代の赤松勇太郎氏の話では、お寺の本堂の真ん前に墓地のある澁谷さんは一体どこに住んでいるんだろうと話に出ていたそうである。姉が後日この行事のことをさる雑誌に寄稿するに

当たって新庄市に差し出した、同市発行『新庄 自然と文化遺産』の引用許可を求める手紙が市史編さん係（後の市史編さん室）に回され、係の三浦和枝氏が返書を認めたのがきっかけで交流が始まり、大友義助専門員（後に同室長）に同行して大阪の姉宅を訪ねて来られた。姉が保管していた澁谷家の系図や仏像、仏画などは市史編さんのお役に立ったようだ。

澁谷家の系図

系図は黒漆塗りの木の表紙が付いた折本。はじめの方は丁寧な楷書で墨書され、朱で系統線が引かれている。冒頭に漢文調の前書きがある。

曩祖羽州仙北郡角館住、代々以商売為家業仙北屋某ト云

御領主様、常州松岡江御国替之節、奉慕引移、従松岡羽州新莊江御国替之節、又々引移由雖申伝記録無之、不能詳之、苗字称澁谷、号仙北屋、定紋丸之内橘、替紋包金也、都而記録紛々而無可證、罹火災焼亡故モ有歟、以後追々可書加之

要するに、祖先は仙北郡角館（現大仙市）に住んでいた

商家で仙北屋と号していた。御領主様の戸沢の殿様が常州松岡（現茨城県高萩市）にお国替えになった時に、後をお慕い申して同行、さらに殿様が新庄に再度御国替えになった時も一緒に引越したと言うが、記録がないので詳しいことは分からない。苗字は澁谷、屋号は仙北屋、定紋は「丸に橘」（今でも使っている）、代わり紋は包み金。すべてに記録が紛々として証明のしようが無い。火災で焼失した事も一因か。以後追って書き加えていこう、という事らしい。系図の本体に入って、初代は

某 始松右衛門 後九郎兵衛 実名不詳

とある。没年は承応二年（一六五二）。これに第二代盛定、第三代盛信・・と続く。この第三代が芭蕉を迎えた当主なので少し詳しく見ると

盛信 始仁兵衛 改九郎兵衛

延宝四辰年（一六七六）家督讓請、元禄十五年（一

七〇二）隠居、宝永五年（一七〇八）十月廿一日死

去、葬接引寺、法号顔譽光順

その弟甚兵衛こそが尾花沢逗留中の芭蕉一行を新庄に招いた俳号風流その人なのだ。

某 甚兵衛 分家

貞享元年（一六八四）七月、金五百両相渡分家、当

町内美濃屋藤四郎屋敷之由雖申伝不詳、藤四郎家之紋、

丸ノ内包金ナリ、然レ者甚兵衛嗣子無之、藤四郎相続

タルベシ

接引寺本尊の木造阿弥陀如来座像（山形県指定文化財）

の両脇に立つ勢至菩薩・観音菩薩の両脇侍には「元禄八年

亥六月中旬 七世良光代 施主澁谷甚兵衛」との朱漆書き

がある。

系図の終わりの方は走り書きの変体仮名で、全く読めない。それが何ページも延々と続く。これを解読して下さった大友氏の手稿がある。それによると、この部分は幕末、戊辰戦争で新庄が焼かれた時のことを克明に記録していると分かった。第十代盛征の慶応四年の項、

京都二おゐて徳川家与薩州長州其外国主方相交り一

軍初り、世中三百来之治世俄に軍のちまた与相い成、

諸国動乱、人氣不静処・・

という書き出しで始まり、四月には新政府軍幹部の宿に自宅を提供している。

当藩内実官軍ニ一味いたし、表ハ賊ニ随ひ乍種々心配
ハ上下一統之事ニ候

と当時の新庄藩の複雑な事情が書かれている。一旦秋田に退いた官軍は七月十一日に新庄奪還を果たすが、庄内勢に攻め立てられる。七月十四日、ついに藩主戸沢正実（たけのり）は家中一統を引き連れ、官軍に従って秋田に向かった。澁谷の一族もこれに従ったものとみられる。この間に新庄城と城下町の大半が焼失した。

ほのほ天ニそびへ、おひた、しく、目もあてられぬありさま、金山辺よりうしろを見れハ誠に驚入りたる有様、心耳を潰し候。此夜更明方ニ相成り候而雨さへふりいたし、雨具等は一切無之、女子を初、老若二いたる迄一統難儀目もあてられぬ次第也

と生々しい。その後官軍が反攻して新庄を奪還し、藩主も帰国した。盛征は終始殿様に随行して会計を務めた功により徒士格を仰せつかったとある。明治三年には朝廷(ママ)から「右衛門、左衛門、兵衛等の名を改めよ」との沙汰があり、九郎兵衛を起八郎と改名した。この名が除籍謄本に祖父盛孝の亡父として記されている。

慶応三年生まれの盛孝は幼名を孝吉と言ひ、明治十八年に家督を相続、同二十二年に盛孝と改名した。盛孝が新庄を捨てて京都に移住した時期も経緯も不詳であるが、京都府巡查を拝命し、鞍馬の奥の久多（た）という土地に駐在していた事は間違いない。先年姉が久多を訪ねた時、澁谷盛孝という名を覚えていたと聞いている。また祖父は漢詩を能くし、お弟子を取っていた。大正年間の葛籠誌に祖父の投稿漢詩が載っている。祖父には「めぐやめぐや」と可愛がられ、「お団子だんご何処まで転ぶ、じぞさんの穴までよー」などの新庄むかしばなしを聞かされた。食事も納豆汁など新庄ゆかりのものが多かった。ただそれ以外では新庄に直接関わる事のないままに時を過ごした。この祖父は昭和二十三年に八十一歳で没した。葬儀は自宅で執り行つたが、家の宗旨である浄土宗の和尚に加えて、家の北方にある黄檗宗石峰寺と南方にある日蓮宗宝塔寺からも和尚が参列、三僧それぞれ鳴り物が響く賑やかな葬式だった。

新庄の松尾芭蕉

『曾良旅日記』によると、芭蕉一行は尾花沢の鈴木清風

の世話でこの地に十一日を過ごした。八日目の五月二十四日、

涼しさをわが宿にしてねまるなり

芭蕉

を発句として歌仙が巻かれた。その席には大石田の高野平右衛門（一榮）らとともに風流も加わり、二句ほど付けているが、そこでぶつつんと風流の名が消えている。ここから「多分こうだったんじゃないか劇場澁谷家編」が始まる。その席で風流がおそろおそろ芭蕉様に「どうが新庄の私どものところさござってくだせえ」（三浦氏推定の当時の新庄ことばで「どうか新庄の私どもの所へお出で下さい」の意）と申し出たところ、思いがけず快諾を得た。びっくりした風流は、ここで歌仙など巻いている場合ではないと中座し、急遽新庄にとつて返した。早速兄盛信に報告し、新庄の俳諧仲間達にも声を掛けて巨匠を迎える準備を整えたのではないかとこの次第だ。芭蕉は山寺から大石田に入り、一榮宅で「五月雨歌仙」を巻いた。

六月一日、弥陀堂まで一榮、川水の見送りを受け、さら

に馬二頭を付けて舟形まで送られた。名木沢を通って新庄に入り、風流宅に止宿。翌二日昼過ぎ、九郎兵衛（盛信）宅へ招かれた。

この澁谷家の本宅は南本町東側、北の角から七間目、十五間の間口を持つ屋敷で、現山形銀行新庄支店辺りと比定された。筆者の本籍地と地番が一致する。代々南本町の町年寄を勤めていたための特権として、伝馬役を免除されていたという。前の歩道に「芭蕉遺蹟盛信亭跡」という石柱が建っている。揮毫は木田清元市長。一方の風流亭は、前記家系図の記載もいささかお役に立ち、同じ通りを挟んで盛信亭の斜向かいと比定された。平成六年、その標柱を立てる事になり、揮毫を頼まれた。「新庄には能筆の方が大勢お出ででしょうから」と固辞したが、「いえこれは子孫のあなたが書くことに意味があるのです」と上手に口説かれ、蛮勇をふるって半切に「芭蕉遺蹟風流亭跡」と書いた。少し墨が滲んだが、石工の腕前よろしく、すっきりした石柱に仕上がった。

さて、芭蕉は風流亭に草鞋を脱ぐと、とりあえず三つ物を巻いた。

風流亭

水の奥水室尋る柳哉

ひるがほかゝる橋のふせ芝

風渡る的すれやの変矢やに鳩鳴て

翁

風流

ソラ

梅かざす三寸みきもやさしき唐瓶子

簾をあげてとほすつばくら

三夜サ見る夢に古郷のおもはれし

浪の音聞嶋の墓はら

雪ふらぬ松はおのれとふとりけり

萩踏しける猪のつま

行尽し月を燈の小社ほくらにて

疵洗はんと露そゝぐなり

散花の今は衣を着せ給へ

陽炎消る庭前の石

楽しみと茶をひかせたる春水はるのみづ

果なき恋に長きさかやき

袖香炉煙は糸に立添て

牡丹の雫風ほのか也

老僧のいで小盃初んと

武士乱レ入る東西の門

白おのづから鹿も鳴なる奥の原

羽織に包む茸狩の月

秋更で捨子にかさん菅の笠

良

如柳

木端

風

柳

翁

松

端

翁

良

流

端

風

柳

翁

良

端

流

柳

新庄の入り口で柳の清水を見た興趣をそのまま発句にしたのだからと読み解くのが自然な流れ。その翌日当主の盛信に挨拶、そこで歌仙と更なる三つ物一卷を物している。歌仙は

新庄

御尋に我宿せばし破れ蚊や

はじめてかほる風の薫物

菊作り鎌に薄を折添て

霧立かくす虹のもとすゑ

そゞろ成月に二里隔ふたさとけり

馬市くれて駒むかへせん

すゝけたる父が弓矢をとり傳つたへ

筆こゝろみて判を定むる

風流

芭蕉

孤松

ソラ

柳風

筆

翁

流

うたひすませるみの、谷ぐみ

乗放牛はすを尋る夕間暮たひぬ

出城の裾に見ゆるかゞり火

奉る供御の肴おろかも疎そにて

よごれて寒き禰宜の白張

ほりくし石のかるどの崩けり

知らざる山に雨のつれぐ

咲きかゝる花を左に袖敷て

鶯かたり胡蝶まふ宿

翁

風

端

翁

流

風

柳

端

良

作者名の内如柳は、鈴木清風撰『俳諧おくれ双六』に「羽州如柳」として十二句が入集しているという。三つ物は

盛信亭

風の香も南に近し最上川

小家の軒を洗ふ夕立

物もなく麓は霧に埋て

翁

息柳風

木端

客の芭蕉は思いきりよいしよしてくれている。「客発句

脇亭主」の原則からは盛信が脇を付けてしかるべき所だが、ご本人は俳諧を能くしなかつたので、代わりに息子の柳風が脇を付けた形になっている。ただこの柳風という名は家系図には無く、接引寺の過去帳にも該当が無いそうである。木端の素性も明らかにはなっていない。

連句大会

平成元年は芭蕉奥の細道三百年に当たる。それが折良く新庄市政施行四十周年と重なった。市では記念事業として句碑の建立、連句大会の催行、盛信亭文庫の設置などが企画された。

句碑は新築の新庄市民プラザの敷地に姉が

風の香も南に近し最上川 芭蕉

と揮毫した。

一方連句大会は、新庄市教育委員会と新庄市の共催により、「全国連句新庄大会」と銘打って新庄市民プラザで第一回が開催された。後援は連句協会・山形県俳人協会・新庄商工会議所・新庄観光協会・新庄市文化団体会議。新庄

の土地には北陽社という明治四十一年（一九〇八）に創立された連句の結社があり、年に二回、伊勢派などの伝統を受け継いだと思われる古式を守って正式俳諧を興行していた。連句協会などの後援を得たとは言え、新庄でこのような大会を立派に催行できたのは、この地に根付いた伝統文化の力も大きく寄与したのではないかと愚考している。

募吟の選者は阿片瓢郎・大林柚平・今泉宇涯・澁谷道、募吟点数は二百巻を超えた。前日には新庄俳蹟巡りで、柳の清水、本合海の芭蕉乗船の地、最上川舟下りなどに案内された。前夜の交流会では豊かな山の幸を使った郷土料理の数々に舌鼓を打った。振る舞われた地酒の評判も上々で、中でも吟醸酒「とろり」には酒豪連も「ころり」と参った様子だった。当日の実作会では、卓上に朝摘みの山野草が飾られ、地元の皆様が丹精こめて作った漬物が卓上を賑わした。

会場は年により義経所縁の地、瀬見温泉や保養センターもがみ等と変わったが、変わらなかつたのはこの新庄のおもてなし。これが評判となり、その後第二十回まで続くこととなる。自治体が主催するこの種の催しとしては新庄が

嚆矢であったと聞いている。

また新庄市は市民プラザの中に「盛信亭文庫」を設置した。収蔵図書の選定には澁谷道や芭蕉研究の泰斗、井本農一氏等の指導を受け、芭蕉関係図書、連句・俳句関係図書辞典・歳時記などが購入調達された。さらには澁谷道蒐集の限定版書籍や、新庄市出身で現代俳句の第一人者として知られる鷹羽狩行氏をはじめ多くの俳人や俳文学者から多数の図書の寄贈があった。ささやかながら我がさくら草連句会の『さくら草連句会報』及び後身の『さくら草連句会作品集』もケースに陳列してある。このように盛信亭文庫はユニークな蔵書構成となっており、地域の俳句実作者や研究者に広く利用されているとのことだ。

仏像移送大作戦

平成二十四年に蛇笏賞を授与された姉は、一年余り経った頃から介護サービスを受けるようになり、二十六年に埼玉県の介護施設に移住した。留守宅の管理を任されて気になったのが、代々家に伝わる阿弥陀如来三尊像。物心ついた頃から毎朝拝んでいたこの「おほとけさま」は、二代盛定が京都の仏師から購入したと伝わる。像高百四センチの

阿弥陀如来立像を中心に、両脇に勢至・観音両菩薩が侍立している三体仏。度重なる転居にも大事に守られてきた。

仏像の未来については、姉の元気な頃、接引寺へ寄進するのが一番良いねと話しが出来ていた。そこで迷う事なく普通の美術品輸送部署に声を掛けたら、運送保険を掛けるので評価額はと聞かれた。今まで拝む対象でしかなく、お宝としては考えた事もなかった。そこで高校の友人田中琢みづがに相談した。彼は国立奈良文化財研究所長を歴任し、『さくら草連句会報』第八号にも「自然と人為」と題した一文を寄せている。早速奈良国立博物館長に連絡してくれ、程なく同館の彫刻専門官が調査に来宅。仏像を分解して調べた上で立ち戻り、後日「中心仏の阿弥陀如来立像は一体造りの木彫仏で、柔和なお顔の表情や衣装の襷の特徴から、平安後期の仏像に間違いありません」との電話を頂いた。同博物館の紹介で石山の文化財修理所に修理を頼んだら、見違えるような仏像となった。平成二十七年五月八日に再び解体して四トン車に積込み、慎重に二日ばかりで新庄まで運んだ。住職の花車英行人から無事着いたとの電話を貰った時は肩の荷が下りた。十月に開眼法要があるという

ので参列したら、真つ新なお厨子に納められてにこやかに立つお姿があった。法要に合わせて寺では「てらこやフェスチバ@接引寺」という催しを開催しており、子供連れの来場者で賑わっていた。我が家のお仏様もやっと所を得たのかなと実感した。因みにこの仏像は後日、新庄市有形文化財に指定されたと聞いている。

私事ながら、新庄は生まれ在所ではないものの正に心の故郷であり、毎年ささやかなふるさと納税を送って、東山焼の返礼品が届くのを心待ちにするのが習慣となっている。昨今である。

本稿の執筆に当たっては新庄市編『新庄市史別巻 自然・文化編』、大友義助『松尾芭蕉と新庄』、大友義助『シリーズ藩物語 新庄藩』、萩原恭男校注『芭蕉 おくのほそ道 付 曾良旅日記・奥細道菅菰抄』（ワイド版岩波文庫）等を参照し、三浦和枝氏の細部にわたる助言と校閲を得た。ここに記して謝意を表す。

（さくら草連句会代表）

令和三年の連句界

林 転 石

情勢分析

令和二年に引続き令和三年も新型コロナウイルス感染症の猖獗が甚だしく、緊急事態宣言、まん延防止策が施行されて国内の経済、文化のすべての面で多大な影響が発生した。

人流が制限された結果、営業不振のために商売の縮小、廃業という事態が引き起こされ、一方で地域間の人流規制による人出不足から来る流通部門の停滞により、物価が上昇基調に移り、従来の経済デフレ基調からインフレ基調へと内外での環境が一変した。

国政においては令和二年から発足した菅政権がコロナ対策への国民の不満不安を払拭できず与党内の思惑の中で政権交代が引き起こされ岸田新内閣が発足した。

一年延期した東京オリンピックはもう引き延ばされないという背水の陣の中で感染症対策を実施しながら、ほとんど無観客の会場で競技を行うという前代未聞の状況の中で開催された。開催期間、感染率は上昇し続けたが秋口になって年初から開始したワクチン接種の効果が現れ始め、暫時国内の感染は小康状態に落ち着いた。

日本連句協会総会の取止め

当初、日本連句協会としては京都に於いて令和三年の連句協会総会並びに全国連句大会を計画していた。この大会はリアルな座とリモートの座とを並行して同時進行させるという協会としては初めての試みを企画し、その為のリート連句マニュアルを作成し、機材の手当も行い綿密な打ち合わせも重ねた。しかし、感染症の流行悪化という諸般の事情を勘案し、取止めのやむなきに至った。地元にて数々のご尽力を頂いた方々には申し訳なく大変残念な事であった。

国文祭の状況

今年も昨年同様延期された宮崎国文祭と和歌山国文祭との開催が予定されていた。宮崎国文祭は募吟とその作品集の発刊は行われたが本大会の開催は残念ながら取りやめとなった。和歌山国文祭は募吟とその作品集の発刊を行い、本大会も十月に開催された。困難な状況の中、その実現にご尽力ご支援頂いた地元実行委員の方、地元の行政関係の方、支援業務に勤しんで頂いた日本連句協会の関係者の方に深く謝意を表すところである。宮崎国文祭の詳細については文科省の公式記録に、和歌山国文祭の詳細については和歌山県の公式記録に詳述されている。

日本連句協会は令和四年に開催される沖縄国文祭の支援に注力し、開催市の沖縄県南城市との打ち合わせを行い、大会の開催イメージを具体化しようとしたが、沖縄県全体が新型コロナウイルス感染症の甚大なダメージがあり思うようには進捗が出来なかった。沖縄には流歌という伝統歌・文芸が隆盛であるところであるが、一方連句そのものを実践する方がほとんどなく、この課題に取り組むべく協会として連句愛好者の深耕に努め努力中である。

デジタル連句の進行

文韻の歴史 「落着に荷兮の文や天津厂」との句もある事から近世以降、国内での文芸関係の書籍のやり取りは頻繁に行われていたものと思われる。連句は座に於いて面々の座談により行われるのが普通の形だが、遠方の連衆とは、特に昨今の社会情勢から文通により行われる傾向が広まっている。まずは郵便等を手段として、次にファクシミリをその手段として、昨今は電子メールによるものも主流となつて来ている。現在のコロナ禍においてはZoomなど会議用ツールを「ベースとして双方向の画像を見ながら、付合いを行う場面が急速に拡大している。

デジタル連句の特徴（会報令和三年八月号の記事を参照）
デジタル連句はいろいろの特性を有している。

文韻ではできなかった間髪を入れぬタイピングによる付合

連衆の地域間距離を圧縮し地域格差を減少させる効果
画像として全ての連衆の表情を正面から正視するという
新感覚

基本的に全ての出句の閲覧が可能

隣席の人間との会話・接触が希薄化

執筆の再登場 執筆の入力担当により、捌が座の運用、

初心の人の指導に注力できるようになった。

デジタル連句の出現は今後、形式的にも内容的にも連句を変貌させていくものと考ええる。

日本連句協会のデジタル対応

Zoom社と年間契約により会員が使用可能なアカウントを整備し、全天候型（地域・体調・家庭の都合に左右されない）連句会開催のシステムを構築した。

また六月には「リモート連句マニュアル」を発行し、日本連句協会の会員委員による全国規模のリモート連句会を開催、多数の参加者を得て今後の定例行事とする自信を深めた。

日本連句協会としての動き

会報 日本連句協会会報は今年も六回の発行を行った。

会報は連句作品、随筆、各種の連絡事項を掲載しているが、感染症流行の影響もあり作品の数が大幅に削減され、会報

に掲載する作品が減少してしまった。このためこれをカバーし従来の紙面構成を維持することに腐心したところであるが従来の内容は確保できたと考ええる。

年鑑 年鑑は例年通り六月に発刊した。掲載作品はグループ分一一四巻、個人一七巻、学生五九巻の合計一九巻となった。引続き学生・生徒の作品の応募を促していきたい。

動画作成 二年前から開始した連句PRのための動画作成は、今年一月、「ミーツ連句和歌山歌枕巡り」をアップし、和歌山国文祭と地元地域の様子を紹介した。

HPの充実 日本連句協会のHPの機能を強化するため、専門機関にその保守管理の委嘱しデータ公開がよりタイムリーで安全な運用を行うようにした。

日本連句協会の登録人数は 令和三年十二月現在四九一名、前年同期比で四六名の減少となった。関連グループは二〇二グループである。登録地域グループに和歌山連句会、愛知県連句協会および岡山連句協会が新たに登録された。

（日本連句協会理事長）

令和3年 主要連句行事一覧表

協 会 行 事	諸 行 事
1 / 5 YouTube ミーツ連句 和歌山歌枕巡り公開 1 / 30 常任理事会	
2 / 1 会報連句238号発行 2 / 13 理事会	
3 / 28 日本連句協会総会・全国連句 大会（京都）（中止）	3月最終日曜 其角忌 （中止）
4 / 1 会報連句239発行	4 / 29 第25回えひめ俵口全国連句大会（松山） （中止）
5 / 8 常任理事会	5 / 4 第25回心敬忌連句大会（中止） （中止の代わりに実作集編纂）
6 / 1 会報連句240号発行 「リモート連句マニュアル」 同封 6 / 6 全国リモート連句大会 6 / 30 連句年鑑令和三年版発行	
7 / 10 理事会	
8 / 1 会報連句241号発行 日本連句協会々員名簿発行同 封	8 / 15～16 京都五山送り火連句大会（京都）（中止） 8 / 20 第35回連句フェスタ宗祇水（郡上）（中止） 8 / 22 国民文化祭みやざき2020（日南市）（中止） 8 / 29 くろしお連句大会（市川）（中止）
9 / 11 常任理事会	
10 / 1 会報連句242号発行	10 / 10 浪速の芭蕉祭（大阪） 10 / 18 フェニックス連句大会（リモート） 10 / 30～11 / 31 国民文化祭わかやま2021 （上富田）
11 / 13 理事会	11 / 21 裾野市宗祇法師の会（裾野） 11 / 23 さくら草連句をたのしむ会（浦和）
12 / 1 会報連句243号発行	12月 第47回俳諧時雨忌連句張行（東京・北区） （中止）

作

品

—連句グループ五十音順—
割付の関係で前後する場合があります。

《愛知・愛知県連句協会》

百韻 コロナ終息祈願熱田神宮奉納

『秋 茜』

健やかを願ふ一幅秋茜

暈を踏めば新たななる涼

旅立ちの船ゆつくりと月明に

案山子はずつと手をあげしまま

葉書くる金はあるかと兄の文字

おやつを包む赤い千代紙

梅雨晴れ間首都高速は混み合ひて

凌 霄 花 空 へ 広 ござる

石組のキャラバンサライ眠るらむ

平和を謳ふ手話のアイドル

いつだつて笑ひ絶やさぬ君と僕

婚 礼 菓 子 を 配 る 習 は し

風そよと祠小さき地藏尊

ハスキー犬と軽くジョギング

月凍てる親の勧める宇宙旅

忘年会は法螺を吹合ひ

奥座敷燈明皿の火は揺れて

宅 配 便 の 迷 ふ 散 村

間瀬芙美

宮川尚子

稲垣渥子

由川慶子

正村 有

出原樹音

長坂節子

小野芳梅

石川 葵

石原未那

板倉 合

深津明子

武藤美恵子

渡辺洋子

青木秀樹

恒川暁子

渡辺正和

荒川道子

湧き水と星空だけが総資産

S D G S 夢で終らぬ

豎琴をかたぶける腕花の下

光をまとひ遊ぶ仔猫ら

貝殻を渚に拾ふ春の昼

足裏を掬ふ潮の暖か

独り住む母の無聊を案じつつ

ワクチン接種長い行列

二九の日はビール一杯サーブスに

越後上布の項艶めく

とつとつと告白をする山男

畑の小屋の無人販売

雨ポツリ傘を抱へてトトロ来る

見送つてゐる幼稚園バス

新聞に五輪選手が躍動す

ご褒美ならぶけふの食卓

コンピニのレジ軽やかに月中天

早出シフトのさはやかな風

敬老日相好くづす爺と孫

丸い背なかで鶉啄む

災厄を祓ふ鎮守の護摩太鼓

資産運用届く D M

週末は筋トレジムにいく事に

原田徹夫

坪井真知子

矢崎 藍

田中絢子

中森美保子

杉山壽子

長谷川芳子

島田裕子

尚子

中西静子

八雲鏡湖

波多野茂子

寺田重雄

高橋すなを

安藤なみ

青砥和子

西田一枝

古賀幹子

松尾博雄

小柳由紀子

大久保志遼

芳子

壽子

こんな角度で君に傾く
 恋文が消えてしまつた感熱紙
 演歌流れる歳晩の街
 月の下悴む指に息かけて
 そろり踏みだす狭き稜線
 終活はアルバムからと友の言ふ
 恩師訪ねてかぎろひの辻
 花の舞ふ触るるはなびら慈しみ
 市電のカーブ緩くのどらか
^{ミョ}振り出しに戻りつ上る絵双六
 泣いて笑つて吹いたぼつぺん
 恋に痩せ髪をばつさり切つた夜
 美しき媼の秘する来し方
 嘘ついたことないなんてことは嘘
 始発列車に冬林檎の荷
 煙霧濃き倫敦のパブ賑はひて
 ピースサインで跨ぐ子午線
 自撮り棒伸ばし記念の一枚を
 栽培日誌つける菜園
 穴出でて蛇の戸惑ふ地温計
 塾の講師のあだ名ごんずい
 雪解川渦巻く中に月の影
 厄年迎へお伊勢参りに

尚子 裕子 鏡湖 静子 重雄 茂子 なみ すなを 一枝 渥子 芙美 芳梅 葵 慶子 節子 樹音 有 山本秀夫 松井文子 徹夫 森田美耶子 田中イスズ

^{ミツ}隈取りの人氣役者が見得を切る
 コロナ対策飛び飛びの席
 完璧な不在証明午後八時
 寒山拾得痴れたふるまひ
 くつくつと鮫鱈鍋の煮え立つて
 新天地へと彼に寄り添ふ
 惚れ直す駅のピアノの愛讃歌
 シナモン香るアイスクリーム
 降りしきる手筒花火の火の粉浴び
 齧れぬほどにメダル大きく
 夢多き魔法の部屋の遊園地
 回転扉回る夕月
 こぼれ萩扱ひなれし松葉杖
 露座の大仏かりがねの行く
^{ナオ}ノーベル賞受くる真鍋氏冬始め
 小春日和のやうな日本
 ひと息に早口言葉言ひきれて
 音痴のまねもインコ上手に
 幼な児はお医者さんですキツザニア
 あそびのなかはお姫さまとや
 大喧嘩ものともせずにする電話
 君をなぞれば海のおとする
 ふたり分寝覚めのコーヒー淹れませう

字井希 近藤とみ子 美恵子 平羽州 明子 眞知子 福井直子 石川桃里 暁子 佐藤ふさ子 徳永あき子 塚本益美 道子 芳子 壽子 すなを 鏡湖 幹子 茂子 重雄 尚子 美保子

本棚にある料理全集

秋湿り森に妖怪棲む噂

ムーミン谷の紅葉鮮やか

登高の酒のむ空に淡き月

運動会でま^まずは体操

亡^ちき友の手紙みつけて時鳥

わたしはいちごあなたはみぞれ

夢だいてみんなの希望小宇宙

液晶画面突と消えたり

幸せは洗濯物を畳む時

オールデイズを聞いて懐かし

花の下タイムカプセル開封す

大掃除して福のおでまし

裕子

静子

なみ

博雄

和子

すなを

由紀子

芳子

鏡湖

美保子

重雄

幹子

壽子

捌 初折

二の折

三の折

名残の折

間瀬美

中森美保子

稲垣渥子

杉山壽子

令和三年七月十七日首
令和三年十月三十日尾
(文音)

《岡山・赤のままの会》
宗祇法師生誕六百年記念奉納百韻

『御賀玉の実』

御賀玉の実や六百年むほとせの宗祇像
思ひ遙かに仰ぐ夕月
赤とんぼ児等を待ち受け群舞して
匂ひ漂ふパンブキンパイ
爪先で回転椅子を廻す癖
懷中時計やをら取り出す
離島へのフェリー運航けふはなく
夏鶯の声も遠くに
ウしたらでん予報通りに鳴り出して
浴衣の裾をからげ隠れ家
同棲の憧れ世界「神田川」
気配だけでも背筋ぞくぞく
懐かしきバーでは独り琥珀色
くすんだ壁に画家の自画像
胴長の犬に散歩をせがまれて
踊る落葉を追ひかける道
寒月に魅入られ鬼女となる媼
芸なき猿を勇者連れ行く

本屋良子捌

本屋良子
勝又丘女
服部秋扇
高澤貴々
青山牛蟹
赤坂南天
内藤秀穂
山本秀夫
永禮未鬼
古田もえ
中岡実来
正村有
篠はらつば
土屋日菜
高橋つらら
篠原輪菊
黒瀬琢葉
室伏満晴

頂の池塘の水も涸れ果てて
カンニンググしてやつと進級
花の昼グーグル駆使の留学生
うねうねくねり田螺這ふあと
ニオ京菓子の彩かるやかに弥生尽
宇治十帖を包む風呂敷
昔の牛車操る映画村
クリスマススソング菓の屋根より
お揃ひの手袋を編む草食系
振り向かせます腕に繕りかけ
青春は夢のごとくに過ぎゆきて
突如現る深層心理
占ひ師より壺を買ふ裏通り
タワーマンション一階に住み
浮かぶ泡命をつなぐ機械音
今や希少か飛騨の雷鳥
月に泳ぐ家族みんなの鯉のぼり
ピザにはまつて庭に石窯
ニウ料峭の薪割る姿目に止めて
新入生の青き願
ミヨソティス押し花君に送らむと
麒麟に乗つて攫ふ貴婦人
不老不死玉の白肌永遠に

丘女子
良子
貴々
牛蟹
秋扇
未鬼
秀夫
琢葉
もえ
南天
良子
日菜
はらつば
牛蟹
輪菊
秀穂
実来
満晴
つらら
良子
秋扇
丘女子

海の向うの大統領選
 アメイジンググレイス歌ひ夜の長し
 朋友来り月に乾杯
 あれそれで話合はせる村芝居
 龍描かれる寺の天井
 法の雨悪人とても區別せず
 母のぬくもり手びねりの碗
 マフラーの模様好きな花言葉
 雪の垣根はめでたさの道
^{ミオ}熊眠る早乙女山の泰然と
 コムラガエリは毎朝のこと
 ミル挽き豆ネルドリップの同じ趣味
 あなたは麦茶わたし麦酒よ
 帰りなむ時鳥啼く君の郷
 間隔をとる椅子の配置図
 欲望といふ名の電車待ち続け
 お百度石に紙漕折り行く
 バスケット部活帰りの朧月
 絵凧掛りて電線の揺れ
 暮の春トトロの住まふ深き森
 静かで暗い地底探検
 どこからか阿弥陀如来の慈悲の声
 野良仕事終へ千草踏みしむ

貴々 南天 秀夫 琢葉 もえ 秋扇 日菜 南天 秀夫 実来 有 秀夫 是らつば 南天 日菜 秋扇 琢葉 秀夫 南天 貴々

^{ミツ}除染済み人住まぬ里月堂々
 ぬかるみの跡鹿か猪かと
 想像力優しく広く伸びやかに
 胸の膨らむ若き日の旅
 子午線にクルーズ船のぞめき立ち
 バグパイパーに似合ふタータン
 白壁の街の柳の芽は揺るる
 好きと言へずに消える淡雪
 筒井筒おぼるなれどもいつまでも
 京の町屋に残る恋文
 猫追うて姉三六角蛸錦
 歩き疲れて夕方となり
 どどどんとコロナ退治の揚花火
 老も若きも汗を拭きつつ
^{ナオ}夏あざみ取ればどこかに掠り傷
 アンドウトロア数へてみてよ
 夢多きフランス人形棚の上
 寝覚めてみれば知らぬ美女立つ
 鼻の差で牝馬三冠乗りこなし
 まう一戦を誘ふ目配せ
 東方に失せ物ありと初神籤
 大地あらはに奈良の山焼
 見上ぐれば「きぼう」の光照らす宙

日菜 丘女 有 是らつば 未鬼 実来 づらら 日菜 秋扇 丘女 牛蟹 貴々 良子 南天 琢葉 未鬼 秀夫 もえ 秋扇 牛蟹 実来 秀穂 輪菊

カント・デカルト・ショーペンハウエル
 薄皮の嘘暴かるる偽学者
 川を遡上の鮭を描きて
 十三夜クラリネットの音色澄み
 化石の眠るそばに穂芒
 師と吾と高きに登り詩を吟ず
 枕投げした修学旅行
 味噌汁の味に故郷思ひだす
 迷はず開ける未来へのドア
 優秀な故に悩める籠りびと
 両手を耳に雪解けの音
 花零れ平和紡がむ歌の糸
 山笑ふ日に約す再会
 有
 はらつば
 良子
 未鬼
 つらら
 秋扇
 南天
 良子
 貴々
 秀穂
 秀夫
 丘女
 琢葉

連衆

本屋良子 服部秋扇 高澤貴々 赤坂南天
 黒瀬琢葉 勝又丘女 青山牛蟹 古田もえ
 内藤秀穂 山本秀夫 永禮未鬼 土屋日菜
 篠原輪菊 篠はらつば 正村有 中岡実来
 室伏満晴 高橋つらら

令和二年十月三十日首
 令和二年十一月三十日尾
 (文音)

歌仙 『土に汚れて』

衆議判

冬ばれや土に汚れて手を洗う
 大根引きにはしゃぐおさなら
 開店の列は途切れることもなし
 スマートフォンに着信の音
 月今宵指揮棒の先ひかりをり
 残る燕の住まう軒下
 重陽の奈良の都に使者来る
 じつくり蒸らすイエメン珈琲
 すれ違い繰り返すのが早道よ
 仕草可愛い年上の女
 目覚めれば指の間に詩の一遍
 コンセントから抜いたアイロン
 花火を終えて煙の向こう蒼い月
 亡くした母の顔をふと見る
 詰将棋竜王の報他人事に
 断層誘う夢の白亜紀
 一人静二人静に嫉妬して
 路そこここに仮初の春

相川智彦
 大久保風子
 坂根慶子
 五郎丸照子
 近藤順子
 山中たけを
 慶子
 風子
 純子
 照子
 慶子
 たけを
 智彦
 照子
 風子
 純子
 風子
 慶子

ナオ
 姫虻の羽音幽かに見え隠れ
 ジャケットで買うジャズのアルバム
 チェイスアーをサイドボードに用意して
 推理の糸は纏れたるまま
 玄関の赤い草履も小正月
 陰に積もりて清き新雪
 前髪を切られてしもたどうしよう
 羅馬はいつも恋のはじまり
 ラテン語で書いて送った三行半
 砂の時計のように戻して
 荒波に月の雫の零れゆく
 無口のままに秋の遍路へ
 ナウ
 遠慮せず音立てて喰え走り蕎麦
 ニキビあふれる野球少年
 孫の名に翔の字ひとつ入れてみる
 昨日は曇り今日はお天気
 城跡にシャッターチャンス枝垂れ花
 笑える山に飛ばすウイंक

本屋良子
 松澤龍一
 鈴木千恵子
 鈴木善春
 高月三世子
 吉岡貴範
 良子
 慶子
 龍一
 純子
 照子
 千恵子
 善春
 照子
 三世子
 良子
 貴範
 千恵子

令和三年十二月四日首
 令和四年 一月八日尾

(於・リモート連句)

歌仙 『初蝶の』

白根順子捌

初蝶の渾身といふ高さかな

白根順子

せせらぎひびく水温む川

高橋たかえ

新社員母に大きく手を振りて

竹本いくこ

乗り換へ迷ふ改装の駅

戸田徳子

望の月ピルの隙間を昇りそめ

三澤律乃

出窓に挿さむコスモスの束

順乃

ッ風炬名残り赤き袂紗のたたみぐせ

いた

噂話は千里をはしる

いた

お相手は宇宙旅行の富豪とも

徳

磨きをかける柔肌の知恵

律

ベルモットグラス交はして罪の味

順

疲れを埋める銀座裏なる

いた

流れくる潮の香りと夏の月

いた

祭囃子の途切れとぎれに

徳

宰相の舵取りのぶれ見えはじめ

律

ナビの言ふまま旧道を行く

徳

薄墨の影美しき花の舞

順

角を落として鹿のおだやか

いた

ナオ空へ夢放り投げたき半仙戯

フルーツサンド癖になりさう

抽象画掛けられしまま時ながれ

般若の面があざ笑ふ闇

襟立てて朝のジョギング始めたる

不覚のくしやみ二回三回

合コンの胸は隠さず歳かくし

お姑さまにはお仕へします

冬男師の奥津城寂と供華たむけ

町起こしする連句と俳句

集ひるて月透かしみる夜光杯

雲むらさきに雁わたる頃

ナウそぞろ寒ささやかな寄付ユニセフへ

ほつと息つく雨後の山々

何事もなべて吉とす齡なる

永き日に読む「天声人語」

石となる残雪に飛花限りなし

春虹消えるまでを子と立つ

徳 順 いた 徳 律 順 いた 徳 律 順 いた 徳 律 順 いた 徳

《埼玉・あした連句会―その二》

歌仙 『年 の 空』

高尾秀四郎捌

会えぬ人また増えにけり年の空
 氷柱の雫穿つ庭石
 古都めぐり風情も味も人気にて
 観光バスの長い行列
 右に海左の山に見ゆる月
 道の駅では貝割菜買う
 ショッピングモール猪駆け廻る
 猟銃肩の背ナにほれほれ
 添い遂げる覚悟を決めて北の旅
 くもりガラスに一筋の罅
 巫女さんがコロナに罹り受く祓い
 プーケットへのツアーキャンセル
 大皿に月光も盛る夏料理
 竹風鈴の音色こもごも
 南洋の遺骨収集今年また
 かつては駅に伝言板の
 廃校の同窓集う花吹雪
 聡太翔平揚雲雀鳴く

高尾秀四郎
 二村十専
 次山和子
 川上綾子
 岸田芳雄
 高尾秀四郎
 二村十専
 次山和子
 川上綾子
 岸田芳雄
 高尾秀四郎
 二村十専
 次山和子
 川上綾子
 岸田芳雄

ナオギヤル達の笑顔はじける春スキー
 吟醸よりも生酛純米
 仕切りある会話に出来る見えぬ壁
 上司も部下も色即是空
 踏み込めばざくと碎ける霜柱
 臨時ニュースは凍死者のこと
 ナースとは出会い少なき職業で
 遠距離ゆえに逢えば炎上
 アイコンの画像は晴れた空になり
 合唱祭は野外ホールで
 満月の船のデッキで語り合う
 名残狂言出来の良しあし
 ナウ運動会村長さんを借り物に
 紙のメダルをかじり満面
 弁当の真ん中でんと玉子焼き
 紋白蝶の行きつ戻りつ
 花の寺晋山式の朗らかに
 手を携えて風光る道

高尾秀四郎 二村十専 次山和子 川上綾子 岸田芳雄 高尾秀四郎 二村十専 次山和子 川上綾子 岸田芳雄 高尾秀四郎 二村十専 次山和子 川上綾子 岸田芳雄

令和三年十二月二十一日首
 令和三年十二月三十一日尾 (文音)

歌仙 『湖』 の

川岸富貴捌

湖の山影蒼く燃ゆ盛夏

川岸富貴

筒鳥を聴き茶屋で一服

宮本艶子

書道家の筆の談義に時止めて

田口晶子

老いを忘れて声の華やぐ

江森京香

満月の叢雲垣に風しきり

晶

ホロホロ畑に零余子こぼる

艶

^ウ甘くちの疲れを癒すぬくめ酒

京

羽化するように妻はきれいに

富

兄上は国会議員僕は秘書

艶

歯舞 諸島 巡る 休日

晶

急速にコロナ被害の拡大し

京

肚へどっしり寺の梵鐘

富

見え隠れ狐の遊ぶ冬の月

京

破れ障子に額をびたりと

晶

気安くて長屋暮らしのやめられず

艶

売れない文士乾くペン先

京

「はやぶさ」の終着駅は花万朶

艶

名代の菓子舗暖簾うららか

富

^{ナオ}テニス部を軽く立ち上げ新社員

会話をめらか外人コーチ

錦絵の蒐集品は地下室に

意思を曲げないひたむきなひと

婿殿に長老きびし荒神輿

薔薇の褥に待つは女房

船舶のGPSは命綱

潮のまにまの流木の果て

飛ばされては馬券のかぶる泥

夢をかなえしピアノの反田

階を弓張月の中天へ

エコバッグには焼きたての栗

^{ナウ}楽屋入りさらりと脱ぎし秋羽織

家事ロボットでスマートな日を

おしゃれして集う熟女の連句の座

窓を開ければ蝶のおとない

戦後史を語る郷里の花堤

雲にあずける惜春の情

京 晶 富 晶 艶 富 晶 艶 京 富 晶 艶 京 晶 艶 富 晶 艶 京

令和三年八月 四日首
令和三年十月十四日尾 (文音)

《埼玉・あした梶の葉連句会》

十八韻順候式 『枯野』

高橋たかえ捌

起もの深く見ゆる枯野となりにけり	宇咲冬男
凧に大書す隅烽の二字	高橋たかえ
吹く風の音の筈の静まりて	角田双柿
麻雀牌を打つ春炬燵	白根順子
承たびら雪出前のピザの届けられ	宮本艶子
につこり笑うすつぴんの顔	江森京香
夢に見る憑きて離れぬ旅の宿	田口晶子
夫妻揃って白寿祝える	三澤律乃
角樽は選び抜かれた吟醸酒	川岸富貴
海の向うに凜と夏富士	順た
転 玻璃窓の月に乗らんとする守宮	順
念持仏彫る手元匂やか	艶
感染はしないさせない秋湿り	京
気儘勝手に生える舞茸	晶
我が影へ絹の織物かけてみる	た
洪沢翁は経済の王	富
結人さまさま思ひ出繋ぐ帰り花	双
初鶯のこえの昂ぶり	順

令和三年十二月二十五日尾 二日首 (文音)

歌仙 『成す事を』

田口晶子捌

成す事を端折りし午後の冷え三時

瓢箪池に番鴛鴦

アトリエに油採の匂いひろごりて

棚に置かるるセラピーの瓶

満月を佳境に誘い野外劇

飛んで草の実張り付き上手

掛橋を案山子かつがれ急く可笑し

ころがり込みし祖父の虎の子

雄叫びをあげてもんどり夢の中

旅はマイカーフロリダ半島

亜麻色の髪の毛キャディーにひと目惚れ

とんと弾みで新居は城よ

ダイヤよりきらりきらつと月の滝

試行錯誤でスタウト美味し

コロナ禍の雲は変幻空模様

ラジオ体操増えてにぎやか

しばらくは花の世となり天が下

快き東風混声合唱

田口晶子

越智みよ子

竹本いくこ

晶

み

い

晶

み

い

晶

み

い

晶

み

い

晶

み

い

ナオ 蕨狩る文人の坂越えきたり

嬉々と中州にはつけよいよい

仕事でも診察さえもオンライン

木の香放つは恵比寿大黒

リストラでカメラづけなる惜命忌

押しかけ女房悴け猫連れ

戯れに掘って温泉当たり籤

あつという間に観光名所

プラ塵に海のゆく末いかにせん

発明好きの家は工房

議事堂を弓張月の動かざり

蓑虫泣かせ雀荘暮らし

ナウ 謎孕むバンクシー展原宿に

車内は寂と皆携帯を

スカラ座へ吊り広告はサイケ調

よりどりみどり雛料理です

渾身のパッチワークよ花の山

きやつきやと過ぐる遠足の列

晶

み

い

晶

み

い

晶

み

い

晶

み

い

晶

み

い

晶

み

い

晶

み

い

晶

み

令和三年十一月一日首
令和三年十二月三日尾 (文音)

《埼玉・あした・くさくき・さくら草連句会合同》
宗祇法師生誕六百年記念

百韻 『秋果盛られて』

楽しきや秋果盛られて銀の皿
夜長に聞きし孫子らの夢
今日の月フランス窓にさし入りて
ねぐらへ帰る椋鳥の群
悠々と流れる川を見て飽かず
はやりの店はすでに行列
機関車は元気な音で上機嫌
民屋みんわくつつみ眠る山々
木枯ウに陶の狸が首すくめ
器用に作る竹製の箸
才媛の祖母の生き様学ばんと
式部の本を開く昨今
行く先の見えぬ浮世をコップ酒
ふと口ずさむゴンドラの唄
初恋の味は甘くて酸っぱくて
タンスの底に残しおく文
ひろびろと開け放ちたる夏座敷
手作りアイス友をもてなし

磯直道
小川廣男
東浦佳子
水見徳代
渡辺ハツエ
田村昌江
安藤君子
守口薫
佐藤えつ子
村上孝枝
渡邊常子
渡辺俊子
山口安子
松本光世
松田千佐代
大江加代子
橋本美智子
大村房枝

ふるさとに残す老いたる父母思い
風に吹かれて犬とお散歩
道祖神瓶に供えの花一朶
水平線ニオに蜃楼の月
春耕ニオの生活をつなぐ里山に
ふつくら焼けて甘いカステラ
醤油樽いくつも並ぶ小豆島
内股で来る檻のライオン
マザコンがまだ抜け切らぬ彼氏殿
ダイヤモンドが決める婚約
振り返りこれでいいかと独り言
葉の数がまたひとつ増え
芭蕉布の涼しき風を纏う月
香水の香の強き空港
アメリカの大統領は激戦に
スマートフォン機種の変更
街中に花満開の旅に來て
都おどりは甲部歌舞会
虚ニウか実か昨日の夜の亀の声
色鉛筆で描く肖像
亡き人を忘れられずに嫁ぐ姉
肉じゃがはあの好きな味つけ
肩寄せて夢を語りし寒の夜半

篠原正明
加藤恵子
濱崎琴代
小林強
井上雨道
戒能多喜
沖村むつ子
上甲洋子
松永由紀
石丸信子
渡部奈緒
森澄子
阿部千歳
阿部裕子
紀伊郁子
山田久栄
松永勝政
山内久美
松永久美
山田明美
馬場由紀子
柳田康弘
佐藤澄江

無住の隣家椿咲き継ぎ
 若返り習い始めしフラダンス
 ギツクリ腰で取れぬ電話機
 冷房の部屋に緋く哲学書
 芸術的に泳ぐ蘭鉢
 聞こえ来るムンクの叫び赤裸々に
 有耶無耶となるお役所の中
 花の虹夢果てしなく広がりに
 蝶のもつる彫刻の森
^{ミナ}逃水のゲートの前で行きどまる
 どう転んでも土の上なり
 こそ泥の寿限無寿限無のポンポコリン
 シヤネル・ヴィトンを買ってやりたい
 久々のホストクラブに入り浸り
 淪落の果て青酸カリを
 火吹竹吹いて煤ける太柱
 軒のつららの先のきらきさら
 宙天へガラスのビルの伸びきって
 五輪開催切に祈れり
 誠実な笑顔たいせつボランティア
 バイオリズムの規則正しく
 悠久のペルー遺跡を照らす月
 秋思飲みこむ大いなる湖

大内善一
 宮本艶子
 三澤律乃
 高橋たかえ
 江森京香
 田口晶子
 伊藤稜志
 高尾秀四郎
 竹本いくこ
 川上綾子
 越智みよ子
 川岸富貴
 須賀経子
 青木つね子
 角田双柿
 設楽千恵子
 柳瀬富子
 石井季康
 塚越一申
 白根順子
 戸田徳子
 渡部春水
 岡崎仁志

^{ミウ}七五三親子に晴れ着よく似合い
 シックハウスで悩む湿疹
 おつきあい天然ボケですり抜ける
 種を飛ばしてさくらんぼ狩り
 菓子折に千代紙貼って募金箱
 雨に煙れる坂の教会
 いつまでも止まらぬ涙拭きもせず
 白百合の香に抒情かきたて
 これはもう揺るる乳房よ月暑し
 ダリの絵画に彼と融けゆく
 器用なるゴーストライター売れっこで
 何を隠そう我が家貧困
 遠来の箏篋を奏づる花の春
 無病息災願う屠蘇散
^{ナオ}雪崩止み阿吽の狛は寺を守る
 フェイクニュースに揺れる王室
 小魚のゆらりゆうらり壺中天
 一茶の碑文字石を出たがり
 江戸の空愛と嫉みと懐かしさ
 地震無かりしもきしむ痴話箱
 編み返すたび虹色の毛糸玉
 火の鳥はいま何処飛ぶらむ
 限らない漫画作家の仕事熱

山田他美子
 芦澤湧字
 岸田芳雄
 森川敬三
 藤本嘉門
 清水将世
 次山和子
 二村十専
 田中安芸
 小泉桂
 武井敦子
 山中土筆
 服部秋扇
 長坂美代子
 持田はるも
 城山九天
 松澤龍一
 木之下みなみ
 林転石
 高山鄭和
 榊原十詩
 布田三保子
 加藤万里

古今伝授の説はさまざま	加藤亀女
指折って付け案じしや道灌も	大久保風子
急に降られて蓑も借りたし	安楽明郎
天心に名月八雲従えて	伊藤哲子
露草こぼす雫一滴	仁村玲流
^{ナウ} 物音澄むコロナ禍はやも二年目に	和田忠勝
愛想笑いのうまい店番	和田ひろ子
串団子秘術を尽くす垂れの味	澁谷盛興
小公園の雀姦し	松谷輝雄
野点席染付茶碗運ばるる	三浦和枝
春手袋は絹の風合い	渡辺柚
湖北二里花のトンネル花吹雪	福島時子
塚を清めるうらかな午後	本屋良子

令和二年八月二十九日首
 令和三年七月十二日尾
 (文音)

歌仙 『子午線をなぞり』

浅岡照夫捌

子午線をなぞり過ぎゆく初時雨

浅岡照夫

足もとに咲く石路の明るさ

岡部瑞枝

「充電が完了しました」デスクにて

横田めい

リードの先はころころの猫

竹林舎青玉

羈旅舟中月に捧げる詩を吟ず

進藤土竜

もみぢひとひら問ひたげに舞ひ

村松定史

寂庵の主身罷り今年酒

瑞枝

漏刻の矢の浮きつ沈みつ

定史

描かれし肌より香る柔軟剤

光丘真理

婚約式の赤ら引く朝

土竜

そんなはずないのに妬心ふつふつと

瑞枝

口笛吹けば楽しくなるさ

めい

歩を乱す奴もゐてこそ蟻の列

土竜

麦の波ゆれ薄き夕月

定史

地層見て帰りに食べる豚角煮

瑞枝

一反木綿砂漠越ゆとか

青玉

父母よふたたび花は笑み給ふ

定史

ゆつくりと漕ぐ老いのぶらんこ

土竜

小綬鶏の線路横切り音もなく

向かふ病棟南館A

留守宅の掃除ロボット脱走す

モーゼの踵海底にあり

夜をだめて縄綱ひ合はず棕櫚を剥ぎ

話は戻るちよいと熱爛

生前つて生まれる前ねと瞳の澄みて

君でいつぱい僕溺れさう

瓔珞の貴妃の顛末長恨歌

山の形も徐々に変はらん

月照らすこの世の闇を肅々と

百人分に芋の大鍋

ナウハロウィンで賑はふ街へ切符買ひ

板書は今も慣れた丸文字

ボンッヌフをすつぽり布は包み終へ

蛙見上げる雲の行き先

花また花忘れてしまふこともある

夏近き道 poco a poco

真理

めい

瑞枝

青玉

定史

土竜

真理

青玉

瑞枝

めい

定史

めい

定史

土竜

定史

照夫

瑞枝

青玉

令和三年十一月十一日首
令和四年 一月十一日尾 (文音)

《伊賀・伊賀連句会いがまち座―その二》

歌仙 『嚴寒や』

馬岡ひろこ捌

嚴寒や伊賀の高峰いと凜凜し
 里人集う新雪の頃
 テント張りイーゼルの位置調べて
 夕闇急ぐ大きなリュック
 月昇る鍋にたつぷりカレー煮え
 家族総出で終える稲刈
 ひと声につられひと声鹿の鳴く
 一緒に住もう掌に鍵
 駆け落ちの夢から覚める独り者
 『鬼滅の刃』ざらり本棚
 ヒーローのマニア昂じて学究へ
 勉強の士に郷土応援
 オレオレの詐欺悔いており夏の月
 馴染顔して雨蛙来る
 愛想よし飲み屋の女将妹で
 ロールスロイス横付けにする
 花の下恩師困んで大笑い
 空に絵風の風に乗り乗り

山村としお
 藤井克幸
 梅田とほろ
 高井悠子
 森田満枝
 町野正子
 松岡芳恵
 馬岡ひろこ
 克満正
 と正
 ひと
 ほひ
 悠芳
 と芳
 満と

ナオ上流へ上流へ行く上り鮎
 平野歩夢は金メダル獲る
 里土産航空便で届くチョコ
 ジオラマの町駄菓子屋がで
 咳込んで十円玉を見失い
 午後は北風決まって曇り
 練達の仏蘭西料理評判に
 額寄せ合いつつきあう鍋
 お揃いの歯刷子並ぶマグカップ
 別れの手紙ポケットに入れ
 戦なき世界願って望の月
 菩提樹の実で作られた数珠
 ナウ歌手目指す師匠厳しく身に入る
 掛け声元氣フラメンコ好き
 三度目の接種早くと急かされて
 野良仕事 中動画 配信
 満開の花咲かせます爺と婆
 夢ふくらんでしゃぼん玉飛ぶ

ほ克満正 芳と 正克 克満 悠と 正

令和三年十一月 十八日首
 令和四年 二月二十七日尾

(於・アトリエいろは)

《伊賀・伊賀連句会いがまち座―その二》

二十韻 『五輪会場』

山村としお

巨大なる五輪会場酷暑かな

山村としお

基調の赤は真紅赤富士

梅田とほる

海の幸求めん夜の港出て

藤井克幸

仮眠のベッド演歌聴きつつ

森田満枝

月光を浴び念願の宇宙旅

ほ

織姫無事に逢瀬果たすか

克

駆け落ちの駅前顔のよく咲いて

満

新型加えコロナ増ゆ都市

と

今はまだ田舎帰りを控え待ち

克

従姉妹と聞いた祖母と戦争

満

^{ナオ}荒漠の山河を照らす月冴える

と

歯をくいしばり耐える寒垢離

と

行は行、酒席は酒席令和なる

と

座敷童もマウスシールド

と

窓越しに目移しそつと覗き見る

ほ

入籍済ます二人気が合い

克

^{ナウ}早暁の窓より鳥語降るように

と

親の尻尾に戯れる猫の子

ほ

丘陵の花の匂いに酔い痴れる

克

夢を願いて仰ぐ初虹

満

令和三年七月二十日首
令和三年八月八日尾 (文音)

歌仙 『一会座会』

根津忠史捌

秋霖や一会座会の人となる

檀紅葉を活ける床の間

白い月油絵具で描かれて

岬の辺り穏やかな波

恒例の煉瓦倉庫のモーターショウ

個性豊かな日傘乱立

山荘に昼餉の匂い戻り来て

釣果よろしく弾む団欒

さりげなく抜け出して打つ恋メール

芝居がかった甘え声する

江の島の弁天様は琵琶を抱き

面子ビー玉麩菓子売る店

凧に外れ馬券の舞ひ散りて

肩窄め行く凍月の道

朗々と塔の上から響くミサ

鳩に餌やる碧い目の子等

幼馴染地酒酌み合う花の下

窓開け放ち暮遅き里

庄司呂折
海老原 雅
今井みつ代

増井ちえこ

大津博山

根津忠史

呂折

ちえこ

みつ代

忠史

博山

呂折

雅

みつ代

ちえこ

博山

忠史

ナオすれ違う列車棉雪載せたまま

ワクチン素早く作る凄技

ポケットに小銭と夢を詰め込んで

子犬まぎれて庭に住みつく

御柱はなに乘るのはうちの夫

お忍びの客残す香水

黒髪の乱れ目覚めを思う時

選挙戦など金で片づけ

難問のバズルを解いて自慢する

縄文土偶宇宙服着て

月光の深々しみる峠芝

齒ごたえ嬉しここの新蕎麦

ナウ角伐にせがれも連れて行くつもり

スマホ充電忘れないでね

ルーチンの筋トレ終えて長い風呂

空と海とを染める群青

我が市の五十周年祝う花

日課の散歩春惜しみつつ

呂折

ちえこ

みつ代

忠史

博山

呂折

雅

みつ代

博山

ちえこ

忠史

呂折

ちえこ

みつ代

忠史

博山

令和三年十月十七日首尾

(於・伊勢原シティプラザ)

歌仙 『犬駆け回る』

放たれて犬駆け回る 菟田かな
 用水池に帰る 残月
 大いなる南瓜多めにほうとうに
 健康第一 他人の先行く
 加湿器の安売店を物色し
 てくたく歩く 冬晴の街
 ムトンネルを出ればまた入る伊豆の旅
 かけ流しの湯岩風呂に満ち
 カットせし髪のようなじに絡む腕
 記者会見は再婚のこと
 選ばれてドラフト制の枠に入り
 海に野心を燃やす 中国
 甚平の広き肩 幅月 仰ぎ
 グラスビールをぐつと飲み干し
 泣きごとはないと言はないと課長補佐
 太鼓の音の響く 御社
 港から丘へと続く花万朶
 ニコライ堂の霞む夕暮れ

廣崎竜哉捌

廣崎竜哉
 飯田せつ子
 前田明水
 千場ひで子
 石川桃瑪
 竜哉
 せつ子
 明水
 ひで子
 桃瑪
 竜哉
 せつ子
 明水
 ひで子
 桃瑪
 竜哉
 明水

ナオ 植ゑたての芭蕉子猫に嗅がれたる
 エチケツトなる手指消毒
 上昇の株価は直ぐに急降下
 酒を飲んではいつとも忘れて
 裏切りは水着の跡も消えぬ間に
 どんでん返し夜祭のキス
 仮面脱ぎ恥らふ赤きコスチューム
 ヒンズー教の奥義 繻き
 山の端の沈む夕日に何願ふ
 独り静かに小夜曲を聴く
 あはれ知る家紋や月にほととぎす
 竜胆の色 カンバスに置き
 ナウ 城跡の早生の蜜柑は海望み
 リハビリ終えて今日は退院
 評判のベストセラーを買ひ求め
 百年先を思ふ 永き日
 花守の技丹念に子に伝授
 どこか近くで春蟬の鳴く

近藤蕉肝

せつ子
 ひで子
 竜哉
 蕉肝
 桃瑪
 ひで子
 せつ子
 明水
 桃瑪
 竜哉
 せつ子
 明水
 ひで子
 桃瑪
 蕉肝

令和三年十月十七日首尾

(於・伊勢原シティプラザ)

歌仙 『夕端居』

老猫の散歩短し夕端居
 天竺牡丹様々な色
 鄙港にポンポン舟の音のして
 友の電話に用意する椅子
 草山に寝転んで見る昼の月
 忘れうちわが風に飛ばされ
 ひらひらと手のひら返る盆踊
 袖の陰から送る流し目
 飛び乗ったユーロスターで逃避行
 藁人形に五寸釘打つ
 古民家にワーケーションの夢広げ
 河原を掘って浸る露天湯
 ちり鍋を囲む団欒窓の月
 鎮守の杜に梟の声
 突然にUFO出たという噂
 平均株価乱高下する
 校庭の真ん中どしと花大樹
 胸の嬰兒と仰ぐ初虹

藍原綾子捌

藍原綾子
 菅沼不立
 宮澤次男
 角田紀子
 次男
 綾子
 不立
 綾子
 不立
 次男
 綾子
 不立
 紀子
 綾子
 紀子
 綾子
 綾子
 紀子
 次男
 不立
 綾子

耕人の紫煙燻らす畑の畔
 作業完了ボタン押すだけ
 オリパラの後は応援照ノ富士
 行合いの隙刀ひとふり
 宙の甕割れて俄に走り梅雨
 浴衣掛して留守番の酒
 新調のカメラ構えて娘は笑顔
 遠距離なればなおも恋しく
 作り名で使い分けてるプロフィール
 意のままならぬゴルフボールは
 月渡る城のほとりの交差点
 桃の実供う同胞の墓所
 ナウ総裁の座に納まりてそぞろ寒
 大型犬が主引き擦る
 店先にほうじ茶の香のひとしきり
 平積みみされる評判の本
 花満ちる再会の日の土地言葉
 あんこたつぷり蓬饅頭

寺本

次男
 紀子
 不立
 次男
 碧子
 不立
 紀子
 碧子
 次男
 碧子
 次男
 紀子
 不立
 次男
 碧子
 綾子
 紀子
 次男
 不立
 碧子
 綾子
 紀子

令和三年七月 十五日首
 令和三年九月二十八日尾 (文音)

歌仙 『七月や』

三橋大吉捌

七月やポツポツ並ぶ海の家

三橋大吉

色とりどりの水着干さるる

りん亭

ホームラン応援の声高らかに

半田有杜

酒とつまみをかたわらに置き

〃

カラオケのリズムに玉兔右左

菅沼公子

穂薄揺れる細き山道

齋藤恵子

飛び入りの郡上踊りの輪の中に

りん亭

知らぬふりして渡す付け文

有杜

頼朝と政子の出会い逢初橋

りん亭

息を切らして登る急磴

公子

健康は何はともあれウォーキング

有杜

双子のパンダ育ちすくすく

恵子

漆黒の空白々と凍てし月

大吉

冬至かぼちゃをほっこりと煮る

公子

観覧車乗れば地球が丸く見え

〃

運転免許早め返納

恵子

花の夜は良きことのみを思い出し

有杜

陽炎の立つ遠き蔵町

りん亭

ナオ 足腰を鍛えて父はお遍路へ

行く先々の薄き標識

ぼっぼ屋は指で確認転轍機

バウムクーヘン午後のおやつに

家づとに鮑を提げて千鳥足

夫とサーフィンワイキキの浜

訳ありの方とぼったり鉢合わせ

パソコン越しにまさか再会

疲れ目に眼帯かけた病院長

実験室に並ぶ標本

むずかる児抱き上げ見上ぐ今日の月

ナウ 菊人形に似たる面差し

市地の芝居の稽古に暮れる青年団

晴れ晴れと五輪塔婆に手を合わせ

おひとり様の暮らしにも慣れ

花吹雪全身に浴び車屋さん

スクランブルを過る軟東風

公子

有杜

りん亭

恵子

大吉

公子

有杜

りん亭

公子

大吉

有杜

恵子

有杜

りん亭

公子

大吉

恵子

りん亭

有杜

令和三年七月 十五日首 (文音)
令和三年九月二十七日尾

歌仙 『花栗や』

杉本 聰捌

花栗やちひろのシャツの少女佇つ

宇野恭子

螢の遊ぶ公園の池

北野真知子

稿を練り反古くづかごに溢れるて

大島朋子

珈琲豆をがりがりと挽く

川井城子

くつきりと球の縫い目を照らす月

白石藻思

部活の団居包む新涼

杉本 聰

美術展今年の作も次点なり

藻

キッチンカーの相席を乞ふ

城

野暮天はをんな心を読み違へ

恭

独身のままやがて還暦

真

猫が喉鳴らしすり寄る膝元に

城

白杖のある傘立ての甕

朋

神の旅殿あゆむ福の神

恭

月の路地裏急ぐ掛取り

全

交番のポスター詐欺に御注意と

全

アナウンサーのふくよかな声

真

吟行はまだ三分なる花の山

全

昔ながらの畑打ちの景

藻

城

ナオ 訥々と御文書称ふ蓮如の忌

広場に集ふボーイスカウト

幾度も舫結びを練習し

蕎麦屋の匂ひ腹の虫鳴き

碁敵と酌む辛口の冷やし酒

麻の暖簾は阿波の藍染

銭湯を出て振り仰ぐ星の空

夢そっくりの人とぼったり

あの時の愛の証は反抗期

何を言ふとも「ウザイ」「ウッセエ」

恐竜の化石を月の守るかに

移住家族も交へ迎へ火

ナウ 初雪の富士を眺めてかまど組む

ヴァイオリンソナタ響く窓の辺

史上初あにいもうとで金メダル

鮎の巣離れ思ひ思ひに

花の奥古き戦の土塁跡

脇目もふらず野老掘る人

執

沖田泰
野原裕

子 聰 人 恭 真 朋 裕 城 恭 聰 真 藻 裕 泰 朋 裕 泰 筆

令和三年五月二十九日 起首
令和三年七月二十七日 満尾

(於・南砺市井波社会福祉センター)

ソネット 『紫陽花の青』 (交叉韻)

小池正博捌

紫陽花の青に囲まれ抜齒する仲夏	木村ふ	う a
若きナースの瞳涼しき	五郎丸照	子 b
突然に赤いポルシエが壁擦る	ふ	う a
その運命に抗って指揮	小池正	博 b

読みさしの本が二冊に月の舟	中山奈	々 c
秋蝶の羽葉がわりに	正	博 d
父方も母方もみなもののふね	奈	々 c
化粧袋の愛用の紅	照	子 d

弓道は好きです君は大好きです	門野	優 e
冬帽にただ熱は籠って	奈	々 f
じゃんけんのくせに結局サドンデス	々	e

友の鞆を全部持った手	ふ	う f
クリムトの花の明かりの絵をばらす	奈	々 e
永日の酒盃は盾	正	博 f

令和三年六月二十七日首尾

(リモート連句)

歌仙 『水底の石』

石川桃瑪捌

水底の動かざる石秋思かな

石川桃瑪

棄てし秋果の数は覚ええず

大塚丈湖

菊枕月の出づるを待ちかねて

安樂明郎

名を繰り返し補選候補者

石田京

大悪は善かも知れぬ今の世は

丈湖

田亀は泥を出でて灯火に

桃瑪

旅みやげ切子のグラス傾ける

京

独演会に揃ふご鼻肩

明郎

山手線線路移設は終電後

桃瑪

君とうたた寝夢の温もり

丈湖

耳搔かす膝はむつちり絹の肌

明郎

今も変はらぬ土偶ビーナス

京

小春日の日暮に月の白く照る

桃瑪

派遣の社員負けぬ大北風

丈湖

郷愁はキーマカレーとお袋と

桃瑪

書き置きのメモひどい崩し字

京

津波超え丈高く咲け陸奥の花

明郎

霞の海へ進む原潜

丈湖

ナオ 人生の 死生天命 春落葉

町なかの道突如陥没

誰も皆破れし夢を繕はず

後ずさりつつ長廊下拭く

コロナ後の生ビールもて鳴らす喉

帰省の子らは手持ちぶさたで

パソコンで恐竜の声創り出す

愛の謎解き届く数列

眼裏に消えぬ残影神頼み

韓流ドラマ見過ぎたるとか

月光を浴びてシヨパンを弾く美男

蓮の実の飛ぶ池をめぐれば

ナウ 一椀の蕎麦に酢橘の輪を並べ

古き映画を独り観にゆく

灯台は歌に歌はれ名勝地

夕映えの富士しばし嗟嘆す

公達の狩衣姿花の宴

東踊りに人出賑やか

明郎

丈湖

桃瑪

京

明郎

桃瑪

丈湖

明郎

丈湖

京

桃瑪

丈湖

京

明郎

桃瑪

丈湖

明郎

京

明郎

令和三年十一月四日首
令和三年十一月七日尾

(於・八幡山の洋館及び文音)

簾 『二姫二太郎』

一姫も二太郎も被る袖無し羽織
 媛 炉を囲み始む尻取り
 幸せをいのちの果に味はひて
 案山子相手に語る来し方
 月今宵レコードで聴くモダン・ジャズ
 居留地跡の館冷まじ
 若き日の熱き想ひは今もなほ
 お下げのきみをひたすらに恋ひ
 プルーストの名著彩る水中花
 こころ潤す神の滝壺
 白妙の流れは布のごと垂れて
 天女めかして踊るダンサー

鈴木 漠
 赤坂恒子
 永田圭介
 三木英治
 梅村光明
 東條士郎
 恒子
 英治
 圭介
 光 明

我がものと思ふ自由は弥陀の掌に
 草の実飛びて繋ぐ次世代
 SFに月のアパート群が増え
 新酒に酔うて銀河あたりへ
 駅前の開店ラッシュパチンコ屋
 議員の贈るカトレアの鉢
 ナウ温室で育ち寒風など知らぬ
 大黒柱黒光りして
 すこやかに孫笑ふ門福招く
 別れ再会なべてかぎろひ
 艱難のかずかず花を待つばかり
 目借る蛙に馴染む此の頃

士郎
 恒子
 圭介
 英治
 光明
 士郎
 恒子
 英治
 圭介
 士郎
 光 明

令和三年四月満尾（文音・海市の会×ゲスト）

胡蝶 『故郷もどき』

梅村光明捌

表この町は故郷もどき南吹く

ゆらりゆらりと夏柳揺れ

夢ありて誰でも乗れる宇宙船

月の一坪買つておこうか

長電話林檎のジャムを煮詰めつつ

山の恵みは旨き蜂の子

中幼児は乳を離れて馬肥ゆる

見合ひ写真は修正が過ぎ

露天風呂貸切るふたり隠れ宿

他人の振りしバス停に立つ

凍鶴の白き原野に点点と

名残の空は雲を飲み乾す

餅花をいぎ飾らむと父の眉

参賀に向かふ民衆の列

配られてみんなで食べるビスケット

歯科検診の予約しぶしぶ

狂気まで吸ひ取ることく月涼し

博多帯にて単衣装ふ

梅村光明

前田 豊

田代洋里子

大山 今日

大西朝子

松下みゆき

今日

豊

朝子

洋里子

みゆき

日高うんま

吉永千賀子

村瀬悟空

新福妙子

藤崎眞理子

中嶋祐子

千賀子

裏稲揃へリズムよろしく田植唄

くねくね続く脱藩の道

岩塩とキャビアを当てる杯重ね

夜明けを待たず遍路笠発ち

ため息を誘ふばかりの花の滝

世の安らぎを担ふ初虹

うんま

岩津ヒロミ

悟空

祐子

眞理子

執筆

令和三年四月二十四日首
令和三年五月二十一日尾
(文音)

《横浜・桂の会―その一》

歌仙 『遊歩道』

青葉して心も染まる遊歩道
 日焼けを避けて帽子目深に
 習い事週に三度は多くして
 エピキュリアンの友は我儘
 名月とジャズで今宵は一人酒
 雨戸を閉めて虫の音を聞き
 村芝居明日は仕上げの総稽古
 清楚な後家をかまう男ら
 おぼこより年増がよいと若旦那
 女とてあり好み色々々々
 客まばら銀座浅草歌舞伎町
 飛行機雲白く十字架
 からころと絵馬風に鳴る神の留守
 月暗くして虎落笛聞こえ
 隠居して釣魚大座右の書
 コーヒの香り馥郁として
 爛漫と空を埋めて花万朶
 泣く子なだめて赤い風船

橋本直樹捌

橋本直樹
 河田水尾
 吉田酔山
 小松知二
 水直山知直水
 水直山知直水
 水直山知直水
 水直山知直水
 水直山知直水

ナオ
 ワイファイも完備されたる遍路宿
 旅人濡らす太い雨足
 傘開く裏にはフランス名画あり
 ゴッホの伝記繰り返し読む
 向日葵の影から漏れる笑い声
 キヤットと抱きつく不意の雷
 よく当たると天気予報が恨めしく
 見事変身お見合い写真
 ドンファンと持て囃される御曹司
 ワクチン予約ままならぬまま
 漂流す回顧の海を月の舟
 右も左も芒の穂波
 ナウ
 農作業今年も終えて鎌祝
 爺の手料理またも褒められ
 懲りもせずお宝探し蚤の市
 古家の改築ガラクタの山
 花植えて師匠の叙勲記念とし
 鶯鳴きて気持ち和らぐ

令和三年四月 四日首
 令和三年五月十六日尾 (文音)

山知水直山知直水山知直水山知直水山知直水山知直水

二十韻 『春 嵐』

吉田酔山捌

新調のコート乱れて春嵐
 入学式に子等の足音
 渡し舟舫う岸辺の長閑にて
 家に帰ればしつぽ振る犬
 ム月凍えロシアの兵を照らしおり
 見染めた君へ注ぐ爛酒
 婚約の指輪間もなく届く頃
 坑道探る奥の奥まで
 のんびりと世界遺産を巡る旅
 バックバックの小さき綻び

新井節子
 高山鄭和
 鈴木英雄
 本庄喜久子
 近藤純子
 吉田酔山
 和節
 喜英

ナヲ檀尻が老舗の軒を掠め行き
 やけに汗かく禿げた教頭
 連れて来た姪の彼氏が元カレで
 ホクロの数も知った柔肌
 虫すだく庭にほんのり月今宵
 採れたばかりの枝豆を茹で
 ナヲ風炉名残好みの軸に掛け替えて
 爺が揃って童謡の会
 薄墨の花に捧ぐと決めた人
 遠く近くに蝶の舞い飛ぶ

山節純
 和節純
 喜英和
 純山和
 純山和

令和四年三月七日首尾
 (於・菊名コミュニティハウス)

歌仙 『荒海に』

小川廣男捌

荒海に挑む若者夏旺ん

汗ふきだして光りいる背^ナ

炒飯は玉子で勝負出すうま味

匂い敏感猫が寄り来る

父母の笑顔も交じる月今宵

竹林 弥 爽 や かな 風

^ウ猪垣はここが初まり道祖神

静まりかえる過疎の集落

嫁入りの噂しばらく絶えたまま

後家にちよつかいかかあ焼もち

洗濯も炊事も放棄ひきこもり

早くも月の出でし短日

山々の眠りは深く閑まりて

瓦礫の残る災害の跡

栄光のかけはし唄う「嵐」の輪

味覚 楽 し む 鈍 行 の 旅

ゆくりなく万朶の花の城を訪い

降りみ降らずみ細き春雨

渡辺ハツエ

東浦佳子

安藤君子

ハツエ

君子

〃

小川廣男

ハツエ

〃

廣男

ハツエ

〃

〃

〃

君子

〃

永見徳代

ハツエ

^ナ風船は屋根の向うに消え去りて

駐在さんの新しき服

大声で説明受ける高齢者

接種はじまるコロナワケチン

内閣の改造という報のきし

百日紅はいつまでも咲き

そのままの冷えし珈琲ぬるくなり

静まりかえるお見合いの席

指折りにひそかにひねる相聞歌

眼鏡忘れて読めぬ歳時記

月蝕でなかば欠けたる光^ゲありて

はたと止みたる虫の声々

^ナ嵯峨の寺木犀の香に包まれし

遊覧バスが客を運び来

同じ景テレビ番組次々と

一茶が逝きて春二百回

手にしたる花は豊かに匂いたち

四方に満ちたる高き囀り

佳子

〃

ハツエ

〃

磯直道

ハツエ

直道

〃

ハツエ

直道

〃

ハツエ

大内善一

ハツエ

直道

善一

直道

ハツエ

令和二年 九月二十日首
令和三年十二月十九日尾

(於・川口総合文化センター小会議室)

歌仙 『石路の花』

村上孝枝捌

石路の花小さきは小さき灯を点す

村上孝枝

冬日移ろう飛石の庭

渡邊恒子

腹すかし子ども直に帰るらん

城戸雅康

サンドイッチにジャムをたつぷり

大江加代子

稜線に顔出す月の動画めき

孝

罫に帰る鵲の列

常

爽やかにゴルフコンペで飲み交わし

雅

言い寄る彼の洒落た片言

加

おみくじは大吉と出て婚約へ

孝

軽やかな曲部屋を満たして

常

平成の次の年号案多数

雅

月に汗して厳し選択

常

浮草のゆらりゆらりと定めなく

孝

病氣見舞いは言葉はずまず

常

温泉へ卓効求め湯治旅

雅

多様な地質学ぶ楽しさ

孝

自分史の上梓至福の桜咲き

常

つがいの蝶の舞いのぼる空

孝

ナオ 万愚節裏をかかれて大笑い
七転びしてなおも豊饒
イチローの退団皆に惜しまれて
距離を感じぬ宇宙通信

億万積めど振り向かぬ女

日本海寒波にいどむ漁船団

黒雲立ちて吹雪強まる

ご先祖の墓に詣でる夢の中

当選市長長き挨拶

今昇る令和の月の皓皓と

移ろい速き里は夜長に

ナウ 運動会白寿ずらりと来賓に

遠くの寺のひびく鐘の音

餌付け猿ボス先頭に現れて

ICカード使う遠足

開放の皇居の花も散り始め

川岸並ぶタワー隴に

孝

常

孝

常

孝

常

孝

常

孝

常

孝

常

孝

常

孝

常

令和三年二月 十六日首
令和三年四月 二十六日尾

(於・北九州市立貴船市民センター)

歌仙 『浮寝鳥』

浮寝鳥寄り添い見るや同じ夢
紅葉散らして独吟の声
ハイタッチしつ幼な子駆け寄りて
スマホのゲーム見事ゴールに
窓越しに光差し込む望の月
秋刀魚欲しがる猫に声かけ
つまくれに触れば四方実を散らし
旅で知り合う素敵なる女
友達もやがて燃え立つ恋の炎へ
ホットケーキはいつも焦げたる
図書館で検索したる参考書
無尽蔵なる太陽の恩
帆を張りて水平線をヨット行き
ひとり病床照らす夏月
年金と身長縮む老いとなり
読みかけの本おいて散歩へ
青空に枝垂れの花の咲き乱れ
ごとと音立て流る春潮

守口 薫捌

守口 薫

小林 強

渡辺敏 夫

加藤恵 子

加藤恵 子

加藤恵 子

加藤恵 子

篠原正 明

篠原正 明

佐藤えつ子 強

佐藤えつ子 強

佐藤えつ子 強

ナオ あでやかに外八文字先帝会

情感こもる演歌聞こえて

糟糠の妻を思わず抱きたる

ふたりのダンス久しぶりだね

ワンカップ買って飲みたる給料日

犬を相手につい独り言

公園に小雪ちらつきホームレス

ピルの谷間を続く寒木

若武者の大谷選手メジャーへと

当たるも八卦予言的中

しみじみと月に問いたる未来絵図

菊の香りの匂い立ちたる

ナウ 熱心に太鼓たたきて日蓮忌

廻る家家お茶で接待

四国路の人の情けが嬉しくて

カーテン揺らし啓蟄の風

飛花落花うけて欠伸の腕枕

絆強めてかかる初虹

正 強 薫 正 強 薫 正 強 薫 正 強 薫 正 強 薫 正 強 薫 正 強 薫

令和三年二月 十六日首
令和三年四月 二十六日尾

(於・北九州市立貴船市民センター)

出花 『京を抱く』

北原春屏捌

靈峰や初雪まとひ京を抱く	井尻荷葉
襟巻しかと搔き寄せる指	石田千枝子
柴犬の行かう行かうと綱引いて	荷葉
隣町では古本市が	前田空果
満月を崖の棧敷で待つが趣味	新宮照彦
今日は宵からやや寒の風	北原春屏
ぬくめ酒餅もあぶつてほつこりと	荷葉
土拵りから器生まれる	千枝子
槌砧鐙といふは耳の骨	春屏
地面揺らしてテイラノサウルス	空果
この恋が実れば世界滅びても	荷葉
旅路の寢屋に時鳥聞く	千枝子
見知りたるのみの人抱く夢三昧	春屏
清滝川を龍女が上る	照彦
早朝の写経の部屋に鐘霞む	空果
山裾はるか畑打つ姿	〃
花の雲車が葩を巻きあげて	照彦
春光まとひ駆ける緑児	千枝子

令和三年十二月十八日首尾

(於・京都市国際交流会館)

源心 『鮎のぼる』

林 転石捌

布晒す多摩川なりき鮎のぼる

小林節子

桜蕊降る小さき公園

上田邦枝

春日傘和服さらりと着こなし

岡本康子

隣の猫に軽く挨拶

橋本みほこ

魔女役で喝采を浴び仰ぐ月

荻野祥三

芝居終われば北斎の波磯の秋

武田章子

記憶あざやか赤きマニキュア

康 祥

引率の教師一番小さくて

章 康

振り返りては無言館辞す

節 章

今宵また「カサブランカ」を飽きもせず

小西 恵

サハラの砂に眠る空瓶

章 康

その先にまだ見ぬ地あり花の雲

祥 章

清明節に靴を新調

祥 章

ナオのどかなるクラリネットはチンドン屋

手話あれこれと交わす父と子

老いてなお植木屋稼業朝早し

日焼けの肌に白いTシャツ

風続き無為のヨットに夏の月

メールも手紙も私よくばり

慶事とは思へぬけれど恋成就

マンハッタンを走るいそ弁

息白し学童保育終わる頃

木の葉を散らし帰る道々

ナウ空想はいつも楽しく膨らんで

ぬり絵の色は枠をはみ出す

花の雨人だかりして駅ピアノ

未来都市へと陽炎の中

邦

節

章

み

祥

恵

康

祥

こ

み

邦

々

ま

筆

佐藤まつこ

令和三年四月十四日首
令和四年二月九日尾

(於・調布たづくり)

二十韻 『嬉々として』

板倉 合捌

嬉々として蓬萊泉と花に酔う

板倉 合

蝶も舞いたり吾子も舞いたり

由川慶子

カタコトと母のミシンの春コート

間瀬芙美

回覧板のポストはみ出て

稲垣渥子

ッ月今宵鎖はずれて駆ける犬

小野芳梅

案山子の傍で立っている彼

渥

燕を蒔く妻は美人で身重なり

芙美

震災十年 仮設住宅

芳

ふるさとの海の見えない防潮堤

渥

印をつけるハングルの地図

芙美

ナホ木製のジェットコースター冬を切る

ふくら雀の群れる 昼月

ばあさんの岡目八目縁結び

救世観音の指はほっそり

涓滴は巖の隙を広げつつ

名前をかえて大都会へと

ナウ将棋士のランチを頼む奥座敷

娘の雛は目元ぱっちり

いっせいに天を仰いで黄水仙

駅まで歩く風のやわらか

合

芙美

慶

渥

芙美

慶

芙美

合

芳

渥

令和三年三月二十三日首尾

(於・豊田市福祉センター)

二十韻 『川床や』

深津明子捌

川床や笑いさざめくうちに暮れ
鱧の湯引きにポン酢合わせる
独り居の窓打つ雨の軽やかに
人気漫画の並ぶ全巻
ひよいと手に飛び込んでくるちちろ
梶の葉に書くもの想う歌
十六夜に二つの影は長く伸び
沙翁の描く恋の悲喜劇
ノーベル賞幾年候補に挙がりしや
効くワクチンを待てど暮らせど

正村 有
伊藤良 重
板倉 合
稲垣渥 子
由川慶 子
深津明 子
平羽 有
州 有

ナオはな札の絵柄並べて松と桐
熱爛の友月に一杯
熊撃ちのマガギは天に感謝する
アイヌコタンに響くユーカラ
朝夕に蛋白質を好み食ぶ
自慢したいは子沢山だけ
ナウ五輪時は世界停戦呼びかけて
憂う姿か半跏思惟像
山遥か無人の駅の花万朶
春のシヨールを肩にふんわり

有 〆 羽 明 渥 良 羽 〆 慶

令和三年七月二十七日首尾

(於・豊田市福祉センター)

二十韻 『春 塵 を』

小泉 桂捌

春塵を払いてひらく広辞苑
窓より望む残雪の峰
馬の仔の颯爽と跳ね走るらん
園児を乗せてカート曳く保母
ローラーでアスファルト伸す朱夏の月
工事現場に瓜を差し入れ
指切りの約束反古を悔しがり
心療内科薬もらいに
バス停の朝夕二本逃さない
隣町まで買い出しの日日

小泉 桂
松澤龍 一
武井敦 子
澁谷盛 興
林 転 石
木之下みなみ
山中土 筆
大久保風 子
田中安 芸
敦 子

木のベンチぶつきらぼうに冬ざるる
少女のマツチ木枯が消す
会社職こんな僕でもいいですか
勝負下着で泊まるご用意
平家の血月にざわめく鹿火屋守
新酒味わう塗り の 盃
ナウハロウイン奇抜な仮装渋谷街
地下鉄なのに走る地上を
初めての首脳会談花霞
清明の頃列を連ねて

みなみ
転石
風子
龍一
土筆
盛興
敦子
転石
盛興
転石

令和三年三月十七日首尾
(於・日本連句協会リモート連句室利用)

二十韻 『花 箒』

澁谷盛興捌

花箒爆ぜてシテ舞乱拍子
松の廊下春の闇濃く
雨鸞の枝から枝へ渡るらん
餓鬼大将の妙に神妙
ッ月涼しリモートワークで励むパパ
浴衣の袖にリング覗かせ
手をつなぎ歩幅をゆるめお社へ
存分復習う津軽三味線
車座の若者どもの路上飲み
何を不満に睨む自画像

小泉 桂
長坂美代子
山中土 筆
高山鄭 和
武井敦 子
城山九 天
松澤龍 一
大久保風 子
澁谷盛 興
田中安 芸

ナオ鉄柵の向こうの熊の面構え
息白く待つコロナワクチン
そっぽむく仕草の煽る恋心
つくつくぼうし外野賑やか
月皓々業平居るか耀歌の夜
橋の袂の枯草の露
ナウ四分計お好み焼きに蓋をして
島々めぐるアート船旅
口開けて磯巾着の薄緑
空に蹴り入れ漕げよブランコ

和 龍 九 敦 桂 美 風 筆 芸 龍

令和三年四月二十一日首尾

(於・日本連句協会リモート連句室利用)

《野田・詩興派連句》

『ラビリンス』『少年は』

松澤龍一（進行役）

カフカ似の男地図売るラビリンス
飛び出してきた黒猫を追
ピンヒール履いていいのは二十歳まで

松澤龍一
日下部敦
野村路子

あの低音に耳が妊娠
待宵のそら薫物もこまやかに
菊雛飾るほの暗き床

神村富美子
宮川尚子
海老原雅

朝冷のおそうじロボット這い回る
ズンバを習うママの怪力
スケボーの手摺揺らして半パンツ
冷素麺に似合う口紅
半世紀お国訛りの抜けぬまま
龍角散がばふばふと舞う
成木責も好きだとサドの涎かけ
チワワが眠る曾祖父の椅子
パイプから琥珀の烟漂よひて
コルレオーネの永遠のシチリア
花吹雪降りこめられている静寂
一寸法師春川を行く

少年は栗を少女は貝を集め
厚岸草は風と輪唱

高橋宗
龍一

世龍美路尚雅龍世路美龍世
子美路尚雅龍世路美龍世
子美路尚雅龍世路美龍世
子美路尚雅龍世路美龍世

ひっそりと麦わら帽子残されて
正座して聞く母の遺言
満月を掬えばゆらり散る裸身
小さき頭蓋を載せる陶枕
キタローがカランコロンとついでくる

敦路子
富美子
尚子

乗り継ぎ都市はアムステルダム
紅く青く自死の金魚の浮かぶ水
夜の露天のソース焼きそば
着慣れない浴衣の裾はめくり上げ
へっぴり腰の湯もみ体験
イエスイヤウオーだと掃いている水
習近平をマトリョーシカに
引き出しの奥の奥へとしまいこむ
匂い袋につめる寸門多羅
風はらむ袂押さえて花見舟
若き法師が掻き鳴らす琵琶

世龍美路尚雅龍世路美龍世
子美路尚雅龍世路美龍世
子美路尚雅龍世路美龍世

（連衆） 松澤龍一 日下部敦世
野村路子 神村富美子 宮川尚子
海老原雅 高橋宗一（進行役） 松澤龍一

令和四年一月一日首（文音）
令和四年二月十八日尾

百韻 『初 虹 や』

初虹や紙飛行機を飛ばす空
 松澤龍一
 大志抱きて若き踏青
 本屋良子
 春火鉢偉人の伝記傍らに
 安楽明郎
 いつの間にやらウツラウツラと
 赤坂恒子
 共鳴は振り子時計と雨の音
 諸藤留美子
 水飲み鳥がお辞儀する窓
 丹下 誓
 庭咲きの桔梗束ねて土産とし
 朝倉一湖
 ファドとワインと月と朋友
 静 寿美子
 亡き母の後の裕に帯合はせ
 奥野美友紀
 お出かけ嬉し今日は何の日
 大山とし子
 安全を願う新車に御神酒かけ
 鈴木すず
 バンクシー来たあスマホ炎上
 沖津秀美
 騙された人はわからぬ赤詐欺に
 竹崎梨野
 (赤詐欺は結婚詐欺のこと)

越前ガニをみなで黙食
 大寺の鐘に寒月昇りくる
 里帰りの子撫でる鍵盤
 遊山箱手に手に提げて花の山
 囀浴びて目覚めのびやか
 遅き日のナースセクター人気なく
 クロスワードの残る六文字
 猫島の港の猫にからまれて
 かばんに付ける赤いお守り
 朝練は声をそろえて元氣よく
 息子の中にあの頃の夫
 ナンパなどもつての外の純情さ
 豚のそぼろが載りし弁当
 茶話に囲むストーブ昼休み
 軽便鉄道地吹雪を分け
 故郷は五軒五人の過疎となり
 珍しい姓みんな親戚
 ルビふって読む満月の私小説
 嵐が丘のヒース紅葉
 伏兵が雁行乱る万騎が原
 黄色い声で園児散らばり
 突然の宅配便にときめいて
 ネイルアートの凝った指先

龍 良 郎 恒 留 誓 湖 寿 紀 と す 美 梨 尹 柚 菜 智 龍 良 郎 恒 留 誓

味噌汁の匂いがいやと去って行き
 模様替えて家具も買い換え
 アウトレットモールに並ぶ人の列
 麦酒をあげてサスペンス見る
 エアコンが壊れ月よりもらう風
 所在無げなる老いた象さん
 皺の数比べてみようか爺さまと
 山を背に麦踏の影
 花の雲酒折宮の鈴の音
 人気役者の絵風合戦
^{三才}シャボン玉団地の隙間すり抜けて
 森鷗外に恋の戯れ歌
 息子へと性教育の小冊子
 行列飾る美しき稚児
 仲店の呼び込みあちらこちらより
 水上バスを隣り合わせに
 着岸の合図に畳む白日傘
 蚤取り自慢母の口癖
 吸血鬼人に近づくのが怖い
 どこにいったか財布携帯
 ホームラン見送る野手の目の虚ろ
 宇宙ツアーは2泊3日で
 替へませう鷺替へませう賑やかに

湖 寿 紀 と す 美 梨 菜 柚 智 龍 良 郎 恒 留 誓 湖 寿 紀 と す 美

銀盤そつと見やる獅子舞
^{三才}母と行く香道体験いそいそと
 漫画で読んだ源氏物語
 恋衣脱ぐ暇もなきナイスガイ
 あなたの子ならいいわ産んでも
 うどん屋で判子を迫る丸い腹
 今年酒だよどうぞ一杯
 傘寿会今宵弦月雲もなし
 菊の賀共に祝う楽しみ
 黒犀は水の瞋さの脚本家
 槍の穂先に宿る靈力
 珈琲の泡こまやかに湯をそそぐ
 BGMにながすサッチモ
 横丁を曲がれば花の咲くあたり
 捨てられたのかこねこが二匹
^{ナオ}昭和の言葉の響きなつかしく
 文管に父の軍事郵便
 訪れし秘境の里の倉を開け
 塩漬けにした恋のあれこれ
 ドン・ファンに憧れもした芳年期
 手足伸ばさん達磨忌の朝
 レンチンの今川焼きを頬張って
 恭子さんと遭った麻布十番

梨 尹 柚 菜 智 龍 良 郎 恒 留 誓 湖 寿 紀 と す 美 梨 尹 柚 菜 智 龍

あでやかな和服姿よ十三夜
弾の如くに木の实降りくる
友どちとばちんこ作る冬隣
SLきつと駅はジオラマ
ガリバーはその大足を哀しみて
引きこもりして犬と戯れ
まどかなる手話の語らい小糠雨
ご近所さんがテレビニュースに
女医さんは失敗しないと宣言し
スマホのレシピ完璧な出来
億年の記憶奏でる讃岐岩
ひとり響かせ卒業の鐘
昨日今日花見て暮らす仕合せに
百の夢乗せ百の風船

良 郎 恒 留 誓 湖 寿 紀 と す 美 梨 尹 柚

令和三年 四月 四日首
令和三年十二月十四日尾
(文音)

遺吟脇起
短歌行

『獅子門支考忌追善俳諧』

大野鶴士捌

見渡して久しがほなる燕かな
庭に向きたる部屋に古雛
春の昼竹竿売りの声のして
子どもと二人乗れるぶらんこ
月の舟海にあるかにゆらゆらと
逍遙したる秋の浜辺を
爽やかに未来を語る君とゐて
はにかむ時の笑窪かはゆき
シナリオのままにはゆかぬこと多く
鞆の中にカメラひとつを
天守より見ゆる限りの花の山
お市の方を偲ぶ永日

支考

大野鶴士

藤塚旦子

宮本光野

矢橋初美

片桐栄子

藤井大和

名和よちゑ

奥山ゆい

川井功子

光野

内藤千壽子

着飾れる三人娘麗らなる
背のてらてらと黒き撫牛
風鈴の青き音色の響く頃
テラスの椅子に君を抱きよせ
行き摺りの恋と溺るる夢ごち
凍つる胡蝶は草陰に消え
あかあかと真珠のやうな冬の月
岸のほとりに寄するさざ波
名シャンソンにワイングラスを傾けむ
歌舞伎役者も今は子育て
爛漫の花と遊べる小鳥たち
佐保姫の衣かくもやはらか

ニオ

背のてらてらと黒き撫牛

風鈴の青き音色の響く頃

テラスの椅子に君を抱きよせ

行き摺りの恋と溺るる夢ごち

凍つる胡蝶は草陰に消え

あかあかと真珠のやうな冬の月

岸のほとりに寄するさざ波

名シャンソンにワイングラスを傾けむ

歌舞伎役者も今は子育て

爛漫の花と遊べる小鳥たち

佐保姫の衣かくもやはらか

光野

よちゑ

柴田恭雨

大竹花永

原えつ子

服部瑞華

よちゑ

瀬戸斐香

光野

衣斐佐和子

鶴士

執筆

令和三年三月二十九日満尾

(於・ハートフルスクエアG)

和室研修室)

《岐阜・獅子門―その二》

遺吟脇起
歌仙行一折 『獅子門翁忌追善俳諧』

大野鶴士捌

さしこもる葎の友かふゆなうり

翁

ふくら雀の日差し慕へる

大野鶴士

山裾のせせらぎの音仄かにて

小栗知 柚

緩き風にも靡くスカーフ

佐橋 霞

隈のなき月を眺める観覧車

藤塚旦子

秋^ウ雨に選挙演説熱を帯び

内藤千壽子

菓子をつぶりテーブルの上

柴田恭 雨

あの頃のクラスメートを見違へる

松橋五 笑

独身同士話弾みて

衣斐佐和子

恋の道大器晩成とはなるか

片桐栄 子

薬一粒床に転がる

森美 翠

湿りたる月にひらひら蚊喰鳥

名和よちゑ

工事現場の暑き騒音

箕浦久 子

揚げたてのコロッケを買ふ道すがら

奥山ゆ い

幼子眠る乳母車には

瀬戸斐 香

金の鯉泳げよ花の雲の上

宮本光 野

ひばりの鳴けば酌みかはす酒

執 筆

令和三年十二月五日満尾

(於・笠松町 杉山邸)

《岐阜・獅子門友楽社》

遺吟脇起
歌仙行一折

『翁忌追善俳諧』

宮本光野捌

芹焼やすそ輪の田井の初氷

翁

離れ座敷に交はず爛酒

宮本光野

将棋指す帯に根付の揺れもして

柴田恭雨

膝に抱かるる猫は寝たふり

原えつ子

雲間より月中天に移る頃

矢橋初美

鈴が鳴るかに清き虫の音

樗木成明

栗飯の炊きたる匂ひそこはかと

光野

恋つのもりつつ寄り道の浜

恭雨

甲矢乙矢ハートの芯にストレート

えつ子

睦み合ひたる夢のオアシス

大野鶴士

書きかけの原稿宿の机にも

初美

路面電車の軋み懐かし

恭雨

群青の空にくつきり夏の月

成明

水底の石透ける涼しさ

えつ子

掛茶屋の庇にとまる伝書鳩

初美

僧侶も並ぶ五七饅頭

初美

繚乱の花に安らふお勝山

執筆

蝶戯れる風の軽やか

令和三年十二月十三日首尾

(於・赤坂港会館)

遺吟脇起
歌仙一折 『翁忌追善俳諧』

瀬尾千草捌

葛の葉の面見せけり今朝の霜

翁

双眼鏡を胸の着ぶくれ

瀬尾千草

スケボーの少年の疾く過ぎゆきて

後藤朱乃

オルゴールめく町の鐘の音

武山瑠子

三角や四角の屋根に丸き月

朱乃

雲居の雁の小さく遠くへ

瑠子

^ウ落柿舎の箕笠古りて去來の忌

渡辺靖子

女子大生のビデオ回せる

朱乃

照れ隠しぶつきら棒に話掛け

千草

新婚という甘い空間

靖子

焼き上がるシフォンケーキのふつくらと

朱乃

郵便受けに選挙公報

千草

月暑くりモートワークまだ続く

靖子

河童祭に行つてみたいな

瑠子

ラジオより昭和ポップス流れ来る

靖子

ひこうき雲の分くる中空

千草

食前酒フルーティなる花の昼

千草

さざ波光る春のみづうみ

執筆

令和三年十一月十九日首尾

(於・岐阜鑄物会館)

短歌行 『良夜かな』

伊藤弥生捌

産土へ坂道上る良夜かな
 あちらこちらに集く虫の音
 美術展ブロンズ像の運ばれて
 左の耳に挟む鉛筆
 売りあげを吊るした籠の中に入る
 盥に動く子亀三匹
 初浴衣なれぬ下駄はき法善寺
 手をさしのべて顔をあからめ
 資産家の御曹司てふ噂あり
 アールグレーの香りたつカフェ
 玻璃窓を覆ふばかりに花枝垂る
 紙雛飾る若き看護師

伊藤弥生
 武山瑠子
 瀬尾千草
 後藤朱乃
 河合はつ江
 草
 瑠
 江
 乃
 生
 草
 江

ナオ
 訳もなく楽しくなれる春の風
 数多のサタン潜む物陰
 血統書つきの種馬草を食む
 赤毛のアンを輪になつて聞く
 アラフォーの独り暮らしを満喫す
 別れた彼のセーターを着る
 冬月にワインと恋歌捧げたり
 村巡回のバスの出る頃
 ナウ
 足早に湖巡るスニーカー
 バックバックのスマホ取りだす
 ふるさとの歴史と共に花大樹
 鸚哥と話す昼のうららか

江 瑠 生 草 乃 江 瑠 生 草 乃

令和三年九月十七日首尾

(於・岐阜鑄物会館)

遺吟脇起
歌仙 『翁忌追善俳諧』

名和よちゑ捌

五つむつ茶の子にならぶ囲炉裏哉

木地師の村に時雨来る頃

笛鳴らし鶯ゆつたりと輪を描いて

湖上を渡る小舟水脈引き

盃かかげ月にほろ酔ふ独り酒

芒は風^ウに右へ左へ

装へる山^ウがくすぐる旅心

双眼鏡のレンジ調節

歌舞伎座で着物姿の君と会ふ

指に輝くリング気になる

あの時の互ひの想ひ変はらずに

ジャングルジムはどこも直角

恍惚の母御を照らす夏の月

愛犬のそば蚊遣火を置く

次々とオリンピックの金メダル

未来の子らに夢を繋げて

南より花の便りのちらほらと

広き野原に遊ぶてふてふ

翁

名和よちゑ

澤井国造

赤塚つねみ

北浦典子

衣斐佐和子

松野孝子

和田勝子

五島青沙

孝子

佐和子

青沙

孝子

よちゑ

つねみ

勝子

国造

典子

ナオ読みかけの本を枕に春暮るる

一萬円に渋沢の顔

銀座にはびたりと当たる占ひ師

社交ダンスのリズム軽やか

おでん屋に並ぶ馴染みの客ばかり

木枯しの中男三人

突然の着信音に躍る胸

年下彼に心近づく

道ならぬ恋はひとしほ燃え上がり

結びの神はこんな所に

月皓と海は光の海となり

秋刀魚焼く日は隣気にして

ナウ銘柄を迷ひ選んだ今年米

古き端切れで作るお手玉

買ひ替への老眼鏡は赤き縁

休日といふ嬉し日のあり

国宝の鐘の音響く花の寺

春日の山に孕鹿啼く

青沙

佐和子

典子

佐和子

よちゑ

国造

典子

勝子

孝子

つねみ

青沙

国造

佐和子

勝子

典子

孝子

よちゑ
執筆青沙

令和三年十一月二十二日首尾

(於・大垣市総合福祉会館)

歌仙 『シカゴに轟け』

オモテ六句 伊藤哲子捌

以下 衆議判

皐月風シカゴに轟け労働歌

伊藤哲子

岬回れば梯姑満開

鈴木ちかひ

和の慣書道具揃え五歳児に

高山英子

主人呼べども猫は居眠り

斎藤東砂

望の夜の季節料理を大絵皿

小田みみこ

後の雛を祝う美酒

櫻田野老

黄金の棚田の添水響きおり

白石一有

世界遺産の上をドローンが

鈴木すず

静謐の堂にこもりて写経せり

大内善一

選びあぐねる姉か妹か

竹田金糸雀

敷かれいる女房の尻の温かさ

安楽明郎

船瀬をのぞむ画家の定宿

英子

月光に軒の乾鮭干し上がる

ちかひ

ひと声高く鳴きし白鳥

みみこ

半生の夢見し後の寢覚めなり

東砂

大国主命のしろしめす御代

一有

花老樹絢爛として天に咲く

野老

春の句座終え交わす升酒

善一

ナオ 蜷汁体によいと四、五杯も

思いを馳せる大陸の湖

同胞の残した子らの深い皺

昭和のことは今も新し

空蟬のしがみついたる板塔婆

汗ぬぐいつつ登る坂道

全て捨て叶わぬ恋の火の中に

しかと馴染んだ指輪はずして

気が付けば終着駅の深き闇

瓶の液体ひと息に飲む

レットルは剝がれかすかに月の光

薬師如来を包む虫の音

ナウ 秋深しジュゴン消えゆく辺野古沖

旅の荷物が背にずっしり

城跡の定点カメラ覆う枝

野焼きの匂い流れ町まで

咲く花も散る花もあり花の山

夢かうつつか佐保姫の舞

すず

明郎

金糸雀

ちかひ

一有

東砂

英子

すず

みみこ

金糸雀

善一

野老

明郎

ちかひ

金糸雀

みみこ

すず

英子

令和三年五月一日首
令和三年九月五日尾 (文音)

歌仙 『柚子風呂』

いぬじま正一捌

光陰を顧みはせじ柚子の風呂

いぬじま正一

メールに絵文字襦袍引っかけ

是行修吉

手作りのエコバッグ提げ買い物に

久我妙子

流れる雲に波さわぐ沼

紺野愛

傾いて薄にゆれる三日の月

紺野愛

草の実つけた猫を抱き上げ

正治

舞茸を天麩羅にして独り酒

修

しばし見惚れる彼の包丁

妙

顔染めてうつむく姿匂やかに

愛

国語得意で苦手理科系

笙

乾坤を見つめて妖し鬼女の面

修正

全ては一つ一つは全て

修

軒端には釣忍揺れ月高く

妙

刺し身に添へるパセリ少々

愛

目をやれば黒い何かが部屋の隅

修正

かくれんぼでは姉にかなはず

笙

コロナ禍の閉店無念花の闇

修

路面電車の軋みのどらか

妙

ナオ 行く春に鼻歌もらす庭いぢり

下校のコース道草の子ら

絵馬堂の馬が夜な夜な抜け出すと

戦場ヶ原突如喚声

放蕩も飽きて年貢の納め時

地団駄踏んで散らす口惜しさ

パリジャンの膺は長いと思ひ込み

安産なりとまづは携帯

お祝ひの菓子や果物包ませて

料金不足で戻る郵便

浮く月は錦繡の裾あでやかに

二百十日はこともなく過ぎ

ナウ宝くじ神棚に置く神の留守

北のまほろば縄文の里

恒例の野外学習のびのびと

乱文乱筆読み取れぬメモ

花見会料理に活きる火の加減

紙の袋にすそわけの独活

執

愛 笙 修正 妙 笙 愛 修 正 笙 愛 妙 修 正 笙 愛 妙 笙 愛

百韻 『宗祇の干支』

初春や宗祇の干支は辛丑^{カクトウシ}
 令和^{オホ}大福^{フク}竹林の風
 冴え返る乗り継ぎ列車待ちかねて
 横綱昇進決めし春場所
 桜鯛生きているまま到着す
 物流業は迅速が鍵
 美術館月の壁画を依頼され
 爽やかに聞くピアノ連弾
 送り来し栗羊羹のほの甘味
 蹲踞を訪う雀一二三羽
 もう少ししたらあの子が駆けてくる
 親の目ぬすみ逢引きの松
 お揃いの守り袋に香を焚く
 語尾に「な」のつく伊勢言葉にて
 丁寧な祖父の残せし農曆
 源氏蛩を得たる棚田に
 丈草も許六も武門月涼し
 手擦れのぬくみ漢方の医書

小林静司捌

小林静司
 和田忠勝
 和田ひろ子
 松田ぼくる
 秋山よう子
 鈴木善春
 高山鄭和
 白井暎子
 坂田酔彦
 速藤尹希子
 今村 苗
 近藤蕉 肝
 浅沼小 葦
 中野美恵子
 大江美 奈
 春山洋一郎
 栗原和 宏
 椎名由紀子

今の世は生産性が優先す
 英霊もはや死語と云う人
 返り花故郷に成る道の駅
 アイヌ毛衣意外ほかほか
 災禍時の知事の力量比べられ
 在宅勤務ネット活躍
 バスタブに温泉の素かき混ぜて
 電気を消して探すさそり座
 暗がりではつんと灯る蚊遣の火
 来世誓って結ぶ赤糸
 ひとりでに愛染堂へ向かう足
 小さき丸池雨の降り初む
 冬帽の子等は怪魚を釣らんとし
 おいでおいでと雪女呼ぶ
 良妻になれず飲みます赤ワイン
 香炉峰へとドローン飛ばそう
 鳥帰る雲居路はるか春の月
 茶揉お互い長寿めでたし
 二表
 その代の遊蕩の果て藪椿
 足に化粧で女郎絵を踏む
 三密を避けて出不精ほくそ笑み
 漱石気取り猫を手なずけ
 文学館港見下ろす丘の上

村井昭三
 二川智南美
 永田吉文
 種川とみ子
 静 寿美子
 中村コッコ
 松本華与
 鈴木すず
 川南 聡
 廣野順子
 功刀太郎
 古川柴子
 森本章子
 櫻井しのぶ
 古谷裕子
 福田杜日
 大津博山
 海老原 雅
 山本 ゆう
 藤枝清華
 鄭 ろ 勝

老いの好みの間取り選択
孫双児誕生会に大ケーキ
文机にある古今聞書
放浪の果てにて仰ぐ望の月
刈田をひとり歩む私度僧
工^{ナウ}夫ある今様案山子仁王立ち
サラメシ中継弁当を開け
富士近き裾野の町を散策し
懸賞写真真会心の出来
てにをはの一字の重み俳諧に
魚籠の若鮎元氣よく跳ね
あいに行く黄泉への道の花篝
長閑の丘に語りつぐ詩

春 司 吉 る 暎 う 三 吉 春 る 吉 る 暎

令和三年一月四日起首
(於・鎌倉生涯学習センター玉縄分室及び文音)

歌仙 『星月夜』

西田青沙捌

戦果てて七十五年星月夜

西尾泰一

桂男の遅きお出まし

西田青沙

裏木戸の夜寒に軋む密やかに

瀬野喜代

叱られながら猫に餌やる

小野恭子

ひつそりと生きる幸せ衣更へ

浦田鳩女

簾ごもりの古き裏店

沙

^ウ特売のあれこれ夫に教えられ

鳩代

よく気が回るそれに騙され

一代

くの一の恋は何時でも命がけ

一沙

どんでん返しに遭うて目が覚め

一沙

突然に右往左往の永田町

恭

幾つになれど好きな握々

一

ひとり居の窓辺に仰ぐ冬の月

一沙

身酒ひれ酒夢のまた夢

沙

ツイッターもラインも知らず世を過し

沙

警策の音ひびく禅寺

沙

番傘に斑雪かと花吹雪

恭

黄蝶白蝶追いかける子ら

代

^{ナオ}磯嘆き命を握る綱の主

ご飯ですよと母の呼ぶ声

東京は何処でも人の並ぶとこ

十万円で家計潤ひ

ラウンジの語らひ静か苺パフェ

望遠レンズで覗く秘め事

雨あられ文春砲の発売日

賢しら口を塞ぐ唇づけ

悪女なら悪女でよいと胆を据え

切れ味ためす長き牛刀

後の月杓子渡して後悔し

息絶え絶えの閻魔蟋蟀

^{ナウ}紅灯の巷見返り柳散る

コロナは怖し酒は飲みたし

ゴーツーがしばし解禁いざ行かん

添乗員らスカーフ靡かせ

御裳濯の流れに映える花の彩

土の匂ひの満つる田返し

長町誠

一 恭 沙 恭 鳩 司 一 代 一 恭 一 沙 鳩 司 代 鳩 一 沙 恭 一

令和二年九月 八日首
令和二年十月十二日尾

(於・四日市市文化会館)

短歌行 『秋風や』

井上輝夫 捌

秋風や見守られ往く仮設橋
 東の空にほのと夕月
 渡り鳥安住の地は豊かにて
 親子三代古民家を継ぐ
 ウ冬 薔薇母想ふとき遠目癖
 「歓喜」 歌声師走響いて
 ウイーンの旅は道連れ恋に落ち
 じゃじゃ馬なれど過ぎた女房
 総裁は暴れん坊も善き候補
 デカンショ語る若きあの頃
 おおらかに園児と歩む花の門
 お遍路衆は夢を祈つて

金窪明 美
 勝又丘 女
 井上輝 夫
 賀茂博 美
 宮原うた子
 水野森 雄
 名波秀 夫
 土屋日 菜
 明 美
 丘 女
 森 雄
 博 美

ナオ小流れのお玉杓子の黒い陣
 翔平野球を我も絶賛
 玉の汗拭う仕種よ「熱血漢」
 破れ団扇に瘦せた役者絵
 ベンツ乗る君のルージュが眩しくて
 嫁の移住に実父言いさす
 降りそそぐ寒月光地を照らし
 ゲレンデ招く松明の列
 ナウ凜とした女性家元写真映え
 力士背広で心晴れ晴れ
 盃の花のひとひら飲み干さむ
 春の庭では米寿談笑

うた子
 輝夫
 秀夫
 日菜
 丘女
 明美
 うた子
 博美
 森雄
 秀夫
 日菜
 輝夫

令和三年九月一日首
令和三年十月十七日尾

(於・裾野市立東西公民館)

二十韻 『そぞろ寒』

名波秀夫捌

そぞろ寒庭掃く爺のひとり言
 高き青天白き残月
 馬肥ゆる味覚豊かに実り来て
 何をするにも歌をハミング
 阿蘇噴火行楽気分もそこそこに
 揺れるゴンドラ手と手重ねて
 やさしさが取柄の彼に寄せる思慕
 選挙ポスター消せぬ危うさ
 水鳥の群れ舞いあがり何処へ行く
 心清らに大袂受け

井上輝夫
 名波秀夫
 金窪明美
 宮原うた子
 秀夫
 輝夫
 うた子
 明美
 輝夫
 秀夫

ナオ久々に家族つどいて酌む銘酒
 娘の恋話前途多難に
 パリ帰り仏語駆使してラブコール
 ぐつと引き込む釣り堀の鯉
 月仰ぐ浴衣銅像遅しく
 新札を待つ金融の神
 ナオ必見の飛鳥美人に人だかり
 春荒れ遣りて船は漁場へ
 吉兆を寂と聴きたり花の雲
 幸多かれとシャボン玉吹く

うた子
 明美
 秀夫
 輝夫
 うた子
 輝夫
 明美
 秀夫
 明美
 うた子

令和三年 十月十七日首
 令和三年十一月十四日尾

(於・裾野市立東西公民館)

二十韻 『遠見こそ』

田畑豆男捌

遠見こそ美しき距離惚の花

田畑豆男

夕日負ひて戻る柚人

佐藤和子

赤い羽根いかがですかと呼びかけて

久保田直

電線揺らし雀飛び立つ

丹治道子

愛煙家いかにも居場所なさうに

いなじまる

財布はたいて指輪買ったよ

豆男

抗へどラストダンスは腕の内

道子

葉効かぬとかこちゐる母

直

青田んぼ鮎の紛るる二、三匹

高田春男

朝虹かかる被災地の空

北川信弘

ナオ即席のわかめスープに湯を注して

豆男

アーアーとターザンになる

田代洋子

口許に笑みを浮べて聞き上手

直

厚着の君は古希のマドンナ

まる

深情け寒満月を天に置き

和子

木彫りの根付おかめひよつとこ

豆男

ナウ降り出しの雨に御寺の大庇

洋子

土の匂ひに和む牛飼

春男

途下車花の錦に誘はれ

信弘

なんだかんだと春の弁当

洋子

令和三年 十月二十三日首
令和三年十一月二十七日尾

(於・白河中央公民館)

歌仙 『凍てをほどいて』

首を抜き凍てをほどいて丹頂に
 紫キヤベツばりばりと食む
 幻灯機幼なき日々の忘れられ
 ケンケンパーと蠟石の跡
 厚紙の月を舞台に吊り上げて
 決り科白に爽涼の耳
 隅の枠は猫の入口障子貼る
 縦の糸へと横の糸の杼ひ
 客船は日付変更線を越え
 海嶺突如隆起し始め
 冷たいね君の御手を温める
 そこを曲れとカーナビの指示
 都より同心円の言語地図
 月まで届け噴水の穂よ
 蜘蛛の子の散り行く先を誰か知る
 ガイド軽やか靡くスカート
 日本酒を瓢箪に入れ花の夜へ
 師曰ノクタマハク春ノ蚊ハ打テ

川野蓼艸捌

川野蓼 史
 村松定 史
 浅岡照 夫
 岡部瑞 枝
 山地春眠子 湖
 西川菜 帆
 朝倉一 湖
 篠原雅 世
 菜帆 世
 瑞枝 湖
 一湖 湖
 蓼艸 史
 定史 史
 雅世 史
 照夫 史
 一湖 史
 蓼艸 史
 春眠子 史

ナオ
 浄土への是は抜道か弥生尽
 南紀白浜熊楠の島
 パンデミックの大波小波六たび寄せ
 焼けた蹄鉄叩く鈍音
 地のリズム回転木馬止まらずに
 牙ゆるコートに決めるスマッシュ
 恋わたる闇に千鳥の声がある
 別れたひとと擦れ違ふ坂
 胸元につねにクルスを揺らしをり
 穂蓼そよがせ私の歩幅
 月皎々フォッサマグナを北上し
 老懶ろうなんの歯に泌みて柚子味噌
 ナウ
 魔法にも賞味期限があるので
 石の言葉葉に心傾け
 母さんは「あれであれして」
 「これでこれして」
 はんなりと笑む故郷の山
 生きとし生ける者を鼓舞せよ花吹雪
 磯巾着の理論撞着

定史 史
 瑞枝 史
 菜帆 史
 定史 史
 照夫 史
 菜帆 史
 一湖 史
 照夫 史
 菜帆 史
 定史 史
 高松 霞
 春眠子 史
 瑞枝 史
 雅世 史
 菜帆 史
 定史 史
 照夫 史

令和三年十一月二十七日首
 令和三年十二月十八日尾

(於・東京文化会館)
 (於・文京シビックセンター)

歌仙 『ズワイガニ解禁』

橋本枯野捌

釜の湯気いきほふズワイガニ解禁
 時雨れてはまた光射す沖
 応援歌選手の闘志いや増しに
 テレビ画面に猫も釘付け
 秋草を踏みてトレイルラン過ぐる
 青空のこる尾根に織月
 黄昏る、庭の小枝に百舌鳥の贅
 初潮の少女つよき眼差し
 携帯の震へて恋慕ときめかす
 神の啓示か貴方ひと筋
 「空や寂」寂聴偲び「源氏」手に
 近寄り見れば消ゆる帚木
 子等集ひ氷菓の先に月をさす
 プテラノドンは翼広げて
 砂漠にはかつて大河の滔々と
 北京五輪に中華はなやぐ
 花の宴参加にはまづ接種証
 翌なき春の一日過ごしつ

橋本枯野
 白崎ひろ子
 水上潤子
 梅田君枝
 前田高宏
 服部秋扇
 三木蓮糸
 枯野
 ひろ子
 君枝
 潤子
 秋扇
 高宏
 枯野
 ひろ子
 潤子
 岡田有旦
 蓮糸

蓬餅懷紙に余る重さあり
 眠りたる児のふはり微笑む
 あてもなく途中下車して迷ひ道
 感応力は勘違ひから
 抱擁の君しなやかに放心す
 殿と契りし巫女石子詰
 ふつふつといしる生まる、音を聞く
 同行二人齡身に 入む
 望月に祈らんかぐや姫の無事
 舫ひ舟より見たぞ不知火
 奇襲勝ち武将の好む馬上杯
 長押に飾る錆びたサーベル
 ナウ出初め待つ法被姿は父に似て
 終の棲家はムーミンの郷
 オムレツのフライパン返し得意技
 雛の絵手紙袖がはみ出す
 大吉のみくじ結べる花の杜
 光陰よりも速い逃水

君枝
 ひろ子
 和田てる子
 枯野
 ひろ子
 秋扇
 高宏
 潤子
 てる子
 有旦
 枯野
 君枝
 高宏
 潤子
 枯野
 ひろ子
 蓮糸
 秋扇

注*いしるは魚醬

令和四年一月十四日首
 令和四年二月十七日(大安吉日)尾 (文音)

歌仙 『初紅葉』

田中安芸捌

参道の光りを縞に初紅葉

田中安芸

木の実団子は茶屋の名物

横田思案人

フォトサロン世界の月をルーペにて

青柳祥風

リュックを背負いはるか向こうを

石田耕庵

とりたての新鮮野菜無人店

上原百々

でんでん虫を手のひらに乗せ

安芸

突堤を歩いて行けば雲の峰

思案人

サザンの海は涙いつぱい

祥風

砂浜の二人の足跡交差して

耕庵

美酒は呑むべし愛奪うべし

百々

つまむ歩に熟考重ね詰将棋

安芸

どこまで伸びる年少記録

思案人

「火の用心」オール電化のキッチンに

祥風

ドラムの響き溶ける凍月

耕庵

おまんじゅうチョコにせんべいどれにしよう

百々

アップリケにはパトロールカー

安芸

花のもと陣中膏の油売り

思案人

仔犬抱けば春泥の顔

祥風

ナオ野辺に春走り回って声囁らし

五千年経つ火焰型土器

横顔は大陸家系の芸術家

モンマルトルの丘に集えば

影二つ文字盤ゆがむ二十五時

思いのたけは閨に汗ばむ

いつまでも抱かれていたい蟬時雨

白寿の時も恋の心を

ウィルスは変異変異と姿変え

戦隊ものはグレンジャーから

受け月よ勝ち負けの差は紙一重

爽涼の縁酌み交わす酒

ナウ新刊の本を求めて文化の日

株式市況円高基調

明日の夢弁当箱に詰め込んで

鼠小僧の墓石に欠け

風疾み八百八町花吹雪

種案山子には吾子のお古よ

耕庵

百々

安芸

思案人

祥風

耕庵

百々

安芸

思案人

祥風

百々

耕庵

安芸

思案人

百々

耕庵

祥風

執筆

令和三年十月 六日首
令和四年一月二十日尾 (文音)

歌仙 『ダニニューブの波』

半田有杜捌

ダニニューブの波は滔々月皓々

久保田 朴

どこか遠くで秋のピオロン

半田有 杜

零余子飯旨し旨しと集うらん

埜 於 玉

はずむ話に笑い溢れる

秀島一 生

足踏みのミシンいまだに現役で

沼田 睦 子

ビジネス街の紅葉散る庭

田 朴

誰彼の逝きし報され年暮るる

有 杜

理由はなけれど別姓のまま

於 玉

美人にはちやほやしないそれがコツ

一 生

思い隠せどまなざしに出で

睦 子

選びしは苦難の道かプリンセス

田 朴

童子 徒え 不動明王

有 杜

生臭き腐草螢となりし頃

於 玉

黒衣の拳げる月に白南風

一 生

愚かなり七十路なかばに転ぶとは

睦 子

株価眺めて一喜一憂

田 朴

弘前の城埋めたる花万朶

有 杜

春炬燵からのそと三毛猫

於 玉

ナオ長閑なる日々の裏にて血が流れ

世のそこかしこ独裁者いて

S Lの煙追いかけ旅支度

自慢の地酒つい呑み過ごし

名残惜しき光きらめく夏の夕

ほら山桜桃摘みてあの娘に

くちづけに震える肩のくずれおち

今宵限りの契り儂し

母の世話している筈が励まされ

場外ホーマーめざせ甲子園

切っ先の研ぎすまされて三日の月

雑木林に鴟の早贄

ナウ近ごろは目黒のさんまも高級魚

パリで主婦業挑むお造りに

わか雨神の庇をちよと借りて

金田一耕助黙々と行く

山深き湖面に映える花の雲

カメラを過る赤き風船

睦 田 一 有 睦 一 田 睦 有 一 田 有 一 睦 有 田 睦 一
子 朴 生 杜 子 生 朴 子 杜 生 朴 杜 生 子 杜 朴 子 生

令和三年十月 六日 起首
令和四年一月十六日 満尾 (文音)

歌仙 『繩文の炎』

繩文の炎出土す曼珠沙華
 博物館のかなた昼月
 ぬくめ酒詩吟朗々気晴らしに
 明日の仕事の準備完璧
 営業の提案すべてオンライン
 ダウンの列に燻製魚買う
 ム脚伸ぶ群れ飛ぶ鳩の煌めきて
 絹の道沿いオアシスの宿
 踊り子の黒い瞳に射抜かれし
 後ろめたさにそそくさ帰る
 フライトを大迂回さすCOVID
 試験の前は読みたい本が
 月冴えて仕掛けたままのくくり罨
 ぬくての洞に置き土産あり
 久しぶり子らの歓声聞こえたる
 十万円をくばる話も
 待てど来ぬ人待つ午後の花の雨
 淡き日差しの麗らかな途

仲本お池捌

山中主水
 仲本お池
 井田瑞亭
 今富千辺
 谷口螺々子
 高井辛六
 お池
 主水
 千辺
 瑞亭
 辛六
 螺々子
 主水
 お池
 瑞亭
 千辺
 螺々子
 辛六

ナオ春の鐘打ちて野球の神も笑む
 七里ヶ浜を拾い歩いて
 留守電に残りし声の義理堅く
 畳のへりを踏んではならぬ
 岩を縫い溪流飛沫く夏光
 女郎蜘蛛とて嫌がりもせず
 残り香の鎖骨の窪みなぞられて
 おきて破りの事の顛末
 これほどに尽くせど届かぬ野暮な人
 急行通過を待つ風の駅
 「ふるさと」の口笛吹けば月上る
 一筆添えて送る新米
 ナウゆらゆらと揺れるどんぐりやじろべい
 仲間と交信カラス鳴く坂
 縁側にたばこくゆらす影ありて
 木曾の関脇待望のとき
 薄闇を染めし古木の花灯り
 くじ引きひいて貰う風船

千辺
 瑞亭
 お池
 螺々子
 辛六
 主水
 瑞亭
 千辺
 お池
 螺々子
 辛六
 主水
 千辺

令和三年十月七日首
 令和四年二月五日尾 (文音)

脇起歌仙 『雁の来る時』

鶏頭や雁の来る時なをあかし
 旅をいざなふ秋風の声
 月昇る 豊々の山 従へて
 煙草嗜む指のしなやか
 ジャズ小唄軽くこなして人気者
 炬燵の猫は夢を漂ふ
 シリウスは青く輝き時止まる
 ローマの神か厚き胸板
 黄金の雨に身籠るをみなごよ
 解体新書腑分け通りで
 河岸繁盛振り売りもゆくお女中も
 日ごとに太る丹波黒豆
 月涼し茶屋の床几で団子食ぶ
 祭神輿を高く持ち上げ
 波に揺れ軽石の列わたつみを
 浪人生の前途決まらず
 花を添へ故郷よりの宅急便
 海雲レシピを男子御飯で

金井笑子捌

翁

金井笑子 子
 服部秋 扇
 鈴木美奈子 子
 戸部よしみ 子
 浜口康子 子
 谷内 令
 美奈子 子
 秋 扇
 白石一有 子
 よしみ 子
 一有 子
 美奈子 子
 笑子 子
 康子 子
 よしみ 子
 秋 扇

ナオ 夜をこめて亀の看経聞くべしや
 シルクロードに琵琶の伝はる
 近未来車は空を飛び交ひて
 007 面影に酌む
 斜に構へシヨーン・コネリー気取る彼
 いつしよに行かうオーロラを見に
 雑魚寝してつひ抱き合つてしまつたの
 緋色の糸の纏れ絡まり
 柘榴熟れ殉教のとき迫りくる
 いのち短し立待の月
 防空識別圏のなか鳥渡る
 カザルスの弦ピースと
 ナウ 浮世絵もめでたしぼつぺん吹く童
 肴数の子盃を重ねる
 耳奥に母の呼ぶこゑふと聞こえ
 ソーラーパネル段々畑に
 パンデミック二年目の世の花の詩
 老いを愉しみ仰ぐ初虹

美奈子 子
 秋 扇
 康子 子
 秋 扇
 美奈子 子
 秋 扇
 一有 子
 秋 扇
 美奈子 子
 令 子
 笑子 子
 秋 扇
 美奈子 子
 令 子
 美奈子 子
 笑子 子
 よしみ 子

令和三年十一月十六日首尾

(於・京橋区民館)

歌仙 『寺カフエ』

高岡風蘭捌

寺カフエの開け放たれて冬ぬくし

井尻荷葉

枯山水の宙を綿虫

岡本利英

チェロの曲静かに流し目を閉ぢて

井原 弦

夢か現か白樺の道

赤木和子

名月にみな酔ひ痴れる天文部

長谷川陶子

はやぶさ帰還へ野分たつころ

廣瀬松石

今年米神に供へて無事祈る

小林ジュン

一葉旧居ポンプ井の前

高岡風蘭

人力車揺れつつ心通はせる

丸山景子

フェイスシールド口づけの邪魔

出来千苑

恋愛はますます命がけの日々

荷葉

紙魚の日記を父は遣せり

利英

熱帯の驟雨が上がり青い月

和子

ひと息入れる風来の画家

陶子

取り寄せの御干菓子で飲むウイスキー

松石

丸三角と四角のもある

石

石畳足けんけんに花ふはり

ジュン

巣箱止り木作り鳥待つ

風蘭

ナオ 何の影霞の空へ眼をこらす

国境越えたハングライダー

水清く流るる岸は地雷原

露営の夜は火を絶やさずに

どかどかとシーナマコトがやってくる

雪ん子の跡探す深雪野

五七五二の字二の字と掛けて解く

声なき声も翁の豊かさ

姫君の恋の行方が気にかかり

燃える炎を抑へられずに

世の理解得てこそその幸月のぼる

ワインどぶろくみな祝酒

ナウ 切妻の飛驒の宿りに秋惜しむ

目にも鮮やかさるぼほの赤

日は西に鴉は啼いて山の巢へ

春灯点るタワーマンション

賑はひの戻る大路の花を待つ

人皆和して風やはらかに

景子

千苑

荷葉

利英

和子

陶子

松石

ジュン

風蘭

景子

千苑

荷葉

利英

和子

陶子

和子

松石

石

令和二年十一月 七日首
令和三年 一月二十四日尾 (文音)

歌仙 『十月とつき振り』

マフラーをはづして句座は十月振り
 冬眠前の熊のことなど
 繰り返し絵本を開く子供達
 喃語ときをり混じるリビング
 玉輪は大楠の影地に映す
 空黝々と澄みて好風かうふう
 坐禅組む庭にひとむら麝香草じやうかう
 われに縁なき後朝の情じやう
 恋がたきかくも異なる性さがを持ち
 顔はさまざま丘馬傭坑
 白髪びやくの三千丈に酒浴びる
 角つのを振りふり塩舐める牛
 雨に褪せ日照りに榮えて百日紅
 宿題手つかず夏休みの子
 サーフィンサーフィンはワイキキの月賞げいしょうでながら
 ドローンドローンやがてはeVTOL
 花吹雪く己の時を忘れずに
 珈琲珈琲カップカップ駘蕩たいとうの渦

廣瀬松石捌

赤木和子
 岡本利英
 井原 弦
 長谷川陶子
 高岡風蘭
 北原春屏
 小林ジュン
 廣瀬松石
 風蘭
 和子
 利英
 陶子
 春屏
 利英
 風蘭
 春屏
 和子
 春屏

ナオ
 窓外をマリア像ゆく受難節
 老獺な画家隠し絵を描く
 気に入りのページ擦り切れ色は剥げ
 蔵の御宝いまは瓦落多
 偽物もねうち出るかとまだ未練
 関東煮きはいつもひろうす
 寄り道の水掛不動苔むして
 父と母には駆落ちの過去
 思ひ濃く二世にせの契りを願ふらん
 とことはなんて幻想なのよ
 月面の模様見るたび変はるよな
 村芝居には九郎判官
 ナウ
 落花生殻むく音のかしましく
 料理持ち寄り昼のひととき
 知らぬ間に自信つきたるほめ言葉
 ホップステップジャンプ飛び級
 京の峰花は眼下にひろごりて
 黙して踊る壬生の面揺れ

荷葉
 千苑
 ジュン
 景子
 和子
 陶子
 荷葉
 弦
 風蘭
 利英
 陶子
 和子
 景子
 ジュン
 千苑
 松石

令和二年十一月 七日首
 令和三年 五月十九日尾

(於・前半三木半旅館 後半文音)

歌仙 『花 辛 夷』

鵜飼桜千子捌

吹かるるは白き蝶とも花辛夷

東海林さくら

雛を流してくちずさむ歌

内田章子

弥生尽少年の所作おとなびて

越尾董絲

パソコン開き哲学書読む

安樂明郎

月明に古びた句碑のくつきりと

川崎穹子

秘密の場所で眠る松茸

朝倉一湖

稲番はご当地キヤラに変身し

鵜飼桜千子

はしやいでゐるよやたらめつたら

さくら

駄々こねて君と揃ひの腕時計

章子

相性良しの神籤大事に

董絲

金剛婚孫と河童に祝はれて

明郎

貝も魚もプラごみに泣く

穹子

代議士は形ばかりの謝罪せむ

一湖

寒灸の背に刺さる織月

桜千子

はんなりと懐かしき宿京の味

さくら

ポストカードの阿修羅凜々しく

章子

餅花の弓道場は華やかに

董絲

初夢の意味どうも分からぬ

明郎

^ナ知恵の輪をあつさり外す二歳の子

穹子

地上間近で隕石は消え

一湖

休肝日なんて忘れて生麦酒

桜千子

太宰の手紙しかと曝書を

さくら

スキヤンダル蠢く翳に涙して

章子

本命スベアともに離さず

董絲

現状の痕跡やがて塵となり

明郎

地鳴りの響く寒禽の森

穹子

よろづ屋の閉店セール売り尽くし

一湖

何はともあれバスに乗り込む

桜千子

隅に居ることの安穩十三夜

さくら

秋のスカーフ淡き承^そ和^が色

章子

^ナ賑やかにアイルランドのハロウween

董絲

人を活かせば我もいきいき

明郎

医療事務通信講座更新す

穹子

舩挿す舟に波の穏やか

桜千子

静もれる闇の間に間に花篝

一湖

願ひを込めて種浸す桶

執筆

令和三年四月一日首
令和三年四月十八日尾

(於・北とぴあ&文音)

歌仙 『飛 天』

飛天彫る籬の風の光る頃
 土筆の茎の伸びる畦道
 春深む混声合唱聞こえて
 抱っこバンドに眠る幼子
 観覧車七色まとい月の下
 溢れ蚊払い浸る露天湯
 芸術祭漂流ゴミを作品に
 D I Yと趣味欄に書く
 仲人の四方八方言いくるみ
 連れて逃げてとうるむまなざし
 大地震くるかもしれぬ海溝図
 黒毛和牛のしゃぶしゃぶ美味し
 月涼しおしゃべり楽し歩く会
 はや夏祭準備せかさされ
 ゴールドの免許更新スムーズに
 あるじ自慢のカフェラテの技
 花の寺蔵改めて版画館
 塗ったばかりの畔に尻餅

密田妖子捌

藤江紫 虹
 多田史 代
 加納俊 子
 永多澄 枝
 村上町 子
 山本比佐 子
 密田妖 子
 高見よ志 子
 北野真知 子
 紫 虹
 史 代
 俊 子
 澄 枝
 町 子
 比佐 子
 妖 子
 よ志 子
 真知 子

ナオ
 天邪鬼の伝説を聞く里うらら
 子供自転車錆びつくままに
 名人戦駒を進めてA級へ
 痛い痛い爺の口ぐせ
 神無月家族旅行を出雲路へ
 白鳥飛来賑わしき潟
 新鮮な無人販売野菜小屋
 オンラインでは見えぬ色艶
 特派員ハニートラップに気をつけて
 後生願いの護符の数々
 旧邸に月を愛でつつ吟醸酒
 一行の詩に心爽やか
 ナウ
 よく似合う背広の衿の赤い羽根
 ミサイル発射怖い隣国
 上る陽へ南無阿弥陀仏唱えおり
 長押に今も掛かる薙刀
 友禅の裾に匠の花筏
 姉妹揃って久の野遊び

紫 虹
 史 代
 俊 子
 澄 枝
 町 子
 比佐 子
 妖 子
 よ志 子
 真知 子

令和三年五月十七日首
 令和三年七月 一日尾 (文音)

《赤穂・つばさ連句会》

歌仙 『傘ひとつ』

二代目中村吉右衛門丈追悼連句

八尾暁吉女捌

傘ひとつ消えゆく雪の南部坂

八尾暁吉女

揚羽たたためる凍蝶の夢

東條士郎

スケッチ帳いづもどこへも携へて

橘文子

予約の席はほの八番に

宇野恭子

引窓を引けば洩れくる月明り

士郎

茶会に集ふ長き夜の影

暁吉女

紅葉添へ楽屋弁当届きたる

恭子

化粧前には牡丹刷毛やら

文子

おいらんに一目惚れしたあばた面

暁吉女

顔ではなうて心でござんす

士郎

持てるもの全て投げ出す恋もあり

文子

織りと刺繍の豪華緞帳

恭子

粹に立つ波の格子の浴衣着て

士郎

くちなは払ふ月の濡縁

暁吉女

俊寛はただ石になれ父の言

恭子

黒潮に乗り離れゆく船

暁吉女

制札の陣屋の花に涙する

文子

篠笛の音の細くおぼろに

士郎

春の宵高笑ひする河内山

恭子

大向うより次つぎと声

文子

若き愛仏文学に学びつつ

士郎

共演者には名女優達

暁吉女

情厚く新派新劇映像に

恭子

千秋楽に冬將軍も

文子

ゆりかもめ阿国と美しく連舞し

暁吉女

絶景なるは楼門の雄

士郎

上と下当代揃ひたまんねえ

文子

超好好爺孫の襲名

暁吉女

更待になほ稿を継ぐ松貫四

恭子

利酒とても受け付けぬ質

士郎

お役宅小豆洗ひの音幽か

恭子

密偵たちは深く心服

文子

播磨屋は飛び六方で浄土へと

暁吉女

もう聞けぬのか「平蔵であゝる」

文子

願はくは花のしとねに包まれん

士郎

これぞ吉兆二重初虹

恭子

令和三年十一月二十八日首
令和四年一月十六日尾 (文音)

歌仙 『入道雲』

入道雲に拳骨受けろコロナ菌
 自肅自肅と蟬の鳴き声
 おかつばを蹴り口からのぞかせて
 うどんがいいね少し太めの
 たそがれのレトロの町に月上る
 畑の棚に糸瓜ぶらぶら
 阿波踊りする人形の見得愉快
 女子学生の紺のスカート
 地下鉄に乗り合はせしが縁となり
 目を見つめれば離れがたくて
 ふる里の宝となつた聡太君
 人工知能データ処理する
 冬の鳥写すカメラは定位置に
 氷柱と刃競ふ三日月
 よだれ掛け新品に代へお地藏さん
 園児の歌に和してハミング
 枝ぶりを慈しみをり花の寺
 長閑に廻る水車参連

杉山壽子捌

杉山壽子
 古賀幹子
 宮川尚子
 島田裕子
 中森美保子
 中西静子
 寺田重雄
 波多野茂子
 八雲鏡湖
 高橋すなを子
 長谷川芳子
 壽子
 尚裕保静雄

ナオ 田打ち靴泥つきしまま並ぶ柵
 本場スコッチはしごする旅
 きやあきやあとジエットコースター手ばなしで
 筆整えて般若心経
 古民家の再生される夏の果て
 山椒魚棲む奥多摩の川
 飯盒の飯くろ焦げにゼミコンパ
 パパより五つ年上の彼
 焼きもちがちらりと見えてかはいいの
 ふたごの熊猫くんずほぐれつ
 白々と有明月の残る丘
 美術展向け描く力作
 ナウ 秋深し能装束を繕ひて
 振り向きさまに用事忘れる
 パソコンに問はれるIDパスワード
 孫の動画をばーば楽しむ
 どの人もみんな友だち花の園
 若駒の食む秣たつぷり

執筆 尚保幹茂を雄湖静保尚裕幹壽芳を湖茂

令和三年八月二十六日首
 令和三年十月 六日尾 (文韻)

歌仙 『草 枕』

寺田重雄捌

蟋蟀の静かに鳴いて草枕

寺田重雄

稜線を染めお出ましの蛾眉

杉山壽子

村芝居勸進帳を稽古して

古賀幹子

甘えん坊は母にくつつき

長谷川芳子

水打ちし路地へ近づくげたの音

八雲鏡湖

風に揺られるのうぜんかずら

宮川尚子

買^ウい物はJISマークつき選ぶらん

壽雄

お手でつないで何処へでも行く

壽雄

和紙選び筆整へて恋の文

芳幹

銀座五丁目鳩居堂前

尚幹

ハムスターケージ脱走してきたの

尚幹

優勝力士大盃を干す

湖雄

懐も侘しく仰ぐ冬の月

湖雄

土蔵の軒に氷柱伸びをり

壽雄

空耳か座敷童の笑ひ声

芳幹

寝間着抱えて探す寝場所を

芳幹

城下町日がな音無く花の雨

湖尚

家族写真の笑顔うららか

湖尚

ナオ 遍路道しがらみ纏ふ杖の先

つまづく石を蹴飛ばしてゐる

コロナ菌人にとりつく丸いワル

玻璃の内よりえまふモナリザ

あとちよとなのに金魚が掬へない

しかと受け継ぐ茄子漬の味

まつすぐに初心貫く深き愛

保険名義が変えられた紙

悠悠と海外暮し老ひとり

鼻かぜ癒えてハーモニカ吹く

月天心寿命百年如何にせん

まずは利酒さらり喉ごし

ナウ 稽田を抜けて上越新幹線

静まる村に薄暮迫りて

何事も無きことを視るテレビつけ

まいにちチェック株の値動き

花ふぶき舞い散る中の撮影会

なごり暖炉を丁寧拭く

壽 湖 雄 尚 芳 幹 壽 湖 雄 尚 芳 幹 壽 湖 雄 尚 芳 幹 壽

令和三年八月二十六日首
令和三年十月 十日尾 (文韻)

《東京・桃天榭吟聚連句会》

和漢行 歌仙 『八千草や』

○印 韻は先

八千草や医書と同架の子規の本
つくつくぼうし遠く近くに

鶯飼桜千子
高橋 賢

樂士月下弾

鈴木千恵子

塗師能面研
路傍拾奇石

平林香織
小田みみこ

むぎわら蛸を市で売りだす

千恵子 賢

徴生醬油樽
徐福求神仙

千恵子 賢

着信音五つ数へて受話器取り
手帳の○は恋の格付け

香織 賢

大小のタトゥーの竜が絡み合ひ
チーズフォンデュの熱熱を食ぶ

香織 賢

ふるさとの雁木の上に月静か

千恵子 賢

倚窓看湖漣
詩朋集拈句

芳野禎 文

馬賊散打鞭
花の息城の櫓にたゆたひて

みみこ 桜千子

ナオ 搭乗のキャリアバッグに風光る
遙かに望む鳥の残影

鈴木那奈
白石一有

沙門止修行

千恵子 賢

幾何学方円

香織 賢

初灸点瘦身

香織 賢

車夫のバイトで荒稼ぎする

香織 賢

遊客登酒楼

香織 賢

がまん限界つひに駆け落ち

香織 賢

長剣装朱鞘

香織 賢

細弓張玄弦

みみこ 賢

鈴虫と桂男を呼び出して

みみこ 賢

ナウ 腰かけてみる猿の腰掛

千恵子 賢

夢と理念は昇華してゆき

桜千子 賢

焼土科陶瓦

禎 文

磨貝作螺鈿

禎 文

ポトマック河畔の花の香の淡く

那奈 文

すべての人に青帝の福

みみこ 文

令和三年九月十四日首
令和三年十月十二日尾

(於・京橋区民館)

短歌行 『鏡 割』

鏡割中は切餅パツク入り
 一円玉の初空に舞い
 つつましく暮らして母は健やかに
 誘い合わせてラジオ体操
 この先は男子禁制月見風呂
 トンボのタオルとキミの歯ブラシ
 うそ寒にあなたの嘘は果てしなく
 小さき鐘の音山彦となり
 昼寝する撮り鉄ひとり秘境駅
 オリンピックはバブルの時代
 透明な傘をぬらして花の雨
 ねぐらの枝に急ぐ親鳥

高山鄭和
 渡部春水
 山口和生
 鈴木ちかひ
 杜青春
 江畑哲男
 坂根慶子
 赤澤水魚
 浅岡照夫
 高橋夜潮
 斎藤東砂
 竹田金糸雀

染卵庭に隠して子ら遊び
 予定は未定手帳真つ白
 中毒化する検温と消毒と
 二番煎じの火の番の酒
 キッセがむマスクのままで良いからと
 涙は見せぬ抱擁のあと
 ピアソラの「忘却」に出る夏の月
 イグアスの崖雨燕飛ぶ
 煙吐き行きつ戻りつ田舎バス
 朝寝朝酒百薬の長
 庭先で今年の花の朱を賞でる
 作務衣の似合う土こねの春

西川菜帆
 小田みみこ
 渡辺 柚
 松澤龍一
 野村路子
 木之下みなみ
 野中山水
 安楽明郎
 小太刀昌雄
 松原邦博
 桂 右團治
 佛測雀羅

令和四年一月二十一日首（文音）
 令和四年三月十一日尾

（留書）コロナ禍に加え、前会長の哲子さんの逝去で活動がしばらく停滞していた「西北の風」は新しいコンセプトと体制のもとに活動を開始しました。新生「西北の風」の記念すべき作品です。
 （龍一）

《徳島・徳島県連句協会》

非懷紙・新世紀 『浮かれ猫』

梅村光明捌

出不精もなんの妻問ふ浮かれ猫
 土堤に一筋蒲公英の道
 花守の手薬煉となる意気見せん
 メダル戴き満面の笑み
 片恋の今がチャンスとプロポーズ
 喧嘩の原因は夫婦別姓
 月の宵鯨に大地揺れ動き
 祭太鼓をひたすらに打つ
 鉢巻きを締めて徹夜の財務官
 IT長者いづれなりたく
 何時の日か宇宙旅行も叶へられ
 忘れ扇に酒の染みあり
 果樹園はけものの居場所寝待月
 悪摺れの風竜田姫撫で
 カルティエとシャネルに飽きて清貧に
 練炭熾しかざす掌
 仕上がりは数年先か糸編む
 成人しても貰ふとしま

梅村光明 明
 岡真由子 郎
 東條士郎
 早見敏子
 二橋満璃
 洛中落胡
 西條裕子
 竹内菊
 佐藤清幸
 石本昇
 乾久恵
 三輪和
 松田一美
 曾根燦
 岡本信子
 正木孝枝
 豊井明美
 迷鳥子

漂泊の普通列車の硬き椅子
 桜の下で開く弁当
 阿波が舞台の素淨瑠璃聞く

宮内笑子
 赤坂恒子
 執筆

令和四年二月二十七日首
令和四年三月六日尾

(於・涓東コミセン&文音)

*新世紀。非懷紙式による二十一韻。二十一句目は短句を繰り返す。
鈴木漠の創案。命名は梅村光明による。

^{ナオ}石路の黄を庭先に見つけたり
 スケッチ帳と絵の具持ち出し
 鉄オタがでんと構える線路わき
 青大将のゆっくりと寄る
 Tバック紐の締め痕好きな彼
 かわりばんこに鳴らす酸漿
 月揺れてビルの谷間を千鳥足
 老舗の柚味噌手土産にして
 故郷の防災無線のんびりと
 持病抱える寄席の常連
 テロップで女流作家の計報知る
 近江八景柔き初東風
 湖の波沿いて駅伝ひた走る
 門外不出忍法の髓

和 春 恵 太 和 う 与 春 萌 与 太 和 太

^{ナウ}ロボット等いつの間にやら君臨し
 大統領を護る S P
 突然に子供飛び出し水鉄砲
 ハンモックには眠る人形
 新作は白雪姫と悪魔たち
 田螺とるひと腰をかがめて
 来てみれば丘にひともと花大樹
 土ふくよかに夏の近づく

萌 和 萌 和 太 萌 う

令和四年一月十五日首尾

(Z o o m)

二十韻

『ソーシャルデイズ』の巻

松本華与捌

薔薇置いて卓のソーシャルデイズタンス	松本華	与
ダブルで灯す蚊遣り煙たき	和田忠	勝
山並みは何時ものように座していて	浅沼小	葦
半刻経って踏切の音		与
大仏の背負いし月の小さく見え		勝
芸術祭に誘われている		葦
新酒酌む細き指先触れ難し		与
グリーンサラダの彩りも良く		勝
気位の高きシヤム猫知らん顔		葦
言い訳多き政界の猛者		与

ナオ絵葉書はセーヌ寒濤スケッチし		勝
雲間の月を誘うたま風		葦
民話聞く子らの背後に動く影		与
掘り出し物は産土にあり		勝
さりげなく想いを告げる三の糸		葦
隣の席に君の来ぬまま		与
ナウ鴉かと思紛う黒き鳩のいて		勝
淡雪ふわり橋の欄干		葦
花盛り人力車夫は駆け続け		与
春融みなどで分ける江戸ッ子		勝

令和三年二月 十八日首
令和三年二月二十八日尾 (文音)

二十韻 『紅葉忌』

鈴木善春捌

言論の自由はどこへ紅葉忌	鈴木善春
開化の街にかかる弦月	秋山よう子
夜学子はジャズのビートに揺らめいて	浅沼小葦
1 + 1 が 2 にも 3 にも	春葦
ウ 白皙の天才棋士の追っ掛けに	う葦
恋愛バト先手必勝	春葦
親指でハートマークを猛連打	う葦
墨のかすれに禅の味わい	春葦
語り部は森の狐火見たと云う	う葦
古城そびえるボルガ氷江	春葦

GPS頼りに單車ひとり旅	ナオ
見知らぬ人と交わす挨拶	う葦
急ぎ足カクンと折れたハイヒール	う葦
四十路の恋はおしゃれ慎重	う葦
月涼し新しき命生み出され	う葦
いなさの力うまく使つて	う葦
ウ 帰り道ちよつと立ち寄るシヨットパー	う葦
窓の外には暮れかねの山	う葦
未来図を描きて行かん花万朶	う葦
声を頼りに探すうぐいす	う葦

令和二年十月 三十日首
令和三年二月二十四日尾 (文音)

歌仙 『姫小松』

凧に散りあらがひて姫小松
 残る虫這ふ城の石垣
 草書体まづ筆先をととのへん
 水の香りの届くアトリエ
 月の舟ゴールポストの上に乗
 運動会の明日が楽しみ
 秋燕の旅を見送る父と母
 ともかく祈れ宮司のたまふ
 恋愛を芸の肥やしに蓄へて
 元彼からの悩み相談
 操りの木偶がかつてに踊りだし
 紙面をよぎるAのイニシャル
 苦艾ガラスの靴に踏まれたり
 露天風呂から梅雨晴れの月
 流れ行く時は白馬の駆けるごと
 大和三山雲のたゆたひ
 手に取れば花と柳の絵巻物
 老僧の撞く鐘はのどらか

増田 敏捌

生駒さとし
 増田 敏
 松本奈里子
 谷澤 節
 もりともこ
 金城比呂子
 山本天 球
 角谷美恵子
 三原寿 典
 木戸ミ サ
 上野知 子
 井内温 雄
 梅谷彌 生
 脇田恵 子
 竹山美代子
 竹山みどり
 東條士 郎
 齊藤徳 子

ナオ 蜷搔く漁夫の巧みな竿捌き
 テレビゲームは孫に完敗
 市民向けゲノム医療の講座あり
 落ちぬ落語でつひに転寝
 夜を覆ふ雪しんしんと降り頻る
 納戸の隅に凍蝶の翅
 宿命と唯受け入れる訳もなし
 かたくなを解き黒髪を解く
 伊達男チャオ・チャオ・アモーレ迫りくる
 with コロナで回す経済
 満月の素顔美し黄金色
 新走りなり吊るす杉玉
 ナウ 爽籟に税ある町訪れて
 あんころ餅に齧り付く子等
 庭に来る雀の声の親しさに
 胎教に好い田舎生活
 朝まだきそぞろ歩けば花盛り
 遙か海まで砂丘かげるふ

中田寿 子
 米倉洋 子
 林典 子
 蒲生智 子
 岡谷 樹
 島田美智子
 敏 里 節
 知 美 典
 比 天 彌
 小池正 博

令和三年十二月 二日首
 令和四年 一月十七日尾 (文音)

二十韻 『自由民主と』

進行係 坂根 慶子
執筆 山中たけを

ペーロンや自由民主と響く銅鑼	坂根慶子
赤海亀に国境は無し	高山鄭和
ゆつくりと歩めば景色変わるらん	山中たけを
弁当作り転職を機に	木之下みなみ
名月の照らす岩山化石龍	安楽明郎
封筒匿し案山子立ちたる	松澤龍一
頬撫でる香の煙に彼岸花	杜青春
振袖の娘はしやなりしやなりと	龍一
虫除けに父がお札を貼りまくる	鄭和
浪漫旅行のドブネズミペア	青春

ナオ 駅ピアノ情熱大陸弾む指	鄭和
三途の川の婆も聞き惚れ	みなみ
骨の髄しゃぶり尽した牛肉麵 ^(ニエウロウミェン)	青春
寒暄にみる月はひそりと	たけを
雪女郎ミステリアスのそこが好き	慶子
神に叛いて水割りを飲む	龍一
ナウ 願わくば換金可能な贈り物	たけを
去勢の猫と睨む永日	青春
追憶は力となりて花盛る	みなみ
居間のソファにうららうららと	龍一

*牛肉麵：台湾名物の麵、骨付きの牛肉が入ってしゃぶる

令和三年六月二十六日首尾
リモート興行（於：台北、東京、横浜、野田（千葉県））

歌仙 『語る羅漢』

語る羅漢耳貸す羅漢大西日
 振り向けば見ゆ滴れる山
 御御付おつ吸れば母の声聞こえ
 床屋のおじさんいつも澆漣
 月仰ぐフレンチ・ブルはチンクシヤで
 風をたたんで秋扇消え
 碁仇が新酒抱えてやってきた
 お前一昨年死んだはずでは
 掻き抱く幽霊かもと思いつつ
 オキシトシンの巡る体内
 後ろ向きブーケを投げる夢を見る
 バックミラーに提げた賽子
 鉛筆の手ぶれに狂う阿弥陀籤
 昇る朝日に初霜の月
 ダッシュする高校球児息白し
 海苔弁ドカ弁サンド一斤
 もてもての澁澤翁の花の笑み
 雀の雛の巢からこぼれて

高塚 霞
 高尾秀四郎
 松澤龍 一
 宇田川 肇
 高山鄭 和
 城山九 天
 浅沼小 葦
 馬場由紀子
 安栗明 郎
 本屋良 子
 成島静 枝
 山中たけを
 小泉 桂
 志田則 保
 吉田酔 山
 大久保風 子
 渡部春 水
 渋谷盛 興

ナオヤツホツホ春の川へとはひふへほ
 わずかな段差ぎっくり腰に
 下総に伝説の龍そこかしこ
 日本沈没ありやなしやと
 海描くパレット絵具ブルーのみ
 少女の好きなブーゲンビレア
 汗ぬぐう肌の白さに一目惚れ
 オイルフェンスで防ぐ軽石
 サモアから舟で友達やって来る
 時計の針の進みゆっくり
 落剝の阿修羅の貌に秋思あり
 月明かり踏みわたるせせらぎ
 ナウ誰殺すベニテングタケ前にして
 へぼ探偵はグルメA級
 数え歌三は佐倉の宗五郎
 産土神に二礼二拍手
 花の雲鯉こゝろにならんと跳ねる鯉
 ファンファーレ聴き駈ける若駒

每野月 胡
 鈴木す ず
 松島待 雪
 中尾美 琳
 鈴木幸 子
 木之下みなみ
 大塚久 子
 諸藤留美子
 西田一 枝
 鈴木千恵子
 林 転 石
 宮川尚 子
 高橋 賢
 坂根慶 子
 武井敦 子
 高塚 霞
 小泉 桂
 渡部春 水

令和三年 十月五日首
 令和三年十二月七日尾 (文音)

(留書) 恒例の「くろしお連句会」は今年も中止になった。その代
 わりに「インターネットによる発句大会」を行った。互選一
 位の句を発句に文韻で歌仙を巻いた。発句大会に参加した全
 員に句を付けてもらった。
 (進行係 龍一)

歌仙 『銀座カフェ』

静 寿美子捌

さりざりと崩す削氷銀座カフェ

静 寿美子

観劇 帰り 粹 な 羅

三輪慶 子

白金のスポーツカーに飛び乗って

市川綿帽子

気持ちよさそになびく笹竹

横田眞理子

雲消えて月光浴の青年は

日比谷虚 俊

残る 螢を 掌に のせ

小田狂 声

倒れたる野菊をそつと起こしやる

眞 声

ヒーローいつも遅れ参上

綿 俊

閉まりたるエレベーターに二人きり

綿 俊

枕の綿のふはふはとなる

綿 俊

屋上のスプリングラー逆回転

声 俊

時を戻してどつき漫才

綿 俊

冬の月復興支援の人群れて

慶 俊

半分こする 熱き 鯛焼

寿 俊

面倒な奴は冷たく突き放す

眞 俊

畦道をゆくランドセルの子

眞 俊

千年の生命溢るる花万朶

寿 慶

早出の遍路亭主見送り

慶 寿

ナオ 破れきし夢を語つて春炬燵

箆筒屋といふ古りし看板

玄関に口裂け女立つてゐる

外出時にはポマードで決め

見慣れない野良猫ふえて梅雨の軒

留学生 来る 暑き 日

照れながらティクトックで踊り合ふ

ひと夜限りのグラス捨て去り

激流に出川 哲朗流されて

変化球のみ投げるピッチャー

下戸の我手持ちぶさたの寝待月

轍の跡に紅葉かつ散る

ナウ 案山子避け田畑あちこち群れ雀

産土 神へ 供物 捧げて

買ふなれば丸い小さな天眼鏡

旅の鞆に陀羅尼助入れ

花の下再会したる実の母

紋白蝶の消ゆる草陰

眞 綿 慶 俊 声 寿 綿 眞 声 俊 綿 声 慶 寿 声 綿 眞 俊

令和三年六月六日首尾

(ZOOM)

半歌仙 『十葉や』

高橋すなを捌

十葉や日々の暮らしに感謝して	高橋すなを
碧滴る山と向き合ふ	石川 葵
画用紙に大きな文字とパパの顔	渡辺洋子
廊下隅には猫脚の椅子	杉山壽子
雲の間の更待月の呼吸聞き	小柳由起子
ステッチ運ぶ爽涼の糸	瀧村小奈生
新ばしり藤井棋聖は初防衛	青砥和子
気のない振りで名刺交換	安藤なみ
まつすくな道化の恋にほだされて	葵
単衣帯解く潮騒の宿	洋子
蝉しぐれスマホ中毒だめですよ	壽子
餓頭ばかり夢を飛び出す	由起子
鬼太郎と捕りにゆきたい寒の月	小奈生
釧路原野に丹頂の舞	和子
ほほ笑みの国ミャンマーは今何処	なみ
摩尼車触れ風のやはらか	壽子
花盛り皆が詩人になつてゐる	和子
夏隣には締まるウエスト	すなを

令和三年六月 十八日首
令和三年七月二十八日尾 (文音)

歌仙 『青 鯨 が』

青鯨が兜太の墓に万愚節
 島に別れを告げし白蝶
 最先端技術に潜む春愁い
 お金次第で決まる長生き
 夕顔の一輪置かる月の卓
 採れた秋茄子家庭菜園
 雁の列谷川岳を渡り来る
 二人寄り添い揺れてゴンドラ
 目の皺と犬歯が好きと口説こうか
 好きだけ吸うドラキュラの恋
 思い出は寝ても覚めても吾が胸に
 修正液で消せぬ前歴
 刺青の選手が吠える夏ラグビー
 高原野菜夏の霜降る
 朝食にスムージー色を添えている
 神も驚く8Kの技
 母連れてドライブ楽し花疲れ
 芝の地蔵に風車添え

渡部春水捌

渡部春水
 松澤龍一
 白石一有
 志田則保
 木之下みなみ
 成島静枝
 諸藤留美子
 鈴木幸子
 中山弘子
 酒井千恵子
 大塚久子
 水子
 龍有保
 美枝

^{ナオ}鶏が高く時告げ春霞
 日本のへそは郡上八幡
 脳トレへ祝祭日の名のテスト
 キヤリアアップに気象予報士
 コロナ禍を知るや知らぬや熊穴に
 火事だ火事だと桂男が
 空中へポンプで描く恋一字
 遠くの町へ連れて逃げてよ
 南極に太郎次郎が待ってるよ
 メールを開けて今日のお仕事
 月を待つきぼうの通過待つように
 銀杏ポトリ肩を叩きて
^{ナウ}竹筒でとくとく新酒回し呑み
 気分上がって筆は冴え行く
 油絵の個展を開くりモートで
 復活祭に沸きしヴァチカン
 街道に少年赤き花を売る
 水あたたかく朝の洗顔

幸弘恵久水龍有保美枝幸弘恵久水龍有

起首 令和三年四月 十二日
 満尾 令和三年五月二十六日 (文音)

新形式
オリンピック 『クーベルタンの髭』

【一連】

クーベルタンの髭に夏蝶 松澤龍一

雲の峰ブルーインパルス夢のせて 青 鈴木幸子

猫が大好き目指す獣医を 大塚久子

予備校の学費を稼ぐ高校生 幸龍

ウーバーイーツ月が案内 幸龍

【二連】

さつまいもオーブンで焼き黒焦げに 黒 久龍

夫の妬心妻の寛容 久龍

白帯が師範を倒し恋芽生え 幸龍

彼の下宿に今日もお泊り 久龍

抽斗に目玉おやじが匿されて 龍

【三連】

放屁止まず赤っ恥かく 赤 渡部春水

呪文かけドット模様のアルマジロ 諸藤留美子

見かけによらずかなり大食い 志田則保

斜滑降板だけ先に走り出す 成島静枝

雪をすつぽり山頂の弥陀 木之下みなみ

【四連】

血圧にいいことしても下がらない 中山弘子

勇者の胸にひまわりブルーケ 黄 酒井千恵子

汗流し五輪支えるボランティア 水

彼の応援息を詰まらせ 美

付き合いをバラしてしまうユーチューブ 保

【五連】

信号進めのろのろ渡る 緑 枝

古文書を広げてみたがさつぱりで み

大ぶろしきを甥はうけつぐ 弘

復興の五輪へ楚楚と花は咲く 恵

土手に寝ころび遠き囀 執筆

(注) 五句五連、各連で五輪の輪の色にちなんだ青いもの、黒いもの、赤いもの、黄色いもの、緑のものを詠む。スポーツに関連するものを各連で最低一句は詠む。発句は短句でもよい。

令和三年七月二十三日首
令和三年八月二十日尾

(スームによるリモート及びメールによる文音)

(留書) この形式、思い付いたのが、TOKYO2020の開会式の朝である。さつそくテレビで開会式を観戦しながら巻き始めた。
(龍一)

短歌行 『鵲高音』

塚本 睦捌

鵲高音一喝したる刹那かな
 風渡りゆく広き薄野
 名月の城に掛かるを待ち兼ねて
 写真の技はプロも顔負け
 ッカラフルなグルメ情報溢れ出す
 心地よき椅子テラス席にも
 僕だけに微笑みかけるパ리지ェンヌ
 短い夏の泡沫の恋
 噴水は放物線を描きをり
 自粛解除に人はうきうき
 響むかに千本の花咲き揃ふ
 甘き匂ひを纏ふ陽炎

塚本 睦
 津田公仁枝
 片桐栄子
 服部瑞華
 奥山ゆい
 大竹花永
 柴田恭雨
 松尾一步
 各務恵紅
 藤田真木子
 睦

ニオ海見えて遠足の列早足に
 汽笛の音の長く聞こゆる
 帰るべき頼るべき故郷もなく
 追ひて縋りて一路北へと
 伝統のアイヌ模様の首飾り
 囲炉裏囲みて酌み交はす酒
 太りたる氷柱に月の白々と
 目覚めてもなほ夢の続きを
 ナウ見つけたき宝物ならすぐ近く
 擦り寄る猫の毛並艶やか
 果てもなく流れゆきたる花筏
 のどかに暮るる美濃の山々

栄子
 公仁枝
 ゆい
 花永
 一步
 真木子
 恭雨
 瑞華
 公仁枝
 一步
 恵紅

令和三年 十月 四日首
 令和三年十一月二十九日尾
 (於・岐阜市ハートフルスクエアG)

歌仙 『熊野行』

人くさき神々ばかり熊野行
 紅殻格子映ゆる小殿
 尾白鷺ふいに空へと飛び立ちて
 仰ぐ孤峰の肩に月冴え
 見て盗むものと言はれし祖父の技
 棒鱈煮こむ香りひねもす
 ウしづごころ乱す盛りの花深く
 青む岸辺に船頭の声
 雛僧の恋は秘めたる相聞歌
 待ち焦がるるは後世の訪れ
 再審は司法の門をまたも断ち
 成長された皇女にこやか
 夏料理酒系正しく享け継げば
 まづはお勧め川床の鱧はも
 商談は丁々発止渡りあひ
 私利私欲など微塵これなく
 月挑むいづれ劣らぬ役者振り
 風の随意に草の実の旅

東條士郎捌

東條士郎

竹内 菊

都築ひな子

曾根 燦

三輪 和

二橋満 璃

西條裕 子

関 真由子

早見敏 子

乾久 恵

佐藤清 幸

丸岡陽 子

士郎 燦

満 璃

ひな子

久 恵

和

ナオルパシカに似顔絵描きの赤い羽根

北方領土遠くぼんやり

近年の異常気象に農家泣き

株価暴落震撼として

接吻の狎れた仕種に透ける嘘

詐欺師の妻は半眼の笑み

ふるさとというもの持たぬ口まかせ

影の動かぬ迷ひ狼

夢の児童話の国へクリスマス

鏡よ鏡どうぞ教へて

太古より地球隈なく照らす月

添水のひびく寺の静寂

ナウ雪迎へ里はそろそろ雪のころ

天狗伝説一本松に

栄光は過去のものなり刀鍛冶

ニート暮らしの露味噌の味

花の波頂めざし押し寄せる

都踊へ姉妹着飾り

真由子

裕 子

敏 子

陽 子

清 幸

士郎

菊

ひな子

燦

和

満 璃

裕 子

真由子

敏 子

久 恵

清 幸

陽 子

令和三年十一月十四日首
令和四年二月十一日尾

(於・交流プラザ&文音)

百韻 『山城』

初折 小林節子捌
 二ノ折 加藤亀女捌
 三ノ折 渡辺 柚捌
 四ノ折 城倉吉野捌

山城や蜥蜴に武士の面がまえ
 水鏡には張りを解く百合
 大夕焼けんけんぼんと石蹴りて
 辻音 楽 師 け ふ も 街 角
 列なせる人気パン屋のクロワッサン
 投げたコインは裏か表か
 月さやか末は五輪の選手にと
 蓮の実ころげ会話膨らむ
 うやや寒の湖をめぐるスニーカー
 乙女の像に風のざわめき
 ドンファンと噂の彼が帰国して
 魔除けの鎖いつかばらばら
 またしても一滴落とす涙壺
 戦は闇と象も駱駝も
 筆勢の墨絵の中を飛び出せる

酒井敬 子
 小林節 子
 加藤亀 女
 森川淳 子
 堀尾一 夫
 金井笑 子
 城倉吉 野
 古川柴 子
 伊藤弥 生
 渡辺 柚
 柴 野 亀 節 笑

やっぱり美味いふるさとの牡蠣
 寒月に賓頭盧さまの丸つむり
 酸素ボンベが足らないのです
 草だけが伸びる広場に深呼吸
 須恵器の欠片彩をかすかに
 花ごろも綸子模様の浮き立ちて
 蝶々の中縫ひて自転車
^{ニオ}行く春のエデンの園を追はれたる
 風来坊の隠すロザリオ
 ふと鳴れるからくり時計ふれざるに
 飲めばたちまち水虫に効き
 彼の腕眩しき沖に出るヨット
 待ち受け画面笑顔はみ出す
 ひたむきな初心な恋ですラン・ラララ
 免疫力を 持 たぬ 十代
 畑仕事 実習生は留学生
 凍て土に 来て 鴉こつこつ
 百名峰踏破めざすと豪語して
 硫黄の匂ふこころは隠し湯
 栗名月 憶良を想ひ子を思ひ
 コンビニ 灯火そぞろ身にしむ
^{ニッ}コロナ禍に ライン相手の角力草
 賢者のやうにただ黙す岩

節 柚 笑 節 弥 野 淳 敬 柚 弥 夫 柴 野 節 敬 笑 淳 亀 柚 弥 笑 夫 淳

青春はサイモン&ガーファンクル
 明日はあの娘にきつと逢へるよ
 猫走る露地の真中のポンプ井戸
 駄菓子屋さんごっこおまけつく飴
 取り囲むタイムカプセル同窓会
 近江の夏はあはあはと来る
 見世蔵の銀を散らして月涼し
 モダン復活母の銘仙
 ポケットに父の愛した古ライター
 休日走る蒸気機関車
 亀鳴いてそろそろ飯の炊き上がり
 支柱あまたに千年の花
^{三才} 県境の往來自由つばくらめ
 積まれてかをる木場の角材
 贈られしからくり小篋秘密めき
 喧嘩騒ぎのあとの一献
 ブルカ脱ぐ私の素顔あなたへと
 鮫鱈まつり潮騒の浜
 温暖化NOと言ひ出す雪女郎
 三つ子の魂ぐうたらの癖
 ひたすらに色鉛筆を削りをり
 古城巡りの日帰りツアー
 就活の人気はIT企業とか

節 柚 弥 柴 野 敬 笑 淳 龜 節 夫 柚 野 夫 敬 柚 柴 龜 弥 笑 夫 淳 龜

飽かず見つめる美しき棋譜
 球場の勝利の余韻月にあり
 水引草を撓め門扉に
^{三ッ} うろぬき菜和へて卒寿のひとり膳
 波のまにまに郵便の船
 浮世絵のベルリン藍は際やかに
 血統書付き駿馬いなく
 ゴールまで愛を貫くプリンセス
 結婚の自由すべてのひとに
 飛び移る空中ブランコ大喝采
 殻を破りて蟬の月光
 夏物のガレージセール子供連れ
 使ひこなせぬデジタルの機器
 健康診断MRIの脳美しく
 けふの庭には今日の鳥影
 ゆつくりと花の雲抜け始発バス
 初虹かかる国生みの島
^{四才} 嗣治描く春の行事のやはらかく
 募りて深き望郷の念
 楽焼の猫の手招く街角に
 少し歪んだ湯屋の煙突
 この夕べ緋いてみる歎異抄
 貴方まかせに生きて凍蝶

夫 淳 龜 節 敬 柚 節 敬 淳 龜 柴 弥 笑 柴 夫 柚 弥 柴 野 龜 敬 淳 笑

雪合戦ヒゲと姫とが投げ合って
越すに越されぬ国境の壁
ジェンダーフリー鳶は風に輪を描き
かごめかごめの歌の不可思議
屋敷去る座敷童の下駄の跡
旅の土産はボルドーの酒
使徒像の広場を照らす月円か
黒塗り文書群れて敗荷
四^ワ秋の蚊の何とやっかい平手打ち
あぶなく揺るるビルの窓拭き
残照の富士山影の三角形
書いた愛した生きた墓碑銘
いつ見てもアインシュタイン舌を出し
弛まず歩むひとすぢの道
花満ちて達筆のふみ全快と
雛の雀のかしましき宿

柴野敬夫 笑野弥 柚淳節 笑夫 柴野弥 笑野敬夫 柴野敬夫

令和三年八月 八日首
令和三年十月十八日尾
(文音)

《みよし・ひなの会》

半歌仙 『リトマス試験紙』

石川 葵捌

色変へぬリトマス試験紙めかり時 石川 葵

赤い鉢巻メーデーの街 西田 一枝

風合戦どつと人波押し出して 坪井まぢこ

犬を待たせて長電話する 徳永 明子

根深また届くは月の勝手口 明

寒九の水で仕込む吟醸 枝

鬼たちよやれ歌わんか踊らんか^ッ 枝

ポルカドットの揺れるスカート 葵

恋心隠し切れないハイティーン 枝

独り占めする君の眼差し 明

知らぬ間に詐欺の片棒担がされ 明

煩惱憂ふ夏解の老僧 葵

月皓と去来忌修す草の庵 枝

通り土間には竈馬飛跳ね 明

剛速球投手の放つホームラン ま

栄養ドリンクけふは三本 葵

沖合の仕掛花火は波焦がし 明

絵筵延べて眠るみどりご 筆

令和三年四月二十日首尾

(於・みよし市カリヨンハウス)

六条院 『恋もまた』

衆議判

^夏 夏郎 衣替へあつさり捨てし恋もまた

オーデコロンで分かるお相手

その日草こぼるる色も愛ほしく

何処で鳴くやら空蟬の主

尼寺に見上げる月の明易し

ネット設備も整へてをり

^秋 秋郎 画面からおわら祭りに来よ来よと

名残りの蚊帳に君を待ちつつ

指折れば青息吐息身に入みる

二十三夜が 招く 大罪

小説のやうな出遭ひと思ふたに

ころころ変はる猫の標的

赤坂 恒子

星野 焱

恒子

焱

恒子

焱

恒子

焱

恒子

焱

恒子

焱

^冬 冬郎 ばあちゃんのちゃんこ着て運を呼ぶ

餅配り終へお役目も終ふ

懸想文桐の箆筒に忍ばせて

伸るか反るかは初神籤より

若水を汲む夫の背が月影に

遺産 相 続 広 き 田 畑

^春 春郎 動物と共存できる環境を

写真に釣られ嫁ぐアフリカ

想像と現実の差を春の夢

釈迦に焦れる涅槃図の象

月の舟乗つて帰るか花疲れ

弥生野に座し琴を奏でる

恒子 焱

恒子 焱

恒子 焱

恒子 焱

恒子 焱

恒子 焱

^梅 梅村 光 明

恒子 焱

恒子 焱

光 明

執 筆

令和三年六月三十日首 (文音)
令和三年八月 一日尾

百韻 『夏草や』

夏草や沖の巨船の真白なる
 スケッチブック開く梅雨晴
 新居ではガーデニングを楽しみて
 チエロの調べに眠るみどりご
 しばらくは薫る珈琲マカロンと
 舞台稽古に力込めたり
 息白く声高に来る月明り
 枯蟻螂の斧に錆浮き
 インクもて冴えざえと文したたむる
 坊ちゃん電車飛び乗り宿へ
 面接の Q & A 反芻し
 肩寄せ眺む高原牧場
 スパイやも知れぬ横顔うつとりと
 英国製が背広の値打ち
 秋暑し微動だにせず近衛兵
 群れなす蜻蛉風に戯る
 月の夜は友と両吟明くるまで
 シテとワキとで謡ふ「三井寺」

小野雅子
 植木陽子
 三原寿典
 尾崎志津子
 前田空果
 土井重悟
 陽子
 雅子
 志津子
 寿典
 重悟
 空果
 雅子
 陽子
 寿典
 志津子
 空果
 重悟

かきくどき亡き人の立つ夢枕
 やたらに絡む悪い酒癖
 しのめの朱に染められて花の雲
 佐保姫かよふ野山かくはし
 宇宙への野心昂る奴胤
 潮干狩りとて皆で繰り出す
 いつまでも扱ひ慣れぬスマートフォン
 恋の歌など書き散らしては
 かすかなる衣擦れにさへ高鳴るを
 赤木ファイルにあまた黒塗り
 ぼんやりと遠き螢火眺めをり
 UFO 来いと虹に口笛
 絵日記のハナマルうれし夏休み
 犬を従へ空き家探検
 秋じめり天井なめの仕業とふ
 迎鐘撞く人の行列
 蒙昧の眠りを覚ます月今宵
 顕微鏡にはスピロヘータが
 ニッ我々もただの生き物大あくび
 口切の茶事渋く装ひ
 落ちのびし館荒れ果て霰降る
 鼠振り向くバンクシーの絵
 匿名のラブレターには困り果て

雅子
 陽子
 寿典
 志津子
 空果
 重悟
 陽子
 雅子
 志津子
 空果
 重悟
 陽子
 雅子
 志津子
 空果
 重悟
 陽子
 雅子
 志津子
 空果
 重悟

舫も解けて恋の浮舟
 相愛の暴露本書きベストセラ
 警邏巡査は手持無沙汰で
 幻月に溢れるほどの思ひあり
 紅葉の社ダムの底へと
 椋鳥の帰る罫のかしましく
 少女が綴ぢる手作りの手記
 をちこちの花はともがき旅をせむ
 耳を澄ませば亀の看経
^{ミオ}ぶらんこを漕いでお日様蹴つ飛ばし
 生きがいいのさ魚河岸育ち
 藪蕎麦の暖簾の揺るる裏小路
 あら深窓の佳人彼氏と
 目くばせにわらはの本意を知れぞかし
 離婚調停埒明かぬまま
 行く末は川の流れと割り切つて
 聖火台には希望も点り
 闘ひの医療従事者寝もやらず
 まなじり確と冬ざれの街
 寄り道し籠山盛りの蜜柑買ふ
 斜め掛けするデニムのバッグ
 竜頭の舟の待ち侘ぶ今日の月
 春秋戦国馬肥ゆる郷

重悟 空果 雅子 志津子 寿典 重悟 陽子 空果 陽子 雅子 寿典 陽子 志津子 重悟 空果 雅子 陽子 寿典 雅子

^{ミツ}敗荷に弓矢折れたる兵を見る
 夢窓忌なれば庭に对坐す
 心地よき色なき風が頬をなで
 翻へり飛ぶスケートボード
 ブランデー片手にミセスロビンソン
 組香を聞く年上の女
 潔く焦がれし日々にけりをつけ
 ペダルを踏めば気力充実
 無重力の船外作業月涼し
 かぐや姫さま羅を着て
 鴨川の友禅流し鮮らけく
 吉田山へと料峭の道
 老獺な幹にぞ映ゆる淡き花
 いくつになれど春の愁ひは
^{ナオ}寺に棲むIQ高き子持猫
 散歩に出れば皆が振り向く
 金次郎まねて読むのはミステリー
 何人殺すアガサ・クリステイ
 土石流逃げる間もなき速さにて
 壁の守宮とラヂオニュースを
 坪庭の井戸で西瓜を冷やした日
 こんな処で巡り合ふとは
 幸せになれよとうまく^{かほ}躲されて

志津子 重悟 寿典 空果 陽子 志津子 重悟 空果 陽子 雅子 寿典 陽子 志津子 重悟 空果 陽子 雅子 寿典 陽子

鼠小僧の狙ふ金蔵
 捕物の網に囲まれ如何にせん
 情け有馬の水天宮ぞ
 三日月に紺緋織る機の音
 茸狩りへと誘ふメールが
 彩りの案山子並べて峽の村
 重いらイカの出番ここぞと
 好事家の伯父の好むは李朝壺
 床の間に射す薄き冬の日
 無名庵巴御前がゐたといふ
 手に取れぬもの過去と陽炎
 推敲を重ねてつひの花あかり
 日永の郷に夢を追ひつつ

雅子
 重悟
 志津子
 空果
 寿典
 重悟
 志津子
 空果
 重悟

句上 植木 陽子 十六句 三原 寿典 十七句
 尾崎志津子 十七句 前田 空果 十七句
 土井 重悟 十七句 小野 雅子 十六句

令和三年六月七日首
 令和三年九月四日尾
 (文音)

短歌行 『かるく打水』

秋田てる子捌

どんぐりや父似の顔をほころばす
 駄菓子いろいろ月の店先
 雁の列 駅伝中 継励まして
 宅配便の不在票あり
 独り居は旅三昧の夢描く
 育たぬ恋にかるく打水
 初子抱く単衣の妻のはんなりと
 英語テキスト定期購読
 バンクシーグループ壁と見こう見
 神のうしろで猫毛づくろい
 花の宴 螺鈿の筥を引き寄せて
 箏築の音は夕東風にのり

松ノ井洋子
 秋田てる子
 熊坂昌子
 洋子
 てる子
 狩野康子
 昌子
 てる子
 康子
 昌子
 てる子
 康子

ナオ木道を黄蝶粉蝶先導し
 上り列車を待つは撮り鉄
 ギリシャ語の十五番目はオミクロン
 円空仏は好好爺めく
 亡き友の夫人を今も遠く視る
 幻ばかり胸にゆらゆら
 月光を抱えんばかりラージヒル
 所属企業の名入り冬帽
 ナウ新しき味売る移動販売車
 プラスチックを魚が呑み込む
 花の下 亜細亜の民も輪の中に
 春灯かざし推理小説

昌子
 洋子
 康子
 てる子
 洋子
 昌子
 洋子
 康子
 洋子
 昌子
 洋子
 康子

令和三年十一月 九日首
令和三年十二月十四日尾

(北仙台コミュニティセンター)

《仙台・ほればれ座》

歌仙 『廃校の空』

高山達雄捌

赤とんぼ廃校の空いろはにはほ

佐々木游子

アングル定め待つは名月

高山達雄

秋うらら市井の暮し記録して

水瀧丹

挽ぎたて野菜どれも百円

游子

いそいそと出かける先は能舞台

雄丹

糸引の技継いでみたいと

雄丹

ッ日雷壺の碑ちよいと打ち

游子

あれやこれやで政揉め

雄丹

熊さんが押っ取り刀のボランティア

雄丹

ミドルネームを愛媛にせん

游子

結納に白磁の器あつらえて

雄丹

志功の天女俺の嫁さん

游子

神の旅月歌々と照らす道

游子

果実酒のビン棚を彩り

雄丹

キッズヨガ虚弱体質改善し

游子

更紗の街着粋に着こなし

游子

行灯のゆらりゆらりと花見船

雄丹

孕猫らしどころか大様

雄丹

ナメでたいな村民揃い伊勢参

游子

経文写るむすび尊し

雄丹

妖怪を味方につけて帰還せん

游子

アイスランドでマグマ採取し

雄丹

急患に若き看護師汗みどろ

雄丹

土用鰻の桶にくねくね

雄丹

女傑恋う火消し組の組頭

雄丹

祝言唄に洪き喉声

雄丹

餅背負う子のインスタを爺婆に

雄丹

武者絵のめんこ取りつとられつ

雄丹

憧れの月の大地に名を付けん

雄丹

越にひょうたんホモ・サピエンス

雄丹

ナウ被災地に見知らぬ柿の届きたり

雄丹

汐の満ち引き流木の季

雄丹

この頃は無印良品買い集め

雄丹

居ながらにして望む山焼

雄丹

蓬萊に咲きたる花は散らぬとや

雄丹

今聞こえたはかの呼子鳥

雄丹

令和三年 九月十七日首
令和三年十二月十八日尾

(於・大黒澤苑)

歌仙 『地に伏してなを』

秋山よう子捌

コスモスや地に伏してなを咲く命
 漲る力昇りくる月
 夜学生未来拓かん窓開けて
 はるかに聞こゆジャズフェスの音
 何取りに来たんだつけと猫に問ひ
 すつかり溶けたアイスクリーム
 夏風邪の子に繰り返し桃太郎
 つひ買ひすぎるレトルト食品
 老い知らぬ看板女優恋に生き
 逢瀬はいつも伊豆の某所で
 貸出しの車椅子あり美術館
 里に伝はる御神楽の面
 寒月を見上げ若者ジム通ひ
 投票なんて行つたことなし
 アフガンは脱出できぬ国となる
 鳥の越えゆく白銀の峰
 引退の横綱の背に花吹雪
 鯉五郎追ふおだやかな午後

秋山よう子
 中井淑子
 菅野陽子
 伊能美智子
 鈴木アヤ
 白井暎子
 高月三世子
 野口敏子
 子
 淑
 う
 智
 陽
 映
 ヤ
 敏
 う
 世
 淑

ナオ
 春眠は醒めてもしばしたゆたひて
 誰の仕業かルンバ始動し
 真子さんの愛の行方に姦しく
 曾根崎心中一途道行
 着ぶくれて通勤電車痛勤に
 サンタそろそろ鬚のお手入れ
 僕やつぱり赤がいんだランドセル
 鬼が笑へど変へぬ信念
 ガチャポンのミニ製品が勢揃ひ
 軽石の海何を象徴
 月見れば宇宙旅行につなぐ夢
 木犀の香を缶詰にせん
 ナウ
 師の墓を尋ね寺町そぞろ寒
 酔へば又言ふ捨てし故郷
 役場では空き家対策村起こし
 へのへのもへじ古い落書
 暮れ残る花振り返り振り返り
 卒寿四人の集ひのどかに

ヤ 映 智 敏 う 世 陽 淑 映 ヤ 智 う 世 陽 淑 映 ヤ 敏

令和三年九月 十日首
 令和三年十月二十七日尾 (文音)

歌仙 『合歡咲くや』

大山とし子捌

合歡咲くや待つ人居らぬ停留所

大山とし子

木の椅子よぎる今朝の薫風

長沢矢麻女

初孫のスマホの笑顔可愛くて

根本美茄子

パッチワークの布をあつめる

後藤算子

月の駅絡繰り人形時を告げ

筒井香

干柿吊るす長い軒先

小岩菖蒲

外^ウ国へ友の足取り爽やかに

岩下秋月

シエフを目標せる彼を追いかけて

上条洲紅

時は今告白せよと占い師

高木遥子

新所帯には文鳥も連れ

と

突然の海底火山で島が出来

矢美

忙中無閑間宮林蔵

算

除雪車の整備を終えて月仰ぐ

香

兄弟狐慌て逃げ出す

菖

酔うほどに話の弾む獵仲間

秋

ポロリ教えたへそくりの場所

洲

花万朶大樹の枝の撓むほど

遥

形変えゆく春の綿雲

ナ御開帳善男善女行列し

時折まじる異国の会話

車椅子自由自在にシユート決め

気配りだけで二度の当選

大工方左右に駆ける山車の上

江戸風鈴の音の軽やか

何となく入ったカフェに元カレが

グレイヘアとなりてダンディー

青空に風車ゆるりとまわりいて

ドン・キホーテの近づいてくる

取り寄せの名酒をそろえ月を待つ

森羅万象彩の秋

ナ客足の絶えぬ老舗の走り蕎麦

テレビの取材猫がお相手

ノーベル賞受賞の席に真鍋氏が

連句仲間も円熟の味

朝なさな太極拳を花の下

につこり笑う四方の山々

遥 秋 洲 香 菖 美 算 と 矢 遥 秋 洲 香 菖 美 算 と 矢

令和三年七月八日首
令和四年一月六日尾 (文音)

短歌行 『夏見舞』

五郎丸照子捌

元氣ですと自画像を描く夏見舞
 玻璃の器にかざる向日葵
 大漁に浦の市場はにぎわいて
 オール電化の夢に近づく
 修造の郷社に月の皓と射し
 列なして橋わたる瓜坊
 山姥の誰に盛ろうか笑い茸
 どこで違えし禁断の仲
 いっそバリ逃避行でもしようかと
 心うきうきファッションの街
 花吹雪道行く人の足を止め
 路面電車はかげろうの中

五郎丸照子
 西村ミツ
 中嶋祐子
 林レイ子
 武田タエ子
 照子
 ミツ
 祐子
 レイ子
 タエ子
 照子
 ミツ

ナオ母来る土産に香る蓬餅
 負けるが勝ちと夫婦喧嘩は
 酒酌めば憂さも嫉妬も忘れ去り
 いとこ同士で十八で婚
 躰いたのころころきっかけで
 師走の慰問バンド仲間と
 被災地に鉢鉢の僧月も凍つ
 飯寓いくとせ故郷はるかに
 ナウ空港で偶然久しき友の顔
 コロナ対策消毒をして
 花守りは丹精尽くし次世代へ
 弥生野かけて遊ぶ子供等

祐子
 レイ子
 タエ子
 照子
 ミツ
 照子
 レイ子
 タエ子
 祐子
 ミツ
 祐子
 レイ子

令和三年七月三十日首
 令和三年九月二十八日尾
 (文音)

源心 『もの種を』

狩野康子捌

もの種を蒔く奔放にある祈り
 残雪抱く遠き山々
 語り部を囲む若き等うららかに
 ふつとひと息閉じるメモ帳
 うほろ酔うて行く月の道業平忌
 糸引く指の誘う幻想
 今夜だけ衣紋の抜きを深めにし
 結界の楠に化身ももんが
 天井の染み大将の髻に見え
 スマホがあやす自粛生活
 看護師は九十七歳人気者
 ジャムの混沌纏むペクチン
 みそなわす絵馬のしかじか帰り花
 あれが鴛と愛鳥家指す

狩野康子
 松ノ井洋子
 秋田てる子
 熊坂昌子
 笹川圭子
 長瀧丹
 石橋真紀
 川口陽正
 木田眞智子
 鈴木ゆう子
 小岩秀子
 鹿野恵子
 田中ひろ子
 佐藤千枝子

悩みごとせえので吹き消す誕生日
 逆上がりなら何度でも出来
 がたがたとこの世を揺らすパラ五輪
 パレット広げ夏の色足す
 捕虫網立てかけてある露天風呂
 素行調査の私立探偵
 男気の後姿に味があり
 高倉健の再来と言う
 名月の津軽海峡魚跳ねる
 御朱印求め秋の彼岸会
 ナウ号外は総裁辞任そぞろ寒
 御手洗団子買って帰らん
 知る人ぞ知る筑川の花の土手
 忘れ霜さえ時を違えず

部谷虎落
 高橋玻斗子
 浜田則子
 川村紀子
 山田史子
 高山達雄
 佐々木游子
 佐々木かう
 中村記康
 矢田部弓子
 筒井草平
 葛とく子
 中村孝史
 執筆

半歌仙 『成木責』

成木責する和菓子屋の三代目	松澤龍一
伴奏せんと初鳩の声	高沖和
小鍋にはアゴの煮干しを泳がせて	飯田啓子
いらつしやいませ用意万端	植村義光
滑走路月の光に照らされて	鈴木幸子
コスモスの咲く鉄塔の下	大塚久子
年金はささやかなれど秋の風	水野昌美
七十歳 <small>ななじゅう</small> にして今もダンディ	龍一
マイウエイを歌う姿に恋焦がれ	啓子
最後の仕上げ紅を濃 <small>て</small> いめに	義光
いとし口ひとにはやらぬ方法をさぐる	幸子
スイング上手い森の猿たち	久子
汗拭いワルツを踊るスタジオで	昌美
滝垢離をする炎暑に僧が	高橋宗史
ガンジスに交通安全唱え行く	龍一
右見て左見ても渡らず	執筆
街中の園児の列へ花吹雪	
大関誕生うららうららと	

令和四年一月一日首
令和四年一月二十九日尾
(文音)

(進行役) 松澤龍一

《横浜・横浜ベイサイド連句会》

追悼 松田俊夫丈

短歌行 『うす墨の文』

丹下 誓捌

暮れかねてうす墨の文届きけり
耳を澄ませばあれは頬白
紙風船ひいふうみいよ突きつづけ
野越え山越え海原を越え
葛茂る場末の酒場窓に月
ジャズピアノニストサングラスして
人生をずつとあなたと語りたい
いつしか恋に変はる友情
何ごとも疑問が湧けば広辞苑
几帳面なる流水の来る
花曇斜里も羅白もはるかなり
柵へ追ひ込む若駒の群

高山鄭和
丹下 誓
本屋良子
酒匂道代
鈴木英雄
國司正夫
鈴木 葎
松田ぼくる
松田知子
吉田酔山
秋山よう子
安楽明郎

少年の背番号3誇らしげ
セピア色した古きアルバム
ツアイチエンとタラップ昇る冬の朝
女狐こんと雪に消えゆく
本棚に新美南吉童話集
庭の鈴虫眠りさそうて
満月にふつと浮かびし汝が笑顔
皆中 祝ひ贈る 新米
ナウ師範言ふ弓の奥義は禪に似る
湯沢の宿の熱き泉質
町会の役引き受けて仰ぐ花
万歩計着け陽炎のなか

う 山 知 郎 葎 英 正 良 道 知 誓

令和三年四月 九日首 (文音)
令和三年四月二十六日尾

歌仙 『寿楽荘』

賑やかに寿楽荘まで冬桜
 小春日和の川のせせらぎ
 週末は治水工事を休止して
 アウトレットに県外ナンバー
 煌々と高速道路路月青く
 里芋煮えて囲む食卓
 今年酒憂さを忘れて杯進む
 後ろ姿に見覚えのあり
 僕だけのいつも可愛い片えくぼ
 一割足りぬ君との夜は
 軽石の浮かぶ南の珊瑚礁
 エンゼルフィッシュ行きつ戻りつ
 月の道風鈴の音に誘われて
 選挙前には給付金出る
 焼肉の煙掃き出す換気扇
 保護猫カフェで珈琲を飲む
 花の下フジコ・ヘミング今もお
 天を目指して葱坊主立つ

稲垣渥子捌

武藤美恵子

田中イスズ

近藤とみ子

板倉 合

宇井 希

森田美耶子

松井文子

原田徹 夫

と 徹

耶

子

稲垣渥

子

と

文

徹

希

ナオ
 風光る帰還カプセル着水す
 謎を残しつつコロナ激減
 大リーグ MVP に二刀流
 政治の話ご法度にして

高層の硝子の壁に夕焼雲

ウーバーイーツ恋の配達

乳がんを不倫相手にみつけれ

雪はしんしん宿は鎮まり

山裾の鐘は湖面に凍てついて

スマホ頼りの日々の危うし

その内に誰も彼もが月旅行

金柑の浮くはちみつの瓶

ナウ
 不揃いの菊の溢れる村の墓地

故郷遠く家を手放す

混じる音習い始めたハーモニカ

お澄まししてる雛壇の前

花衣着替えて主婦の顔になる

衆目集め初虹の出る

合

イ

と

と

徹

恵

耶

文

合

耶

文

希

と

文

希

徹

令和三年十一月十八日首
 令和三年十二月十六日尾

(於・寿楽荘・竜神交流館)

《仙台・連句会ひらめき》

胡蝶 『少年期』

鹿野恵子捌

どんぐりや瀬瀬の彼方に少年期

鹿野恵子

唇月へ向け口笛を吹く

田中ひろこ

織り上げし新絹棚をつやめかせ

小岩秀子

取り寄せの茶を客にふるまう

鈴木ゆう子

フレームにこだわり見せる伊達眼鏡

木田眞智子

触角伸ばし急ぐででむし

〃

富士登山一家は宙と交信す

恵子

マスク越しなる言葉あやうき

ひろこ

知らぬ間に無駄に消えゆく保管料

ゆう子

非常食からほら金平糖

ひろこ

きびしさに愛ある講話寂聴尼

秀子

品匂いたつ浄法寺塗

眞智子

鉄亜鈴うすら埃へ月は凍つ

〃

編む冬帽子友とおそろい

秀子

OUI・NONはあやふやのまま睨閉ず

恵子

女押し込む小笠欲しがり

眞智子

宦官の薄き笑いの新煙草

ひろこ

陵の丘わたる雁の音

ゆう子

今年酒立ち飲みもまた乙なもの
看板猫の足にまつわる
檜の香満つ鈍屑アート展
時計回りに進む人々
川下り舟にて受けん花吹雪
ラジオ体操背ナに初虹

秀子
恵子
眞智子
ひろこ
ゆう子
秀子

令和三年十月十三日首尾

(於・パル長町)

二十韻 『涅槃西風』

伊藤 航 捌

涅槃西風コロナと如何に折り合うや
 ひとり遊びに選ぶ物種
 利茶会雅語もまじえて述べるらん
 寄席の座布団厚い紫
 月まろし石焼芋の笛の音
 悴む手取り君へ息吹く
 初かつた吊り橋効果銀婚へ
 人に野山に久々の雨
 仰ぎ見る大仏様の目に涙
 麒麟を呼ぶは光秀の夢

伊藤 航 子
 笹川圭 子
 安齋厚 子
 井上せ つ
 笹本美 恵
 佐々木拓 子
 渋谷久 恵
 美 拓 圭 恵

夏怒濤サーファー冥利子と共に
 浴衣の逢瀬影が繋がり
 髪結いの亭主よけれど今は主夫
 さやかロンドン道ならぬ恋
 尖塔の先に震える細き月
 擁壁覆う蔦紅葉燃ゆ
 ナウ気付かぬが渡る世間に溢る笑み
 飲み放題は順に端から
 読み止しの本に一輪花葉
 蜜得て蝶はダンス軽やか

久 せ 厚 航 拓 圭 美 厚 せ 久

令和三年三月二十六日首
 令和三年四月二十六日尾
 (文音)

個人作品

グループを越えた交流が盛んな昨今、せっかくのよい作品を埋もれさせないためにも個人から投稿して頂く企画です。日本連句協会会員として、一人一篇のご出稿を掲載いたします。まだ、会員資格を取得されていない方は、ご入会の手続きをお願いいたします。たくさんのご出稿をお待ちいたしております。詳しい応募方法は日本連句協会報（10月と12月）にご案内いたします。

《個人作品》

二十韻 『クリムトの金』

梅村光明捌

春陰やクリムトの金燦然と
 光と風を纏ふ恭悦
 お喋りな親猫膝に侍らせて
 じわりじわりとメ切がくる
 ッ月齡の欠けも進みて更衣
 しつぽり濡れる夜のさみだれ
 なにもかも忘れたふりで抱き合ふ
 騙し絵のごと流れゆく恋
 人生の針路を糺す羅針盤
 個性豊かな神集ひたる

星野 焱
 赤坂恒子
 梅村光明
 恒子 焱
 恒子 焱
 恒子 焱
 恒子 焱
 恒子 焱
 恒子 焱
 恒子 焱

ナオ七転び八起の後のポーナスよ
 紅茶に少し落とすスコッチ
 権妻に惚れた弱みを握られて
 次の旅行は秋の仏蘭西
 尖塔が繋ぎ止めてる望の月
 雲居の雁の形崩れん
 ナウ幼等の書道教室おほわらは
 洗濯物が躍るペランダ
 創業は安土桃山花の宿
 琴も流るる曲水の宴

恒子 焱
 恒子 焱

令和三年三月十二日首
 令和三年四月 八日尾
 (ひねもす連句会・文音)

《個人作品》

歌仙 『星のなき夜』

大久保風子捌

星のなき夜や沈丁香り立ち

半田有子

明日卒業の答辞練習

大久保風子

春深む馴れない酒に頬染めて

石田耕庵

パンをちぎつて鳥寄せの餌

山中主水

お宝は月が螺鈿の硯箱

秀島一生

糸瓜の孤独わかる気がする

井田瑞亭

ウラリモートで句を繋ぎ合ひ瀬祭忌

風亭

時差もものは熱き想ひを

杜水

エンジェルもフランシーヌも周庭も

杜水

原発廃炉いつか歴史に

庵生

生みたての卵の黄身の盛り上がり

亭生

蘭鑄二尾とてもはや家人で

杜生

浴衣からこぼれそうなる胸に月

杜風

他を見るなよ俺だけを見よ

庵水

やつと来たワクチン接種子約混み

亭生

秘伝のソース二度漬けアカン

杜風

はからずも残花に出合ふ山歩き

亭生

蒟蒻植うる微風また良し

生亭

ナオ霞立つ夕暮れの中孕馬

子育て托し叫ぶ鳥あり

巡航は3度かしくもちようどいい

銀河系から飛び出した夢

お釈迦様の掌泳ぎあつぶあぶ

『大つごもり』のお峰の決心

こないだのカフェでおしゃべり日脚伸ぶ

切符片手にカバンよつこら

駆け落ちの夫の頭あがらない

堕ちに堕ちても天翔る如

月高く峰それぞれに背伸びして

ちちろ鈴虫競ひ合ふ里

ナウ友のありドサリと届く今年米

眼鏡店から誕生日カード

日の出から日没までを観る暇

白色申告なんもせんとて

花盛り時は来たれり九段坂

紙風船のかるい衝撃

庵亭生風杜水亭生風庵亭水杜風生亭庵

令和三年三月二十六日首 (遅刻坂連句会・文音)
令和三年六月十五日尾

《個人作品》

歌仙 『立冬や』

大山とし子捌

立冬や遙かな富士を確かむる

大山とし子

終の香の灰と庭先

井上千秋

読書家の学生ちらと振り向いて

深山 董

講演会の予定確かむ

相馬マサ子

月今宵愛犬連れて何処までも

森 譜稀子

花野を過ぎる風のささやき

と

村長が遊女の役の村芝居

千

ふるまひ酒を一緒に飲みて

董

いいムード待っているかもプロポーズ

マ

イミテーションの指輪ポツケに

譜

莊嚴とパイプオルガン流れたる

と

歌を忘れた籠の金糸雀

千

昼寝から覚めて故郷思ひ出す

董

大棧橋に月の涼しく

マ

迫り来る地球温暖化の脅威

譜

ワクチン接種三度目となる

と

連れ立ちて花咲き初むる児童館

千

中二階から蚕這ひ出す

董

ナオしやほん玉幼の靴のあべこべに

太巻切れればお顔の模様

愛らしき双子パンダに見入りたる

思ひ出多き不忍池

走り込み一緒にめざすスキーヤー

冬夕焼けの深き色合

エアメールマウイ島から潮の香を

破天荒なる白秋の恋

いつからか焼け棒杵に火がついて

やつぱりいいね氣に入りの皿

月祭る姉の手作り団子添へ

大和の古寺を繋ぐ虫の音

ナウ肌寒の在来線に乗り継いで

小石を蹴つてあした占ふ

振り向けば飛びゆく鳥はV字形

切り株に座し森の声聴く

花堤名を変へ川は合流す

世界平和を祈る春虹

執

マ 譜 千 董 馬 譜 千 董 馬 譜 千 董 馬 譜 千 董 筆

令和三年十一月二十三日首
令和四年 二月二十四日尾 (文音)

《個人作品》

表合せ十句 『花びらおどる』

岡本貞子捌

満開に花びらおどる桜かな 髭白 暁 (小)

彩りも良い 菜飯 弁当 岡本貞子

山笑う電車も笑うカオ笑う 髭白 薫 (年長)

慣れぬネクタイ気持ち新たに 富樫明子

湖にぼつかり浮かぶお月様 富樫玉青 (小五)

寝袋で聴く鈴虫の声 貞 暁

年籠もり戦いの地の便り待つ 貞

太陽の下決めるトリック 富樫昊太郎 (中)

宿題と二つ並んだソーダ水 髭白良子

ユーミン流るカフェの店先 岡本海太郎

令和四年四月六日満尾

(於・岡本宅)

《個人作品》

百韻 『むほとせの賀』

裾野市宗祇法師の会

勝又丘女捌

中村雄介

櫻井讓

高村謙二

鳥澤由克

小林静司

宮澤次男

近藤蕉肝

本屋良子

桃井昭一

川畑政二

堀井弘由

土屋日菜

井上輝夫

勝又丘女

賀茂博美

名波秀夫

水野森雄

室伏満晴

教会に若き牧師が赴任する

石畳では犬もシエスタ

花嫁の支度ととのへ南風吹く

ジャスマインの香をまとふ胸元

^{ニオ}太古より海の恵みの豊かさに

穀割り出づるテイラノサウルス

減量後ボクサー肉に鬩り付き

園児らんらん草青む道

一番茶先づ神棚にお供へし

蛙張り付く朝のガラス戸

廃校にベンチャー企業集まりて

ミニスカートで女性たくまし

狙ひ撃ち振り向きざまに投げキッス

聖樹の星に隠す恋文

寒稽古気合鋭き声響き

温泉街で射的興ずる

夏の霜コーヒールンバウきうきと

右に左に踊る噴水

^{ニッ}なで肩の鬼も交りて遊園地

観覧車よりパリの夕景

似顔絵師吾と色紙を睨むごと

黒招き猫魔除け厄除け

羽衣を枝に纏ひし浜の松

平澤千恵

宮原うた子

鴻巣洋子

輝子

博

晴

森

丘

秀

菜

う

博

晴

森

輝

秀

丘

う

菜

晴

博

輝

ブ ロ ッ ク 塀 に 雀 一 列
浮世絵にスカイツリーの描かれて
街を見下ろし愛車駆る夢
漱石の本を枕に良夜なる
ピアノの曲と揺れる秋灯
うそ寒の巨利に子等は和歌学び
時代アニメに刃使ひ手
旅枕夢の行方を見届けむ
大 宗 匠 の 偉 業 称 へ て
空青く霊峰富士の泰然と
香気誘はれ迷ふ蜜蜂
囁やけばひとひら花を散らしくれ
友 垣 集 ぶ 宴 に 春 光

小林宗

菜 匠 博 森 秀 丘 輝 晴 森 う 秀 菜 丘

令和二年九月 十五日首
令和三年一月二十六日尾
(文音)

《個人作品》

二十韻 『鯖寿司を』

木戸ミサ捌

鯖寿司を抱き駆け込む列車かな
 ひだり潮騒みぎに向日葵
 聞き覚えあるメロデイの流れきて
 みんなバッグを探る着信
 真夜中の月は古道の闇照らし
 きみを突けば匂ふまるめる
 惚れたなら猪となり猛進す
 シュトゥルムウントドラングのとき
 悪魔との契約書には署名せず
 散歩帰りに発泡酒買ふ

木戸ミサ
 瀧村小奈生
 ミサ
 小奈生
 ミサ
 小奈生
 ミサ
 小奈生
 ミサ
 小奈生

ナオ雪の玉投げて甥つ子姪つ子も
 凍月の影とまるさざ波
 ゴンドラは迷路の中をゆつたりと
 寺院の裏で決闘沙汰か
 燃えやすき恋は墓場の近きゆゑ
 嫁ぎ先には猫が八匹
 ナウ命名はクサイ(と)とばしてオミクロン(ル)
 朝寝して見る合格の夢
 敷島の大和に花の降りしきり
 草餅分かつ幼なじみと

小奈生
 〃
 ミサ
 〃
 小奈生
 ミサ
 小奈生
 ミサ
 小奈生
 ミサ

注① シュトゥルムウントドラング

十八世紀後半にドイツでみられた革新的な文学運動

注② クサイ ギリシャ文字第十四字母

注③ オミクロン ギリシャ文字第十五字母

令和三年十一月二十三日首 (文音)
 令和三年十一月三十日尾

《個人作品》

半歌仙 『夕 薄 暑』

木之下みなみ捌

うす味の 大皿小皿夕薄暑	木之下みなみ
若葉の 香る縁側の卓	もりともこ
宿泊の ネット予約を早々に	赤澤水魚
ペイペイ 払い親の送金	ともこ
名月の都市の 静寂にひっそりと	水魚
紙の音立 飛蝗跳び来る	みなみ
賑わえる 芸術祭の裏舞台	上野知子
霞が 関の減らぬ談合	水魚
元彼を 削除できずに指震え	知子
エルメスの バッグ気前よく捨て	ともこ
シミュレート 愛の告白何度でも	水魚
陰陽師 とて宝くじ買う	ともこ
熱爛に 夢は理想の一軒家	水魚
樹氷林 綺羅浮かぶ月下に	知子
修行僧 釈迦の悟りを追い求め	水魚
遺跡 発掘隣の村で	知子
願わくば 皆平安に花満ちて	ともこ
ふらここで 衝く日本の空	執筆

令和三年六月六日首尾

(於・リモート)

《個人作品》

短歌行 『翡翠』

(南さつま連句会) 五郎丸照子捌

翡翠の水切り渡る向こう岸 西村ミツ
 一陣の風に山法師舞う 林レイ子
 厨よりシホンケーキの香りして 五郎丸照子
 兄弟げんかすぐに収まり 秋野百草
 古の合戦場に今日の月 永濱瑞穂
 菊人形の義経の立つ ミツ
 丹の鳥居くぐればあきつ付いてくる レイ子
 憂いを帯びた君の気になり 照子
 惚れ癖はDNAのなせる業 百草
 種包みおり農事新聞 瑞穂
 花のもと友は黄泉へと旅立ちぬ ミツ
 形見の硯使う春宵 レイ子

ナオはだれ雪高層ビル街はらはらと
 エコな買い物バルクショップで
 裂織の機ばったんと響く音
 出て行った彼これで終わりね
 記憶ごとメルカリにだしちよつと泣き
 首をかしげる犬の白息
 凍月の粒子を冠る修行僧
 初のオリパラ心待ちにし
 ナウ久しぶり父と枡酒酌み合って
 人待顔の路地の手相見
 花盛り瓦門なる武家屋敷
 殿様蛙ひよいと飛び出す

照子
百草
瑞穂
ミツ
レイ子
照子
百草

令和三年七月三十日首 (文意)
令和三年九月二十日尾

《個人作品》

歌仙 『ポケットに』

佐々木リサ捌

ポケットに異国のコイン木の葉舞ふ

佐々木リサ

久闊を叙し囲む河豚鍋

中島方堂

初孫に我の一字付けられて

井上千代子

キルト繋ぎて作る壁掛

鶴岡育枝

喧噪のネオンの彼方月上る

早田維紀子

色無き風に香るコーヒー

リ

菅笠の破れあちこち秋遍路

方

挙動不審のあの人は誰

千

筋トレのコーチの笑顔眩しすぎ

育

波に漂ふやうな片恋

維

読み返す度に酸っぱき青春記

リ

古き絵巻の庶民生き生き

方

夏負けに漢方薬がよく効くと

千

巴里祭祝ひ月に乾杯

育

恐竜の化石探しのツアーなり

維

鑑定団があつと驚く

リ

西行の庵は花に埋れをり

方

養生訓を復習ふ麗日

千

ナオ馬の子の母追ふ姿頼もしく
生命線に細き傷跡
戦無き世を存へて不慮の事故
AI技術進歩どこまで

梟の声を近くに峠道

黒川能は夜を徹して

雄弁なキャリアウーマン書も上手く

賞総嘗めの彼の二刀流

好きですと名前の知らぬメール来る

悪女装ふ紅き唇

月円かピサの斜塔の長き影

そぞろ寒きはオミクロン株

ナウ新政府霧を分けてはすべり出す

錦の御旗あたりを払ふ

名曲に耳を預けて鄙の宿

パイプ燻らす祖父の面影

遠山は雲を被きて花筵

釣糸垂るる堀の長閑さ

執
筆 維 育 千 方 維 千 育 方 維 育 千 方 維 育

令和三年十一月 五日首
令和三年十二月二十五日尾 (文音)

《個人作品》

二十韻 『ホールインワン』

瀧村小奈生捌

初夏のホールインワン証明書 二村典子
 蜘蛛の糸吹くりピングの壁 瀧村小奈生
 深々と空に両手を潜らせて なかはられいこ
 芝生の上に自転車を駐め 典
 行き先はどことなくどこ月今宵 奈
 長き夜に読む長き恋文 典
 草の実を背中いっばい二人して 典
 川を渡れば止まるしゃっくり 奈
 ぼっちゃりとたつぷりがいる昼の酒 典
 旧街道のユースホステル 典

ナオ
 気恥ずかしそうに歳末たすけあい 典
 三日月の先氷柱したたる 典
 ユーラシア大陸雑貨店休業 典
 出口調査はタッチパネルで 典
 俳優と女優夫妻の秋田犬 典
 墓も一緒でかまいませんか 典
 ナウ
 宅配便直射日光避けて置く 典
 糸遊ごしに見えるバス停 典
 風強きときは密なる花筵 典
 かたびら雪のとける掌 典

令和三年五月二日首尾

(於・有松・庄九郎)

《個人作品》

歌仙 『点描として』

服部秋扇（解纜・赤のまま所属）捌

たましひの点描として螢かな
 青の世界に暮る、短夜
 長考の棋士の背中に隙すきもなし
 4 K テレ ビ 見 入 る 若 者
 菊花展小輪揺れて香る風
 観覧車には月と私と
 新酒ウいまフルーティなる仕上りに
 益子焼には塩結び盛る
 逞しい人より優しい人が好き
 口説き上手の甘やかな毘
 海外の旅行こつそり目論んで
 仕事せかる、サンタクロース
 凍てし身にペチカ・ウォッカ・バラライカ
 原野よこぎる狼の群
 遠吠えと言はせぬ我等デモ行進
 珈琲を挽き思考めぐらす
 何処より芝に花びら月おぼろ
 蝶も出で舞ふ杜のしづけさ

服部秋扇
 本屋良子
 中岡実来
 山本秀夫
 篠原輪菊
 永禮未鬼
 吉田もえ
 秋扇
 実来
 秀夫
 輪菊
 未鬼
 もえ
 実来
 秀夫
 秋扇
 輪菊

ナオ
 アルプスの岩壁が呼ぶ夏隣
 ママ友集ひ野外炊飯
 難民の子の眸つぶらに瘦せた四肢
 神に祈りて年々の寄付
 賽銭もスマホかざしてキャツシユレス
 君に遭へるか行かう電車で
 黙ふかき少女の恋はいま羽化し
 薄紅葉する里の山々
 後の月郷土史たどり執筆中
 囃籠から声が微かに
 補助線を引けば異次元フリーダム
 世界を円で示す曼荼羅
 ナウ
 正装の裳裾うつくし御代の春
 彩の干菓子ナウは和紙の小箱に
 爺さまは竹刀素振りナウを日課とし
 ベダル軽やか進級の児等
 祝福のシャワーのやうに花降ナウりぬ
 宅配便で届く西洋独活ナウ

未鬼
 もえ
 実来
 秀夫
 輪菊
 秋扇
 未鬼
 秀夫
 実来
 もえ
 秋扇
 未鬼
 輪菊
 秀夫
 実来
 未鬼
 輪菊

令和元年六月 五日首
 令和元年十月二十七日尾（文音）

《個人作品》

十二支行 『雨』

師』

解纜所屬 越村清良捌

潮騒に小貝めざめる雲の峰子西川菜帆
 行水すればやつてくる雨師丑越村清良
 活劇のロケ盛り上げるエキストラ寅服部秋扇
 王の名さやか堯舜と禹卯江下緋紗
 望月の大きく上がる丘に立つ辰辰清良
 跳びついてくる飛蝗・草の実巳菜帆
 おもてなし多国籍語の広洋間午緋紗
 酌めど逢へずにしぐれ恋未秋扇
 マリリンも河の流れも帰らざる申申緋紗
 かたびら雪に傘のとりどり酉佐久間鶴舟
 花筏行く末見ずに人の去ぬ戌清良
 藩邸址の春の車井亥秋扇

*雨師 雨の神

令和元年六月二十日首尾

(於・セッション杉並)

《個人作品》

二十韻 『手にする盃』

林 転石捌

瀬祭忌手にする盃を新しく
 氷頭の鱈をめいめいに分け
 プレパレート透かしてのぞく月の夜
 最終電車時間通りに
 神官と隣り合わせの修道女
 夢の中なら叶ふ再会
 宝くじ新所帯への資金へと
 猫の右脚招く幸福
 ズック靴玉砂利を踏む七五三
 C M ソング歌う風邪声

林 転石
 佐々木有子
 鈴木千恵子
 武井敦子
 千 有 敦 千 敦 千 敦 千

ナイ即席めん世に登場し半世紀
 鯉は喰ひつくどんなものでも
 生類は愛別離苦の修羅ならん
 あの女こそ躓きの石
 心太するりと喉を通る月
 土用見舞にもらふ絵葉書
 ナウ幼子の発想枠をのみだして
 鳥雲に入りあてどなき空
 妖精の飛び交ひて舞ふ花の枝
 水平にまでふらここを漕ぐ

執 筆
 千 有 敦 千 有 敦 千 有

令和三年九月十八日首尾

(於・高田馬場元氣館)

《個人作品》

半歌仙 『重低音のひびき』

平井繁樹捌

雨蛙重低音のひびきかな
色さまざまに匂ふ紫陽花
おつかひの吾子の帰りを待ちわびて
スマホでチェック明日のお天気
月愛でて果ては宇宙の話など
古酒一口でほろ酔ひの態
結願の杖を納めて秋遍路
恋の行く末カード占ひ
あの人に打ち明けられぬ胸の内
小さな村の選挙過熱し
愛犬はチャイムの度にお出迎へ
山くろぐるると訝ゆる月光
あかぎれの手に筆とるも世渡りと
寅さんいつも振り鉢巻
旅先で駅弁食べる楽しさよ
ちらりほらりと磯菜摘む影
コロナ禍を吹き飛ばさんと花舞ひて
夢を託して仰ぐ初虹

平井繁樹
名本敦子
高木幸恵
山岡良春
升田佐栄子
杉前いと子
敦子
良春
幸恵
繁樹
佐栄子
いと子
良春
幸恵
いと子
敦子
繁樹
佐栄子

令和三年七月十七日首
令和三年八月 七日尾

(於・松山市民会館・文音)

《個人作品》

万華鏡 『左手のための』

福永千晴捌

諸葛菜活ける主人の意地
スーダララッタと海雲の処世術
山笑ふと謂へど街黙す
竹槍突けば割烹着の跽踞ふ

扇 夕 柚 帆

左手のためのエチュード茨咲く

福永千晴

アイスクリームとろけだす皿

渡辺 柚

甲板に草莽の志士たむろして

服部秋 扇

脱炭素化をめざす潮流

小松知 二

月よりの風にそよげり松の原

越村清 良

梢に靡く霧の羽衣

西川菜 帆

ランウェイに美を競ひたるそぞろ寒

西田荷 夕

ブーケ抱へてノックするひと

晴 扇

磔刑のキリストのごと恋に瘦せ

江下緋 紗

外した指輪これで三度目

夕 柚

ひともとの凜と天向く枯はちす

馳の遁走 囁ふ弦月

Rockerも止まり木に居るステーキ店

佐久間鶴 舟

スコッチハイで束の間の夢

鈴木美奈子 二

世を変へる鉄砲伝来種子島

重力圏抜け出すロケット

良 扇 奈 晴 柚 帆

両界曼荼羅にさくら吹雪く朝

晴 帆

令和三年八月 六日首 (文音)
令和三年八月二十七日尾
(万華鏡 非懷紙 自由律の聯あり 一花三月 植物多出)

《個人作品》

二十韻 『君行くや』

吉田酔山捌

君行くやミモザ溢れる淡き午後
 窓を開ければ雪残る山
 自販機が子持雀の住処にて
 姿を変えてはやる銭湯
 天瓜粉だらけのお尻笑う月
 薩摩おごじよと焼酎に惚れ
 新妻は三步下がって影踏まず
 コロナ感染防止対策
 盲導犬オフィスの中で大人しく
 いたずら好きな幼姉弟

大西朝子
吉田酔山

山朝山朝山朝山朝山朝山朝山

同僚に賞与の額は内緒にし
 里の寒独活届く宅配
 ぎこちなき筆の文字にも味があり
 白くたおやか鰯割く指
 月の夜に抱かれた方の骨を抱き
 時代祭へ胸がワクワク
 ナウドローンにカメラしつかり取り付けて
 豪華客船湾に停泊
 花いくつ迷い込んだか薪能
 春の夢見る小さき揺籠

山朝山朝山朝山朝山朝山朝山

令和三年三月五日首
令和三年四月三日尾
(文音)

学生の作品

小・中・高・大学の授業や地域のイベントでの連句作品を掲載しました。「付けと転じの連句の座」のおもしろさを披露するものです。

若いころの連句の経験は、言葉の魅力、「座の文芸」の魅力が人生の糧となつて幅を広げていくことに間違いありません。たとえ社会人になつていっとき中断したとしても連句経験の抽斗はすぐに引きだせます。

ご指導にあたる先生方にもご理解をいただき、全国に連句が盛んに伝播することを期待します。

《小学生・徳島》夏休み子ども連句教室

半歌仙 『心』とこゝろてん
『太』

心太人生はじめてつるつるよ
椋本ひまり

ついうっかりと汗ですべて
〃

りよかんでほかたぐちやぐちや気にしない
〃

計算問題糸がからまる
〃

ブルーベリーとつたらおちるゆかしたに
津嘉山正 泰

まんまるの月うさぎどこかな
ひまり

裏パンキン食べたからおなかシンデレラ
〃

とのさまばったてでつかまえた
椋本みのり

母を見るいつもえ顔で大好きよ
ひまり

水にもぐってじゃんけんをする
正 泰

ドライブでとしよかんまではちかかった
〃

とりのとびかたしらべてみよう
〃

かいだんをジャンプでおりにふゆの月
みのり

ゆきがっせんはめっちゃたのしい
正 泰

馬かけるメリーゴーランド遊園地
ひまり

みつばちとまるわたしのあたま
みのり

花の門通りて祖母と祖父のはか
ひまり

はるのうみべになみがびかびか
正泰 みのり ひまり

夏休み子ども連句教室

令和三年七月二十八日～三十日

(於・徳島城博物館和室)

出席者 川上心 愛 千松小学校二年

☆津嘉山照代 八万小学校二年

☆津嘉山正泰 八万幼稚園年長

☆椋本ひまり 津田小学校三年

☆椋本みのり 津田小学校一年

太田彩 生 鳴門教育大学附属小学校五年

濱口愛依凜 千松小学校二年

☆印は三日間出席

指導者 徳島県連句協会(子ども連句実行委員)

竹内 菊 関真由子 東條士郎 早見敏子

二橋満璃 三輪 和 洛中落胡

半歌仙 『ブルーハワイ』

かきごおりブルーハワイはつめたいな
 おばあちゃんちでプールしながら
 ぐるぐるとおにわでまわるじてんしゃで
 はたけはみどりやさしいいろいろ
 お月見でおだんご作りわすれたよ
 きのかげたくさんきのこみつけた
 裏もりのなかもみじだらけで歩けない
 たんすたおしてあかちゃんあぶない
 お母さん家のそうじは楽しいの
 いつもわらってげんきはつらつ
 こころちゃんおおなわとんだ100かいも
 あしがもつれて歩けなさそう
 さむい月シチューごはんであったまる
 スケートじょうがみちにできたよ
 弟と鬼ごっこしたらケガをした
 あおいそらにははるがいっぱい
 花がさくみんなお花見ねこもきた
 こうさがとんで山がくもった

棟本みのり
 津嘉山照代
 みのり
 照代
 みのり
 照代
 みのり
 濱口愛依凜
 照代
 愛依凜
 川上心愛
 照代
 愛依凜
 心愛
 照代

（あとがきより抜粋）

昨年は、新型コロナウイルスが心配されるため、この「子ども連句教室」も中止いたしました。今年も、感染対策を講じながら実施することにいたしました。（中略）

二日目の開始のときは二人でしたが、あとから、プールの行事を終えた二人が駆けつけてくれました。まだ髪が水で濡れている状態で、楽しいから、急いで来たと言ってくれたのは感動的でした。

対象は小中学生としてありましたが、小学校の低学年が主流となりました。高学年になるにつれ、夏休みといっても、しなければならぬスケジュールが詰まっていることが想像されま

す。一日目は俳句づくりから始めました。ほとんどの子が初めての経験でしたが少しヒントを与えると、どんどん言葉が生まれてくるのが新鮮でした。

二日目は七七の短句を作り、前の五七五に続けると、短歌の形式になることを知らせました。なぜ五なの、なぜ七なの、という質問には、たじたじとなりました。大人からは絶対出てこない質問です。

五七五（長句）と七七（短句）を交互に列ねていく「連句」の基本をここで示しました。

三日目は、前日に作ったものを半歌仙に仕立てました。

連句の式目も規則もほとんど触れることはできませんでしたが、それはそれでいいと思っています。前の句から受けたイメージから連想し、心の中に生まれた思いを言葉に紡いでいく楽しさに、少しでも興味を持ってもらうことができたと思負しています。子どもたちの心に芽生えた詩心が、いつかは大きく成長することを期待しています。

（東條士郎）

《小・中学生》国民文化祭わかやま2021

ジュニアの部応募作品より

表合せ六句 『二が日』

長野県 鈴木千恵子指導

はがき持ちポストに通う三が日 村上鉄太郎

ポッケの左右入れる年玉 村上麟太郎

こち亀がずらりと並ぶ本棚に

猫の足跡 続く裏庭

ソーダ水月といっしょに一気飲み

汗のにおいはクラスのおい

令和三年一月十七日首尾 (於・Zoom)

三つ物 『雨がふり』

和歌山県 花尻時季

雨が降り桜まいちり春終り 時季

夏が近づくはんそでの汗

友達と遊んでからのかき氷

令和三年五月十九日首尾 (於・朝来小学校)

三つ物 『檸檬』

奈良県 速水俊行

吹き抜けて肌をくすぐる檸檬かな 森田舞依華

「どこだったか」と見る朧月 佐藤 舞

霧白し帽子押さえて風を追い 前川陽菜香

令和三年五月十二日首
令和三年五月十三日尾

(於・五條東中学校)

三つ物 『会えたらいいな』

福岡県 石川こはる

今年はね会えたらいいな楽しいな 石川こはる

ばあばおかしっぱいありがと こうたろう

わかやま県とけかけてるよゆきだるま こはる

令和三年五月九日首尾 (於・石川宅)

三つ物 『入学し』

和歌山県 深見陽夏

入学し人も桜もいわつてる 深見陽夏

たんぼぼつくし春の背くらべ 〃

夕方に歩いていけば川そまる 〃

令和三年五月十四日首尾 (於・市ノ瀬小学校)

三つ物 『外見れば』

和歌山県 榎木煌季

外見れば桜満開きれいだな 榎木煌季

町のみんなも喜んでゐる 〃

春休みみんなで会おうその日まで 〃

令和三年五月十九日首尾 (於・朝来小学校)

三つ物 『春の朝』

和歌山県 萬歳萌々香

春の朝雪解けの水残りけり 萬歳萌々香

桜まい散る桜ふぶき 〃

バスへ乗りみんなでいこう遠足へ 〃

令和三年五月十四日首尾 (於・市ノ瀬小学校)

三つ物 『帰り道』

和歌山県 鈴木隼音

帰り道土手に生えてるつくしの子 鈴木隼音

ニヨッキニヨッキと頭を出して 〃

マイク持ち仲間と共に大合唱 〃

令和三年五月十九日首尾 (於・朝来小学校)

三つ物 『がんばれば』

和歌山県 上村力也

がんばればきれいな桜みれるかな 上村力也

きんちようしてなにも見えない 〃

この試合ゴールキーパーがんばるぞ 〃

令和三年五月十九日首尾 (於・朝来小学校)

三つ物 『春の朝』

和歌山県 谷口大虎

春の朝タケノコほりに行きました 谷口大虎

どうぎようしゃがたくさんいたよ 〃

したを見たらつくしのたいぐんみつけたよ 〃

令和三年五月十四日首尾 (於・市ノ瀬小学校)

三つ物 『六年の』

和歌山県 菅根明依

六年のスポーツテストで
菅根明 依

れんきゅうあけでちょうしあがらず
がんばってさいごのタイムしんきろく
〃 〃

令和三年五月十九日首尾 (於・朝来小学校)

三つ物 『春がすみ』

和歌山県 柴田悠衣

春かすみ山のゆうやけかさなりて
柴田悠衣

うつくしい色一目見ただけ
赤色は山にとけこみなくなりる
〃 〃

令和三年五月十九日首尾 (於・朝来小学校)

三つ物 『生き物が』

和歌山県 坂本知優

生き物がたくさん生まれあめがふり
坂本知優

みどりが増える冬とのくぎり
あたたかく春を感じるときがある
〃 〃

令和三年五月十九日首尾 (於・朝来小学校)

表合せ 『星のつどひ』

棚町未悠捌

星のつどひ時またなくに明けにけり
月に見立てる都まんじう
地芝居に教授天狗も現れて
俳女訪ねて歩む街道
浅川の水満ちてゆく田植歌
素足で遊ぶ笑顔まぶしく
シルク織る姫に手鏡送りたる
花の便りに「かしこ」ひと言
風光る桑の都の一里塚
囀を聞く山のキャンパス

星布 小鳥子 未悠 貴雄 喜雨 香風 未悠 喜雨 貴雄 香風

表合せ 『天の川』

平林香織捌

天の川終は野末の流れかな
月の舟に乗る王子八人
秋の声かそけく残りすれ違ふ
いてふ並木をコーギーと行く
水羊羹コレール皿の影となる
四人姉妹の浴衣おそろひ

星布 麗香 莉菜 謳歌 輝

令和四年五月七日首尾

(於・都プロジェクト・星布の足跡吟行会
町家カフェ金多屋)

表合せ 『星の手向け』

棚町未悠捌

旅人の背中を星の手向けかな
機窓から見る月は間近に
滝山城銀杏紅葉の夢の跡
都まんじゅうポトつと落とす
セラミックタイルを迷う女王蟻
前途多難を創る神の子
一里塚花街道のシユリーマン
絹の大地に揺れる陽炎

喜雨
未悠
蓮
宮井
謳歌
錦川
ハンナ
執筆

表合せ 『星のちぎり』

平林香織捌

星のちぎり秋のまことを見するかな
みたらしだんご月の土産に
高尾さん望むいちようの涼やかさ
小枝えだの小瑠璃宝石の歌
琉金に恋の涙のきらめいて
ハンカチーフの絹の想い出
アルバイトバイクに花の古本屋
肥沼医師の石碑麗か

星布尼
莉菜
紫苑
小鳥子
紫苑
幸峰
友歌
貴雄

令和四年五月二十八日首尾

(於・都プロジェクト・星布の足跡吟行会)

ハルス八王子

《大学生・富山》富山大学
共通教育科目「日本文学」

表合せ六句 『自転車で』

自転車で手袋買いに空しずか
クリスマスツリー街のきらめき
窓覗きにこりと笑う横顔に
いとしのルンバ近づいてくる
初花はイチロー選手と見てみたい
学校帰り 仰ぐ 春 虹

中村友 哉
唐澤カ カ
山田 雨
小西和比古
今井投 佳
中瀬泰 輝

表合せ六句 『手袋買いに』

自転車で手袋買いに空しずか
クリスマスツリー街のきらめき
窓覗きにこりと笑う横顔に
ゲームで勝って得意げな君
花の波瀾れることの心地良さ
ご覧暮れかぬる日の行方を

中村友 哉
唐澤カ カ
山田 雨
吉田ひ な
小林萌 黄
谷口寿 一

令和三年十二月 七日首
令和四年 一月十八日尾
(於・富山大学五福キャンパス)

オン座六句 『猿腕』

浅沼 璞捌

体育祭猿腕かぞふれば終はる

金井百 香

組体操のとまる 昼月

曳尾庵 璞

リビングにトランプタワー積み上がり

日比谷虚 俊

専業主夫の運勢をみる

百 香

宝石で商ひをするベレー帽

虚 俊

墨出でぬまで洗ふ毛筆

虚 俊

大学の汚職くをすつば抜き

百 香

ガバナンス改革を進めん

虚 俊

茶室にも多く飛び交ふカタカナ語

虚 俊

対向車にはお札する君

百 香

静御前内弁慶に嫉妬せり

虚 俊

虎が涙を女人の拭ふ

虚 俊

「レトロかわい」京都のクリームソーダ

百 香

よちくおみ足

虚 璞

不戦勝は半月板損傷により

虚 俊

IKEAのクッションを買ふ

百 香

赤きウィッグで笑まふジャニス・ジョプリン

虚 璞

妻と義母の議論

虚 俊

壁面の受胎告知を前に伏し

百 香

草の褥の翅音にびゝる

虚 璞

まだ喋る彼氏をおいて即出社

虚 俊

消費期限の次のく日

百 香

家々の水にもどりし氷柱たち

虚 璞

大ぶろしきで兎を包む

虚 俊

たこ抜きのたこ焼き三つお供へし

百 香

指をくはへる一つ目小僧

虚 璞

水脈の果を見に行く探検隊

虚 俊

小屋の料金値上げするなり

百 香

悔恨の花の吹雪につまれん

虚 璞

拳にぎつて春惜しむなり

虚 俊

令和三年九月二十一日首
令和三年十月十二日尾

(於・Zoom)

日本大学藝術学部文芸学科 浅沼ゼミⅢ

奈良県連句協会

会長 生駒さとし(聰)
副会長 もりともこ(森 智子)
事務局 谷澤 節
〒520-0042 大津市島の関1-44
(tel&fax 077-522-8379)

宮崎県連句協会

会長 黒岩昭彦
副会長 近藤蕉肝
事務局 七島純子
〒887-0021 宮崎県日南市中央通1-7-1
日南市文化センター内
宮崎県連句協会事務局
携帯1：080-6425-8885(七島純子)
携帯2：090-4625-7577(近藤蕉肝)
日南市役所：0987-31-1145
(生涯学習課 佐分 剛)

新潟県の連句を育てる会

会長 牛木辰男
事務局 小久保美子
〒950-2181 新潟市西区五十嵐
二の町8050
新潟大学・院・教育学研究科
(fax025-262-7117)

連句協会群馬県支部

会長 伊藤稜志
事務局 伊藤稜志
〒371-0811 前橋市朝倉町3-5-37
(0272-61-2297)

宮城県連句協会

会長 狩野康子
副会長 中村孝史・永瀨 丹
事務局 狩野康子
〒981-0924 仙台市青葉区双葉ヶ丘
2-5-12
(022-271-0005)

静岡県連句協会

会長 宮澤次男
事務局 宮澤次男
〒414-0051 伊東市吉田保代782-4
(0557-45-2244)

徳島県連句協会

会長 梅村光明
副会長 喜島政行
事務局 喜島政行
〒776-0005 吉野川市鴨島町喜来93-3
(0883-24-6900)

京都府連句協会

会長 筒井紘一
幹事長 河合隊雲
〒606-8225 京都市左京区田中門前町
103-21瑞林院
(090-3723-3882)

鹿児島県連句協会

会長 前田 豊
副会長 田代洋里子・日高うんま
顧問 梅村光明
事務局 大西朝子
〒890-0046 鹿児島市西田1丁目15-5
(080-3183-5077)

茨城県連句協会

会長 堀江信男
副会長 大山とし・城 依子
事務局 根本美茄子
〒319-1225 日立市石名坂町1-31-9
(0294-53-6635)

やまぐち連句会

会長 諏訪欣二
事務局 中本蒼水
〒746-0025 周南市古市2-3-43
(0834-62-1400)

岡山県連句協会

会長 大倉青帆(祥男)
事務局 今村華紅(節子)
〒710-0031 倉敷市有城193
(086-429-1550)

山梨県連句協会

会長 後藤臣彦
副会長 後藤はるよ
事務局 後藤臣彦
〒400-0814 甲府市上阿原町1258
(055-235-1653)

秋田県連句協会

事務局 佐藤康子
〒010-0826 秋田市新藤田中山台54-11
(018-832-5722)

愛知県連句協会

会長 間瀬美美
副会長 松尾博雄・稲垣渥子
事務局 宮川尚子
〒450-0024 名古屋市長区尾崎山
2-108-2
(052-662-3280)
(fax052-622-3284)

地方連句組織

愛媛県連句連盟

会長 大西素之
副会長 名本敦子・平井繁樹
事務局 岡田伊勢子
〒791-0113 松山市白水台
2-7-13
(089-923-9663)

連句協会石川県支部

支部長 藤江紫虹
事務局 宮島 茂
〒929-0327 石川県河北郡津幡町字庄
チ65
(076-289-4214)

埼玉県連句協会

会長 磯 直道
副会長 白根順子
事務局 石川光男
〒369-1203 埼玉県大里郡寄居町
寄居535
(048-581-5943)

岐阜県連句協会

会長 大野鶴士
副会長 瀬尾千草
理事長 古田 了
顧問 岡本満智子
事務局 松尾一步
〒500-8415 岐阜市加納中広江町68
(090-3389-3067)

大分県連句協会

会長 南雲玉江
事務局 南雲玉江
〒874-0902 別府市青山町8-72
(0977-24-9407)

連句協会千葉県支部

支部長 松澤龍一
副支部長 鈴木すず
事務局 松澤龍一
〒278-0037 野田市野田665
(080-9532-3729)

連句協会三重県支部

支部長 西田青沙
事務局 西田青沙
〒512-0921 四日市市尾平町3768-188
(0593-32-8931)

富山県連句協会

会長 大西紀夫
副会長 藤縄慶昭
事務局 森川敬三
〒939-8241 富山市惣在寺1306
(090-1637-0518)

香川県連句協会

会長 沖津秀美
副会長 清水定代
事務局 沖津秀美
〒761-8084 高松市一宮町357-9
(087-889-3141)

福岡県連句協会

会長 守口 薫
副会長 佐藤えつ子
事務局 村上孝枝
〒804-0021 北九州市戸畑区一
1-2-12-703
(093-871-3779)

- (2) 貸借対照表
- (3) 損益計算書（正味財産増減計算書）

2 前項により報告され、又は承認を受けた書類のほか、監査報告を主たる事務所に5年間備え置くとともに、定款及び会員名簿を主たる事務所に備え置くものとする。

（剰余金の分配の禁止）

第46条 当法人の剰余金は、これを一切分配してはならない。

（残余財産の帰属）

第47条 当法人が解散（合併又は破産による解散を除く）したときに残存する財産は、総会の決議を経て、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人又は国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

第8章 附 則

（最初の事業年度）

第48条 当法人の最初の事業年度は、当法人成立の日から平成26年12月末日までとする。

（入会金）

第49条 当法人の母体である任意団体、連句協会の当法人への権利義務承継の日の前日における会員には、第7条の入会金の支払を求めないものとする。

（設立時の役員等）

第50条 当法人の設立時の役員は、次のとおりである。

設立時理事 白杵悠治
 設立時理事 和田忠勝
 設立時理事 高尾秀四郎
 設立時代表理事 白杵悠治

（設立時社員の氏名又は名称及び住所）

第51条 設立時社員の氏名及び住所は、次のとおりである。

設立時社員

1 住所 神奈川県横浜市青葉区
 みたけ台2番地22

氏名 白杵悠治

2 住所 神奈川県横浜市港北区
 綱島東5丁目22番4号

氏名 和田忠勝

3 住所 東京都町田市図師町1333番地8

氏名 高尾秀四郎

（法令の準拠）

第52条 本定款に定めのない事項は、すべて法人法その他の法令に従う。

平成25年12月11日 制定

平成28年3月28日 第7条の年会費額を5千円に改定。

令和3年3月28日 第2条の主たる事務所を東京都狛江市に改定。

「日本連句協会」顧問・役員名簿

（顧問）磯 直道・和田忠勝・青木秀樹
 （役員）
 会 長 高尾秀四郎
 副 会 長 小川廣男・小池正博・吉田酔山
 理 事 長 林 転石

常任理事 大久保風子・岡本遊風・
 木之下みなみ・近藤蕉肝・
 白根順子・高橋 賢・宮川尚子・
 山中たけを
 理 事 梅村光明・奥野美友紀・大山とし・
 勝又丘女・栗原和宏・五郎丸照子・
 鈴木千恵子・鈴木善春・鈴木了斎・
 高岡風蘭・高山達雄・南雲玉枝・
 馬場由紀子・平井繁樹・平林香織・
 村松定史・森川敬三・渡辺 柚
 会 計 岡本遊風（兼務）
 監 事 渡部春水・東浦佳子

取引

- (3) 当法人がその理事の債務を保証することその他理事以外の者との間における当法人とその理事との利益が相反する取引(責任の一部免除)

第28条 当法人は、役員の方法第111条第1項の賠償責任について、法令に定める要件に該当する場合には、理事会の決議によって、賠償責任額から法令に定める最低責任限度額を控除して得た額を限度として、免除することができる。

(顧問)

- 第29条 当法人に、顧問を置くことができる。
- 2 顧問は、会員の中から、理事会の決議を経て会長が委嘱する。
- 3 顧問は、無報酬とする。ただし、その職務を行うために要する費用の支払をすることができる。顧問は会費を納めることを要しない。

(顧問の職務)

第30条 顧問は、会長の諮問に応え、会長に対し、意見を述べることができる。

第5章 理事会

(構成)

第31条 当法人に理事会を置く。

2 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(権限)

第32条 理事会は、次の職務を行う。

- (1) 当法人の業務執行の決定
- (2) 理事の職務の執行の監督
- (3) 会長、副会長、理事長及び常任理事の選定及び解職

(招集)

第33条 理事会は、原則として年3回、会長が招集する。

2 会長が欠けたとき又は会長に事故があるときは、副会長が理事会を招集する。

(議長)

第34条 理事会の議長は、会長がこれに当たる。会長に事故があるときは、当該理事会において議長を選出する。

(決議)

第35条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

2 前項の規定にかかわらず、法人法第96条の要件を満たしたときは、理事会の決議があったものとみなす。

(議事録)

第36条 理事会の議事については、法令で定めるところにより議事録を作成する。

2 出席した会長及び監事は、前項の議事録に署名又は記名押印する。
(理事会規則)

第37条 理事会に関する事項は、法令又はこの定款に定めるもののほか、理事会において定める理事会規則による。

(常任理事会)

第38条 常任理事会は、原則として隔月に会長が招集する。常任理事会に関する事項は、理事会において定める常任理事会規則による。

第6章 基金

(基金の拠出)

第39条 当法人は、会員又は第三者に対し、基金の拠出を求めることができるものとする。

(基金の募集等)

第40条 基金の募集、割当て及び払込み等の手続については、理事会の決議を経て会長が別に定める基金取扱い規程によるものとする。

(基金の拠出者の権利)

第41条 基金の拠出者は、前条の基金取扱い規程に定める日までその返還を請求することができない。

(基金の返還の手続)

第42条 基金の返還は、定時総会の決議に基づき、法人法第141条第2項に定める範囲内で行うものとする。

第7章 計算

(事業年度)

第43条 当法人の事業年度は、毎年1月1日から12月31日までの年1期とする。

(事業計画及び収支予算)

第44条 当法人の事業計画書及び収支予算書については、毎事業年度開始日の前日までに会長が作成し、理事会の決議を経て総会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も同様とする。

2 前項の規定にかかわらず、やむを得ない理由により予算が成立しないときは、会長は、理事会の決議に基づき、予算成立の日まで前年度の予算に準じ収入又は支出することができる。

3 前項の収入支出は、新たに成立した予算の収入支出とみなす。

(事業報告及び決算)

第45条 当法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、会長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を経て、定時総会に提出し、第1号の書類についてはその内容を報告し、第2号及び第3号の書類については承認を受けなければならない。

- (1) 事業報告

(議決権)

第17条 各会員は、各1個の議決権を有する。

(決議)

第18条 総会の決議は、法令に別段の定めがある場合を除き、総会員の議決権の過半数を有する会員が出席し、出席会員の議決権の過半数をもってこれを行う。

2 前項の規定にかかわらず、次の決議は、総会員の半数以上であって、総会員の議決権の3分の2以上に当たる多数をもって行う。

- (1) 監事の解任
- (2) 定款の変更
- (3) 会員の除名
- (4) 解散

(5) その他法令で定められた事項

3 前2項の規定にかかわらず、法人法第58条の要件を満たしたときは、総会の決議があったものとみなす。

(議事録)

第19条 総会の議事については、法令の定めるところにより議事録を作成し、総会の日から10年間主たる事務所に備え置く。

第4章 役員等

(役員の設定等)

第20条 当法人に、次の役員を置く。

理事 3名以上35名以内

監事 2名以内

2 理事のうち、1名を会長とし、5名以内を副会長、1名を理事長、10名以内を常任理事とすることができる。

3 この法人の会長を法人法上の代表理事とする。

(選任等)

第21条 理事及び監事は、総会の決議によって選任する。

2 会長、副会長、理事長、及び常任理事は、理事会の決議によって理事の中から定める。

3 監事は、当法人又はその子法人の理事若しくは使用人を兼ねることができない。

4 理事のうち、理事のいずれかの1名とその配偶者又は3親等内の親族その他特別の関係にある者の合計数は、理事総数の3分の1を超えてはならない。監事についても、同様とする。

5 他の同一の団体(公益法人を除く。)の理事又は使用人である者その他これに準ずる相互に密接な関係にある者である理事の合計数は、理事の総数の3分の1を超えてはならない。監事についても、同様とする。

(理事の職務権限)

第22条 会長は、当法人を代表し、その業務を執行する。

2 副会長は会長を補佐し会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順序でその職務を代行する。

3 理事長は理事会及び常任理事会を運営する。

4 常任理事は、会長、副会長及び理事長を補佐し理事会の議決に基づき当法人の業務を執行する。

5 前各項に掲げられた理事は、毎事業年度毎に4か月を超える間隔で2回以上、自己の職務の執行の状況を理事会に報告しなければならない。

(監事の職務権限)

第23条 監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する。

2 監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、当法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。

(任期)

第24条 理事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時総会の終結の時までとし、再任を妨げない。

2 監事の任期は、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時総会の終結の時までとし、再任を妨げない。

3 補欠として選任された理事又は監事の任期は、前任者の任期の満了する時までとする。

4 役員は、辞任又は任期の満了後において、定員を欠くに至った場合には、新たに選任された者が就任するまでは、その職務を行う権利義務を有する。

(解任)

第25条 役員は、総会の決議によって解任することができる。

(報酬等)

第26条 役員報酬、賞与其他の職務執行の対価として当法人から受ける財産上の利益は、総会の決議をもって支給することができる。

(取引の制限)

第27条 理事が次に掲げる取引をしようとする場合は、理事会において、その取引について重要な事実を開示し、理事会の承認を得なければならない。

(1) 自己又は第三者のためにする当法人の事業の部類に属する取引

(2) 自己又は第三者のためにする当法人の

『日本連句協会』定 款

第 1 章 総 則

(名称)

第 1 条 当法人は、一般社団法人日本連句協会と称する。

(主たる事務所)

第 2 条 当法人は、主たる事務所を東京都狛江市に置く。

(従たる事務所)

第 3 条 当法人は、理事会の決議を経て、必要な地に従たる事務所を置くことができる。

(目的)

第 4 条 当法人は、連句文芸の創造的発展とその普及ならびに連句実作者、連句愛好者の内外における交流を図り、連句文芸の興隆に寄与することを目的とし、その目的に資するため、ユニバーサルデザインの精神に基づき次の事業を行う。

1. 全国大会および地方大会の開催、共催
2. 会報(隔月)の発行
3. 連句年鑑の発行
4. ホームページの運営
5. 国民文化祭への後援
6. 前各号に掲げる事業に附帯又は関連する一切の事業

(公告)

第 5 条 当法人の公告は、主たる事務所の公衆の見やすい場所に掲示する方法により行う。

第 2 章 社員及び会員

(入会)

第 6 条 当法人の目的に賛同し、入会した者を会員とする。

2 会員となるには、当法人所定の様式による申込みをし、会長の承認を得るものとする。

3 当法人の会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律(以下、「法人法」という。)上の社員とする。

(経費等の負担)

第 7 条 会員は、当法人の目的を達成するため、それに必要な経費を支払う。

2 会員は、入会金 2 千円及び 1 月から 12 月までの年会費として 5 千円を納入しなければならない。

(会員の資格喪失)

第 8 条 会員が次の各号の一に該当する場合には、その資格を喪失する。

- (1) 退会したとき。
- (2) 成年後見人又は被保佐人になったとき。

(3) 死亡し、若しくは失踪宣告を受け、又は解散したとき。

(4) 2 年以上会費を滞納したとき。

(5) 除名されたとき。

(退会)

第 9 条 会員はいつでも退会することができる。ただし、1 か月以上前に当法人に対して退会届を提出するものとする。

(除名)

第 10 条 当法人の会員が、当法人の名譽を毀損し、当法人の目的に反する行為をし、会員としての義務に違反するなど除名すべき正当な事由があるときは、法人法第 49 条第 2 項に定める社員総会の特別決議によりその会員を除名することができる。

(会員名簿)

第 11 条 当法人は、会員の氏名又は名称及び住所を記載した会員名簿を作成する。

第 3 章 社員総会

(構成)

第 12 条 総会は、すべての会員をもって構成する。

(権限)

第 13 条 総会は、次の事項について決議する。

- (1) 理事及び監事の選任又は解任
- (2) 理事及び監事の報酬等の額
- (3) 事業計画及び収支予算の承認
- (4) 事業報告及び収支決算の承認
- (5) 定款の変更
- (6) 解散
- (7) 会員の除名
- (8) その他総会で決議するものとして法令又はこの定款で定められた事項

(開催)

第 14 条 当法人の総会は、定時総会及び臨時総会とし、定時総会は、毎事業年度の終了後 3 か月以内に開催し、臨時総会は、必要に応じて開催する。

2 前項の総会をもって法人法上の社員総会とする。

(招集)

第 15 条 総会の招集は、理事会がこれを決議し、会長が招集する。

2 総会の招集通知は、会日より 1 週間前までに各会員に対して発する。

(議長)

第 16 条 総会の議長は、会長がこれに当たる。会長に事故があるときは、当該総会において議長を選出する。

一般社団法人

日本連句協会定款

年鑑担当

○編集

〒330-0053 さいたま市浦和区前地二一九-二二

大久保風子

(電話・FAX) 〇四八-八八一-二七五六

○購入申込・発送

○連句年鑑会計・送金先

〒278-0037 野田市野田六七七-1-A 二二五

木之下みなみ

(電話・FAX) 〇四一七-二五-五三九九

郵便振替 〇〇二三〇-1-1〇七四二三

加入者名 木之下みなみ

○日本連句協会会員名簿担当

宮川 尚子

〒458-0024 名古屋市緑区尾崎山二二一〇八一-二

宮川 尚子

(電話) 〇五二-六三二-三三八〇

(FAX) 〇五二-六三二-三三八四

■ 編 集 後 記 ■

★「連句年鑑令和四年版」をお届けします。

★コロナ禍と言われてから二年半、不要不急の外出を避けているうちに、座が設けられなかった上、会員の高齢化が進みグループを解散する…という報告が聞こえます。そんな中、令和四年版には81グループから108作品の出稿がありました。グループという枠を超えた方々との作品でしょうか、個人作品には17巻があり、そこには百韻もありました。大きなイベントでの作品の発表の場にもなっております。

★文章ページには国民文化祭の報告が二つ載りました。宮崎の国文祭は2020年がコロナ禍で一年延期としたものの7、8月は全国的に感染者が拡大し已む無く中止となり、返す返すも残念でした。ご準備くださったすべての皆様に感謝申し上げます。

★評論「他者に出会う―短歌の視点から―」の執筆者金川宏氏は歌人です。国文祭が和歌山県で開催されるということで準備段階の連句の座で初めて連句に出会ったそうです。「歌人からみる連句」を書いてくださいました。金川氏はもう和歌山県の連句を育てる会副会長です。これから和歌山県に連句の輪を広げていってくださるようお願いいたします。

★エッセイ「私の好きな芭蕉の言葉」の執筆者牛木辰男氏は、2019年の国民文化祭にいがた「連句の祭典」で実行委員長でした。翌年から新潟大学学長をつとめておられます。以前から芭蕉に関する文章をあちこちに発表されているらしいですが、この度はご自身お気に入りの「芭蕉の言葉」十五を紙面の許す限り述べて頂いた次第です。

★もう一編のエッセイはさくら草連句会代表の澁谷盛興氏です。氏は「奥の細道」新庄で芭蕉さんが立ち寄った「澁谷家」の子孫です。澁谷家で巻かれた歌仙・三つ物が発表されています。明治政府となってから澁谷家は京都へと移るようすもあります。「ファミリーヒストリー」として読ませて頂きました。

(大久保風子)

令和四年六月二十五日 印刷
令和四年六月 三十日 発行

令和四年版 連句年鑑

定価 一、五〇〇円

編集人代表 大久保 風 子

発行所 〒221-0011 東京都狛江市西和泉二丁目45-06
林 転石方

一般社団法人 日本連句協会

電話 ○四二一四八九一〇七九〇

公式サイトアドレス
<https://renku-kyokai.net/>

印刷所 〒336-0021 さいたま市南区別所三丁目1-10

関東図書株式会社

電話 ○四八八六二二九〇一

FAX ○四八八六二二九〇八

